
狩人物語 ～ 絶龍人物語 ～

リュウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩人物語 ～ 絶龍人物語～

【Nコード】

N4368I

【作者名】

リュウガ

【あらすじ】

この物語は心を閉ざし、戦う事だけが居場所だと思つ青年の物語・
・
バトルあり、涙あり(？)、恋愛ありのハンティングストーリー
主人公は心を開くのだろうか？

プロローグ 絶龍人誕生

この物語の始まりは・・・

数年前のシュレイド攻防戦にまで遡る・・・

「早く逃げるー！！！荷物は最低限にまで減らせえ！！！！一刻も早くこの場を去るんだ！！！！」

ハンターの甲高い声が響く・・・

シュレイド城・・・ここは、かつて美しき城と言われるほどの美しさがあつた・・・

しかし、ある日、悪魔がやってきた・・・

黒く、とても大きな翼・・・

全ての闇を司ると言ってもいいほどの禍々しく、強靱な鱗

その口から発せられる炎は岩石を微塵に砕く・・・

そんな中、一人の少年がその“悪魔”と対峙していた

「はあああッ！！！！！！」

「グアアアアアアアアアッ！！！！」

少年は高く飛び、悪魔の尻尾踏み台に、“悪魔”の顔まで飛んだ・・・

そして、手に持っている双剣・・・封龍剣【超絶一門】が“悪魔”の左目を捕らえた

プロローグ 絶龍人誕生（後書き）

どうですか？感想をもらえると嬉しいです。

さあ、少年はどうなったのか？

次回に続きます。

第一話 誇り高き戦士

シュレイド攻防戦から何年の時が流れた事だろう……

シュレイド城は今では第S級危険区域に指定されるほどの危険地帯となっていた

理由は言うまでも無い。

いつ悪魔が降り立つか分からないのだ。隔離するに決まっている・

シュレイド攻防戦……

これは非難させていたハンター、逃げようとした難民、街も全て悪魔によって破壊され、死んでいったという……

そして、シュレイド城から遠く離れた大きな街ドンドルマではいつでも緊急事態に対応できるように、凄腕ハンターがうじゃうじゃと居るのだ。

しかし、ドンドルマの中でも凄腕と言われる3人の上級ハンターが居た。

彼女達は新米にもかかわらず。リオレウスを狩ることに成功し、ドンドルマ上部からも認定されるほどの腕前だった

「はぁ……」

ハンター達の集う酒場で、ため息をつく美女が居た。

身にまとっている装備はリオレウスの亜種から剥ぎ取れる装備

リオソウルU装備である・・・
蒼い鎧からでも見えるほどの大きな胸、そして、誰もが惹かれるで
あろう、緑色の目・・・

彼女の名前は「エアロ・フィール」

その反対側に座っているのはレイアSの装備を身にまとった女性・・・

・
「フィリス・ホーク」は不思議そうな顔でエアロを見た

「どうしたの？」

「どうしたのじゃないわよ。そろそろ私達もG級の依頼がきてもお
かしくないかなあって思ってるの。」

エアロは背中にあるクイーンブラスター？を触りながら言った
そして、エアロの横に座っている女性・・・
「リリア・リンス」はぶっきらぼうに答えた

「知らないわ。私は純粹に狩りをしたいだけよ。」

「もう、リリアはいつもそうだからなあ・・・いい加減その性格直
らないの？」

エアロがリリアに言い放った

リリアはやはりリツンとした態度で答えた

「性格をどうこう言われる筋合いはないわ。」

リリアは立ち上がり、酒場を出て行った

エアロとフィリスは呆れながら酒を飲み始めた

「まったく。フィリスも何か言いなさいよ。」

「リリアさんにはリリアさんのやり方があるんですよ。」

フィリスがエアロにそういうと、二人は立ち上がり、代金を払い酒場を後にした

リリアは宿へ戻ると早速自分の大剣、ブルーウィングの手入れを始めた

リオレウス亜種の素材を使い、炎属性が装備されたのがこの剣である。

しかし、大剣は威力が高い分、動きは遅いのだ

その代わり、攻撃力に特化していて、その一撃は強力である。

リリアは男が大嫌いだった

昔、自分を襲おうとしたゲスな男のことを思い出すとイライラしてたまらなかった。

ブルーウィングの柄を握り締めた

「最悪だ・・・」

ブルーウィングを起き、ベッドに倒れた

そして、思い浮かべるのは昔大きく取り上げられたあの日の事・・・

「シュレイド攻防戦」……

ここには自分の父親が参加しており、悪魔に挑み、散っていった……

・
自分は父を尊敬して生きてきた

だから、ハンターになった。

ハンターになって、自分の父に追いつこうと思った……

だが、父はもう居ない……

「父上……」

ベッドに包まれ、思い出すのは忘れられないあの父の笑顔……

刹那、ドンドルマにとても大きな警報が鳴らされた

そう、モンスターが襲撃してきたのである……

リリアはブルーウィングを掴み取り、街へと赴いた……

何かから逃げるように街になだれ込んできた

「はあああッ！！！！！」

エアロはクイーンブラスター？でガブラスを狙い撃ち、フィリスもライトボウガンである「サンドフォール改」で狙い打つ

サンドフォール改は砂竜ガレオスのボス「ドスガレオス」の素材を使ったサンドフォールの改造版である。

通常弾Lv2を連射することができるのだ。

フィリスも的確に狙いを定め、攻撃を決めていく

他のハンターも負けじと応戦するが、彼女達三人は別格で凄かった。

・

強く、美しい・・・

そんな彼女達にカッコいい所を見せようと必死になるが、中々上手くいかない・・・

そんな中、残り5匹になったガブラスを一発の風の塊が襲った

風は勢いをとめずに街の壁にガブラスごとたたきつけた

あたり一体にガブラスの血が飛び散る・・・

それは、突然の出来事だった

街に降り立ったのは・・・

「クシャル・・・ダオラ・・・！！！」

リリアが舞い降りた古龍を見つめ言った

「グオオオオオオツ!!!!!!」

鋭い咆哮が辺り一体のハンターを怯ませた
勿論、リリアも例外ではない。

リリアの装備はナルガス装備なのだ。

耳栓のスキルは付属していない……

クシャルダオラは先行していたハンター達を蹴散らしながらリリア
に向かい走り出していた

先行していたハンター達は尻尾の一振りです壁に叩きつけられている、
幸い、まだ死人は出ていない……

しかし、クシャルダオラの突進をマトモに喰らったら……

街の広場に降り立ったクシャルダオラはリリア目掛けて突進してい
る……

リリアは大剣で防御の体制に入った……

しかし……

凄まじい一撃を正面から喰らい、大剣が後ろへ吹き飛んだ
ブルーウィングはエアロとフィリアが居る所まで吹き飛び、突き刺
さった

そして、無防備なリリアは倒れてしまった……

どうやら、足を強打してしまい、挫いてしまったようだ

リリアを助けようと弓矢で攻撃するも、風のバリアでクシャルダオ
ラには届かない……

リリアに止めをさそうと、風ブレスの予備動作に入った

「くっ!!! (ここまでなのか!? 私は!?)」

リリアはその場で死を覚悟し、目を瞑った・・・
しかし、風ブレスが来ない・・・？

ゆっくり目を開けると、目の前に立っていた赤い装備の男がリリアを守っていた様だ・・・
握られている太刀は見た事がなかった・・・
しかし、分かることは唯一つ。

「風ブレスを・・・斬った・・・？」

リリアはこの瞬間、自分の中で何か熱い感情が芽生えたが、目の前に居る男をただ見つめていた
後姿だが、分かるのは男だという事・・・

そして、リリアの目の前の男がクシャルダオラに向かい、言い放った

「不吉を・・・届けに来たぜ・・・!!!!」

第一話 誇り高き戦士（後書き）

どうでしょう？リリアの前に現れた男は赤い装備を身に纏い、不吉の黒猫の様な台詞を言い放った！

さあ、彼は一体何者なのか？

次回！

「心を閉ざした英雄」
お楽しみに！！！！

第二話 心を閉ざした英雄

リリアはまだ困惑していた

クシャルダオラあの風ブレスを斬れるのか？

それ以前に、この男はいつ私の前に現れたのだ？

しかし、なんだろう・・・この胸の中が熱くなる思いは・・・

声からしても・・・まだ若い。

私とそう変わらないだろう・・・

リリアが考え事をしているが、青年には届いていないだろう・・・

青年は龍刀を強く握り締め、クシャルダオラへと向かった

クシャルダオラは前足を高く振り上げ、振り払いの動作を始めた

「危ない！！！」そう叫ぼうとした時だった、振り払おうとした前足を飛び越え、風のバリアの弱点である、真上を簡単に奪った

そこから、握っていた龍刀を突き刺し、クシャルダオラは痛みで怯み、青年は華麗にアクロバティックな動きを行っていた

そして、突き刺さった龍刀を掴み、そのまま横へ振り払った

案の定、羽に傷がつき、クシャルダオラは青年を振り落とそうと身震いをした。

青年は背中から弾き飛ばされたが、その場で着地し、クシャルダオラへと攻撃を重ねる

クシャルダオラは青年の速さに翻弄され、尻尾で振り払おうとしているが、中々当たらない……。すると、クシャルダオラは前足を蹴り上げ、後ろ足に体重をまかせ、その場で咆哮をしたが、青年はその隙を見逃さず、クシャルダオラへと迫る

咆哮が効かない事に気づき、クシャルダオラは急いで攻撃しようとしたが、青年が居ない……？

違う、居なくなっただのではない、クシャルダオラの死角である、顔の横に待機していたのだ
そして、龍刀をチャキツと空を突き上げる様に構えた
青年はその場で高く飛び、クシャルダオラの首を切り落とそうとしたが……

クシャルダオラはどうやらそれに気づいたのか、身体を少しずらし、切り落とされるは回避できたが、角が折れてしまった

角が地面にパラパラと落ちる
クシャルダオラはそのまま尻尾で叩きつけようとしたが、剣を構えている青年はニヤリと笑った

「はぁあああッ！！！」

向かってくる尻尾に向かい、反対側から切りかかったのだ
すると、尻尾と龍刀は接触した……

龍刀からバチバチと黒い稲妻の様な物が尻尾を包み込んだ

そして、尻尾は血を噴出しながら切断された

「ギヤアアアアオ!!!!」

その場でもがき苦しむクシャルダオラはさらに青年へと怒りの炎を燃やした

「……………」

青年から、さっきまでなかったドス黒いオーラが発せられた・・・

これは・・・殺気だ・・・

禍々しい殺気がクシャルダオラを覆った・・・

すると、クシャルダオラは翼を広げ、逃げようとした

それに気づくと、青年はクシャルダオラに近寄ったが、龍風圧のせいで近づけず、クシャルダオラを取り逃がしてしまった・・・

誰もが啞然と見ていた。

古龍クシャルダオラが逃げ出すほどの相手・・・

しかも、目の前で風ブレスを切り裂いた青年・・・

もう訳が分からなかった

青年は振り向き、リリアへと近づいた
そして、リリアへと質問した

「大丈夫か？」

この時、自分の父親の声を青年の声が重なった・・・
そして、ヘルムから覗かせる青色の目を見つめ、少しはみ出してい
る赤色の髪に心を奪われた・・・

「・・・父上・・・？」

目の前に居る青年を自分の父親と間違えてしまった。
すると、青年は少しピクツと眉を動かした

「・・・違う。オレはゼロ・・・ゼロ・ダークネスだ。」

「!?!?!?!?!」

リリアはその名を聞いて驚いた・・・

ゼロ・ダークネス・・・それは・・・

人間を遥かに凌駕するといわれる男・・・

そして、シュレイド城に度々出入りしているという物好き・・・

そして・・・

その通り名は・・・

「ゼツリュウヒト絶龍人・・・!!」

第二話 心を閉ざした英雄（後書き）

どうですか？

リアの抱いた思いは・・・

そして、彼の閉ざしてしまった心は・・・？

次回「絶龍人」

お楽しみに！！！！！！

第三話 絶龍人

「お前が・・・絶龍人ゼツリュウジン・・・！！！！」

絶龍人・・・

それは、生ける伝説と謳われる程の力を持ち、龍を絶対的な力で捻じ伏せ、殺す・・・

怪物といわれ、昔、迫害を受けていたと噂がある・・・

「リリアー！！！！大丈夫かー！！！！」

街の方からフィリアとエアロがこちらへ向かってきた
すると、ゼロはその場から立ち去ろうとしたが、座り込んでいるリリアの手がいつの間にかレックスX装備を掴んでいた

「・・・なんの用だ？」

「あっ・・・いや・・・／／／／／」

こちらを向かれ、顔が少し赤くなる・・・

（な、なんで私がこんなに恥ずかしい思いをするのだ！？／／／）

すると、ゼロはゆっくりとリリアの手を掴み「立てるか？」と質問した

「あ、ああ／／／」と赤い顔でゼロに答えた

すると、立ち上がると、やはり、捻った足が悲鳴をあげた・・・

「やめておけ。俺が居ると、お前達も不幸になる。」

そう言い放ち、ゼロは去っていった……
リリアはゼロの背中が見えなくなるまでただただ見ていた……

クシャルダオラ襲撃から数日が経過した。

街には復興作業が行われていた。

しかし、被害は予想以上に軽い。

壁にヒビが入る程度の被害で済み、けが人は出てしまったが、死人は一人も出ていない。

その後、クシャルダオラの尻尾等はドンドルマ上層部が回収し、研究に使うらしい。

しかし、クシャルダオラが去ったのだが、リリアは宿で、ただ溜め息をついていた……

それはもう、黒いオーラを放ちながら……

フィリア等が時々様子を見に来るが、その度に溜め息……
すると、エアロが少しキレた。

「おい、リリア……!! いい加減にしてくれ……!! 何回目の溜め息だ

「コラ!!!」

エアロがフィリアと共に部屋に入ってきた
しかし、リリアはやはり溜め息ばかり・・・

「なあ、フィリア。こいつを明日の弓の的に・・・」

「だ、駄目です!!!」

エアロがフィリアに確認を入れようとしたが、全て言う前にフィリアが止めた

すると、リリアが夢の国から帰ってきたのか、二人に話を始めた

「なあ・・・アイツって何処に所属してるんだろうな・・・ここ

(ドンドルマ)か?それとも、どこかの村か?・・・はあ。」

これ程の美女に溜め息をつかせるほどの男はそうそう居ないだろう。
すると、フィリアが見飽きたのか、依頼クエストを送ってきた村の資料を渡した

「いいですか、リリアさん。次の依頼ですが、ハーツ村の村長さんからの依頼です。」

ハーツ村・・・聞きなれない村だ

それもそうだ。実はハーツ村は港町から経由しなければ行けない村である。

簡単に言うと、小さな島にある村なのだ。

実はハーツ村に行くには幾つも手段があるのだが、どれも遠回りに

なってしまうので、殆ど船で行くのが基本なのだ。

「それですね。近頃、港町フルーンの近くでガノトトスが目撃されましてね。それを狩って欲しいとの事です。どうします？受けますか？」

「そんなに決まってる。受けるよな？」

「・・・ああ。」

リリアが静かに言った

しかし、頭の中はやはりあの男ゼロ・ダークネスの事で一杯だった。あの男の事を思うと、なぜか胸が熱くなる・・・

それに、何故かゼロの事なら全て知りたいという欲望が彼女を突き動かす・・・

「なら、行こうぜ！」

すると、フィリアとエアロはその場から去り、隣の部屋へ行き、装備を整える

勿論、リリアも。

ドンドルマからフルーンまで大体一日。
アプトロスを使い、向かうのだ。

彼女達はアプトロスに荷物を乗せ、港町フルーンまで向かう・・・

その頃、ゼロは溪谷から眺める事ができる夕日を堪能していた。

『わ、私達のチームに入らないか！？／／／』

そういわれたのは初めてだった。

思い出すのは依頼で行った街で言われた言葉

『化け物！！！！』

『死ね！！！！』

『消えろ！！！！化け物！！！！』

この言葉を思い出すと、胸が苦しくなる。

だから、俺は誰とも関わらない。

いや、関わってはいけない。

そう決め、誰とも関わることもなく、死ぬことを決めた・・・

しかし、こんな自分を受け入れてくれる街があった

『ねえ、君。僕の村に来ないかな？小さな村だけどいいトコだよ。』

それは、ハーツ村の村長から言われた言葉・・・
嬉しかった。

こんな奴でも受け入れてくれた・・・
暖かな笑顔で・・・

「・・・・・・・・・・」

いつの間にか夕闇が空を覆っていた。
すると、遠くから何か鳥のような物がこちらへ向かってくる。
鷹だ。足には手紙のような物を持っている。
伝書鳩ならぬ伝書鷹・・・

「・・・トト、どうかしたのか？」

手を掲げ、鷹を手に乗せた
すると、足に持っている手紙を嘴で渡された
受け取ると、村長からの緊急の手紙だった
急いで開けると、ガノトトスを狩って欲しい。
ついでに、戻って来いよ言う手紙だった。

丁度いい。出稼ぎも終わったし。
帰るにはいい機会かもしれない。
そう思い、防具と武器を取り出した。

「よし、帰るか。」

そういい、溪谷の近くにある水浴び場で休ませているアプトロスの「ルル」のところへ行き、荷物を置き、港町フルーンへ向けて出発した。

第三話 絶龍人（後書き）

さあ、先に出発したりリア達は狩りへ、そして、後から向かうゼロは村へ。

二つの道が重なり、新たな奇跡を生み出す？

ゼロ「・・・そんなわけないだろ。」

あつ、居たんだ。ゼロ。

ゼロ「うるさい。とっとと予告しないか。」

分かったよ。

次回！「港町フルーン、重なる二人の道！」

ゼロ「……………お楽しみに？」

ちゃんと言おうぜ……！！

第四話 港町フルーン、重なる二人の道（前書き）

ちよつとしたネタ集

ゼロ『なあ、俺と結婚してくれ・・・』

リリア『え！？そんな・・・いきなり言われても・・・』

ゼロ『嫌・・・か？』

リリア『・・・ちゃんと死ぬまで幸せにしろよ・・・』

ゼロ『ああ・・・』

リリア『なんてあつたらいいなあ・・・』ぽっっ

作者『どうかしたか？』

リリア『ななな、なんでもない！！！！』

作者『変な奴。』

第四話 港町フルーン、重なる二人の道

ここは、港町フルーン。

港町のここはなんとと言っても、とても広いビーチなどで有名で、ここで結ばれたカップルはラブラブな毎日を送れるとか……

実際、昔有名だった男ハンターと女ハンターの結ばれるまでの道のりの最後に、このビーチで告白したと言う文章が書かれている。

「フルーンねえ……久々に来たけど、やっぱりガノトスのせいで人居ないな」

エアロがフルーンの町並みを見ながら歩いていた
いつもなら愉快的なこの町は活気があふれているが、今はガノトスが現れた事によって活気がまったくと言っていいほど無い。

いつもなら賑わっているこの通りも人っ子一人歩いていない。
そんな中、美女三人はただただ町並みを歩きながら見ていた。

「フィリアー、ガノトスが現れたのっていつ頃？」

エアロがフィリアに質問した。
すると、フィリアはすぐに答えた

「ええっと、三日前にビーチに現れて、3人負傷したらしいですよ

「?まだ死人は出てませんが、危ないから即刻対処してくださいと書かれています。」

手に持った資料を見ながら答えた

すると、エアロとリリアの空気が変わった

フィリアも海辺で動いているあの影を見た瞬間、固まった

そう、ガノトトスが陸に上がっているではないか。

ゆっくりとビーチ近くの木に隠れる・・・

エアロはクイーンブラスター?を構え、木の影から狙いを定める

そして、弓矢をガノトトス目掛けて打ち出した

ガノトトスの身体に弓矢が突き刺さり、ガノトトスの悲痛の叫びが聞こえた

すると、三人は前に出た

そして、リリアはガノトトスの気を引きながら攻撃を重ねていく

フィリアは麻痺弾を装填し、ガノトトスを狙い打つ

エアロは毒ビンを付着させた弓矢をガノトトスに撃ち続け、ガノトトスの表情が暗くなった

そう、毒がガノトトスを蝕んでいるのだ

動きが鈍くなったガノトトスはリリアを吹き飛ばそうと尻尾を振るしかし、リリアは間一髪でよける

そして、フィリアの放った麻痺弾が効いてきたのか

ガノトトスは痙攣を起こしながら動かなくなった

チャンスが到来したりリリアは大剣を後ろに構え、剣に力を込める

そして、思い切り振り下ろし、ガノトトスに致命傷与え、ガノトトスはその場で倒れた

「やったぜ!!!」

エアロが喜び、弓をしまう。

フィリアも安心し、サンドフォール改を背中にしまった。

リリアも警戒しながらこちらへ向かってきた

「やったか？」

「おそらくな。」

リリアは剣に付着した血を見た

ブルーウィングの火属性の効果で血は蒸発し、血の焦げた臭いが三人を覆った

安心しきった刹那

後ろから叫び声が聞こえた

「伏せろ!!!!!!」

どこかで聞いた事のある声が木霊し、三人は伏せた

すると、目の前で何かとても大きな水がピチャピチャと三人に飛び散ってきた

いつの間にか目の前には赤い装備を身につけた青年

ゼロ・ダークネスは三人を守るように大剣を構え、ガノトトスの水ブレスを防いでいる

「.....くっ、ぐああっ!!!?」

「何……する気だ……」

ゼロの声にさつきまでの元気がない……
恐らくさつきので疲れたのだろう。

しかし、無理をしてまでどうして船着場に行く理由が分からなかった

「肩に怪我をされてるのでしょうか？宿に送りますから、それまで肩を貸します。エアロさん、手伝ってください。ですが、少々お待ちください。」

フィリアはエアロに助けを求め、二人でゼロを運ぶことにしたが、その前にガノトスから素材を剥ぎ取ることにした
フィリアはぽーっとゼロを見ていると、ハッと現実に戻り、ガノトスへと歩いている二人に走って追いついた

「くそ……」

ゼロは動かない体を無理矢理動かそうとした
しかし、はやり動いてはくれない。

『伏せる！！！！』

なんであんな事言ってしまったんだろう……
あのまま放っておけば、俺はこんな傷は負わなかった……
でも、なんで……

「お待たせしました。」

そういうと、フィリアとエアロがゼロの肩を背負い、歩き出した
そして、リリアはゼロの暗夜剣【宵闇】とレックスXヘルムを持ち、
三人と並んだ

「……………」

ゼロは何も喋ろうとしない

すると、フィリアがゼロに質問をした

「あなた、絶龍人なんですよね？」

「……………ああ」

ゼロが目を瞑り、答えた

すると、フィリアが続けて質問をした

「では、質問なのですが、貴方がシュレイド攻防戦に居たと言っ
のは本当ですか？」

「……………」

ゼロはその質問を答えようかと迷った
すると、エアロがゼロに言い放った

「答えるとは言わねえ。でも、できれば答えてくれ。」

「……………ああ、確かに。俺はあの場所に居た……………」

ゼロは目を開け、静かに言った
すると、リリアがゼロに質問した。

「じゃ、じゃあ、リオン・リンスと言う男なんだ。知ってるか？」

「!?!?なんで・・・リオンさんを知ってる？」

ゼロは驚き、リリアに質問した

「リオン・リンスは、私の父親だ。私はリリア・リンス。正真正銘の一人娘だ。」

リリアがそう答えると、ゼロは少し黙り、言った

「俺は・・・あの人とそこまで関わっていない。しかし、攻防戦の前夜、会っただけだ。」

「本当か!?!?その話、詳しく「駄目だ。」え・・・?」

リリアが最後まで言おうとしたが、ゼロは静かに言った
そして、ゼロは話を続けた

「会ったといっても、ただすれ違っただけだ。」

「そ、そうか・・・」

リリアは悲しい顔をし、目線を下に下ろした・・・

(リオンさん・・・昨日助けたこの子が・・・アンタの自慢の娘さんか・・・)

ゼロは自分の師匠、ラグナス・ステイングの親友、リオン・リンスと一緒に食事をした事があるのだ。

なんでも、自分と同じ年頃の娘が居るから仕送りを送ってるそうだ。

「・・・自己紹介がまだだったな。俺はゼロ・ダークネス。絶龍人なんて呼ばれてる。」

宿の前に到着し、立ち上がったゼロは改めて自己紹介した。

すると、フィリアとエアロも自己紹介をした。

「私はフィリス・ホークといいます。フィリアと呼んでください。

(とうとう・・・意外と優しい人なんですね・・・／／／／)」

「私はエアロ・フィールだ。よろしくな。ゼロ(なんだよコイツ！めっちゃくちゃカッコいいじゃねえか!!!ああ、顔赤いのバレてねえかなあ・・・／／／／)」

「私はリリア・リンスだ。よろしく頼む。(ああ・・・なんでだろう・・・ゼロを見ているととても胸が熱くなる・・・／／／／)」

すると、四人はハンター専用の宿に止まる事にした。

まず、部屋を取り、ゼロの傷の手当てをすることにした。

「本当に大丈夫だ。・・・痛っ」

「なァーにが大丈夫だ！思いっきり痛がってるじゃねえか！！！」

肩を叩いたエアロはゼロの嘘を見事に見破った

どうやら、ゼロは無理をしても、遣り通すと言う強い信念がある様だ・・・

「とりあえず、装備を取らせてもらいますね。」

そういい、フィリアはゼロの装備を丁寧に外していく

すると、装備の下からは数々の傷跡が痛々しく残っていた

「こんなに傷だらけで・・・」

フィリアが薬草を磨り潰し、身体に塗っていく

すると、ゼロは何も言わず、ただ我慢していた

その光景をとて複雑な感情を抱きながら見ているフィリアの姿があった・・・

（な、なんで私がこんな感情を持たねばならんだ・・・）

フィリアがゼロの傷を手当てしているだけなのに・・・

何故か胸の中が締め付けられ、不思議な感覚になった・・・

（わ、私が・・・この男に・・・こ、好意を抱いてるとでも言うのか・・・？）

昔から父親を目指して生きてきた彼女は恋愛感情という物は知らな

いのだ。

ましてや、独占欲と言うのも知らないのだ・・・
恐らく、彼女が三人の中で一番独占欲が強いだろう・・・

「はい。塗り終わりました。」

フィリアから解放されたゼロは即効でインナーを着始め、レックス
X装備に手をかけようとした

「あ、待ってください！まだ傷はふさがってません！せめて、明日
まで待ってください！」

「俺が居ればまた他人に迷惑がかかる。それに、お前等にも迷惑が
・・・」

「そんなのどーでもいいんだよ！ほら、とっととおとなしくしてろ
！！！！」

エアロがゼロを掴み、ベッドに寝かせた
ゼロは渋々二人の言葉に従った

「な、なあ、ゼロ。」

リリアが意を決してゼロに質問する事にした
ゼロは「なんだ？」とぶっきらぼうに答えるとリリアは質問した

「ど、どこに所属してるんだ？ココか？それとも、ドンドルマか？」

「・・・どちらでもない。俺はハーツ村に所属している。」

ゼロは答ええないと思ったら、いきなり答え、自分の所属している村を教えた

「え？どうしてそんな村に・・・」

「俺を受け入れてくれた村だからだ。それ以上でも、それ以下でもない。」

すると、ゼロは横向きになり、眠ろうとした

「じゃ、じゃあ・・・今度遊びに行ってもいいか？」

「・・・」

何も返事は無い。

もう寝てしまったのだろうか？

そう思い、ゼロの部屋を跡にしようとしたが・・・

「・・・好きにしろ。」

出る時になり、いきなりゼロが言い放った

それを聞き、安心したのかりリアは部屋のドアを閉めた

「・・・もう、誰とも関わる気なんてなかったのだが・・・」

ゼロは三人を思い出し、言った

「まあ、なんとかなる・・・か。」

そういい残し、ゼロは眠りについた。

第四話 港町フルーン、重なる二人の道（後書き）

「いやー、疲れるねえー。」

ゼロ「一日に五話も・・・無理すぎだ。寝る。」

「あ、はい。」

リリア（ゼロ・・・なんでこっち向かないのかな・・・）

「さて、次回は・・・」

ゼロ「キャラクター紹介だ。」

リリア「気になる人は見てください。」

「それでは・・・」

「さよーなら！！！！つて、二人とも！！！！帰らないで！！！！」

ゼロ「帰って寝る。」

リリア「私も。」

キャラクター紹介（前書き）

この物語に出てくるキャラクターの紹介ですよー。
見ておくと物語がさらに面白くなるはずですよー！

キャラクター紹介

「さあて！この物語を執筆しているリュウガです！！！！」

ゼロ「……ゼロ・ダークネスだ。」

リリア「リリア・リンスだ。」

フィリア「フィリス・ホークです。」

エアロ「エアロ・フィールだぜえ。」

「さて、今回呼んだのは他でもない！」

ゼロ「キャラクター紹介だろ。とっととしてくれ」

「ああもう、焦らなくなって。それじゃ、我等が主人公！！最強にして最凶！無口、無愛想、実はクーデレ（？）のゼロ・ダークネスの紹介です！！！！」

ゼロ・ダークネス 男

19歳

容姿

真っ赤な髪でレウスヘアー。
そして、吸い込まれそうな青色の瞳が特徴。

人物紹介

本作の主人公

昔、シュレイド城下町の凄腕ハンター「ラグナス・ステイング」の弟子。

彼の死を目の当たりにし、龍に対する憎しみを強くする
持っている剣の殆どは師匠から譲り受けた物。

「龍刀」や「封龍剣」もこの時に譲り受けた
しかし、ミラボレアスを相手に双剣で挑んだ
理由は「師匠の愛刀だから。」

それ以来、ドンドルマを中心に活動していたが、数年前まではちゃんと人並みに喋っていたが、人から迫害を受け、心を閉ざしてしま
った。

過去の最強チーム「十文字」のリーダーを務めていた
十文字に居た頃の友人も居るが、チームが集結する事は珍しい。
今ではハーツ村に所属しており、ドンドルマから送られてくる仕事をこなしながらも生活している。

実は心を閉ざしてしまっただけで、本当は一番の常識人で、ツッコ
ミ役をする事が多い
やたらとフラグを立ててしまっが、超がつくほどの鈍感。

武器は基本、全て使える

しかし、本人は切り込んでいくのが好きなので、接近武器（双剣、
太刀など）を使う。

「大体こんな感じかな？」

リリア「ま、まああたってゐるな。うん。」

エアロ「次はリリアの紹介だぜえー。」

リリア・リンス 女

18歳

容姿

長い銀色の髪に美しい金色の瞳

人物紹介

本作のヒロイン¹

プロポーシオン抜群（主に胸などが）でツンデレなヒロイン。

父親に憧れ、ハンターを目指すも、父親がシュレイド攻防戦で死亡してしまったことを知ってしまった

それでも、信念は曲げず。真っ直ぐに亡き父親を超えようとしている。

昔、駆け出しの頃に男に襲われそうになり、それ以来男が大嫌いになった（ゼロは別）

クシャルダオラに襲われそうな所をゼロに助けられ、一目惚れ

しかし、本人は恋愛感情という物を知らないの、ゼロとどう接したらいいか分からず、稀にとんでもない発言をする時がある。

ツンデレな部分があり、ゼロにはデレデレな状態
ツンツンした反応をしてしまうが、実は本人の愛情表現らしい。
大剣を使い、先行して戦う

ゼロ「……なんだかんだいって、優しくていい仲間だ」

リリア「そ、そうだな。／＼／＼」

「次はエアロの紹介だよー！」

エアロ・フィール 女
17歳

容姿

青色の髪に緑色の瞳

人物紹介

本作のヒロイン2

ボーイッシュな性格で、一人称はあたし、私、あたい等と言う
リリアに負けず劣らずのスタイルで、大雑把な性格。

一度決めたら最後までやりぬくと言う頑固な一面もある。

ゼロに一目惚れし、積極的にアプローチするが、本人が鈍感な為、
全てから回りに……

ボケ役でよくゼロにツッコまれる。

人懐っこく、愛情表現（ゼロ限定）で抱きつくことがある。
実は恥ずかしがりやで、ゼロから押されるとめちゃくちゃ脆い。
弓を愛用する

「次はフィリアの紹介だね。」

フィリス「フィリアとフィリスってなんだか間違われそうで怖いで
す・・・」

フィリス・ホーク（通称：フィリア） 女
18歳

容姿

長い緑色の髪に、茶色い瞳

人物紹介

本作のヒロイン³

穏やかな性格で、実は結構策士という噂がある。

ゼロと共にツツコミ役をする。

プロポーシヨンは二人には負けるものの、結構いい。

ゼロに惚れてしまい、頑張つてゼロにアプローチするが、エアロと共に失敗に終わる

実は恥ずかしがり屋で、一途な面がある。

ライトボウガンとヘビィボウガンを使い、サポートに回る

「つてな訳でキャラクター紹介終了。」

ゼロ「意外と早いな。」

リリア「そうだな・・・。」

エアロ「ゼロ。(むぎゅっ)」

ゼロ「なんだ？(内心焦ってる)」

エアロ「一緒に帰ろうぜえー。」

ゼロ「そうだな・・・みんなで帰ろうか。」

フィリア「あ、はい。そうですね。(ほっと安心)」

リリア「そうだな。作者、次回予告頼む。」

「つておい!!!帰ったし・・・まあいいや。」

次回予告!!!

ハーツ村へ帰還したゼロを待ち受けていたのはメイド服を着た姉妹
だった!

次回「ハーツ村」

お楽しみに!!!!!!

新ヒロインも出るよ!!!!!!

第五話 ハーツ村

ゼロの傷の手当てを終え、皆が宿に泊まり一日が経過した

ゼロは相変わらず何を考えているか分からず、武器の手入れをしていた。

大剣を振り回すには強靱な筋肉を必要とする。

しかし、ゼロはまるで太刀の様に大剣を振るうことができるのだ。

その一撃は風を切り裂き、土を砕くと謳われる程……

ざっと今はお昼の時間だろう。

ゼロの身体は一日で完治。

ゼロは船着場に向かい、まず武器や装備を船に置いた。

これはゼロ専用の船だ。

ハーツ村のある、ハーツ島は目で見ることができる。

それ程近いのだ。

このまま真っ直ぐ進み、ハーツ村の船着場へ行けば帰れるのだが、大切なペンダントを宿に置いてきてしまった事に気づき、急いで取りに戻った

その頃、ゼロが居なくなつたと思われた宿では、リリア、フィリア、エアロが食事をしていた。

リリアはゼロを迎えにいった時には居なくなつていたので、恐らく出発してしまつたのだらうと考え、少し胸が苦しくなつたが、エアロ達に報告した。

「それにしても、絶龍人つてつきりデツカイ大男かと思つてたんだけど、実際違つんだな。」

「そうですね。私も初めて聞いた時には驚きました。まさかあんなに素敵な方だつたなんて・・・／＼／＼」

エアロの話聞き、フィリアはちやっかり惚気ていたが、リリアはそんな事を気に留めず、そのまま食事をしていた

すると、宿の方へ走ってくる一つの影があつた

揺れる赤い髪に光が反射し、100人が100人振る向くほどの美しい髪の色・・・

そして、吸い込まれそうな青色の瞳は決意を宿し、こちらへ向かつてきた・・・

ゼロだ。

なぜか、ゼロが帰つてきた

「あー！ゼロ！どうした？そんなに急いで。」

椅子から立ち上がり、エアロが宿に入ってきたゼロに言い放つた。

しかし、ゼロは何も言わず、宿の人に話をし、さっきまで泊まつて

いた部屋へと向かった
すると、先に食べ終わったりリアはゼロの後を追い、ゼロの部屋の
前に立った

「ゼロ、リアだ。入るぞ。」

そっぴい、ドアを開けた・・・
すると、ゼロは手に持ったペンダントを見つめていた
ペンダントは太陽の光を受け、美しく輝いている
そして、ゼロの髪も光を放ち、とても美しい光景が広がっていた
ぽーっと見ていると、ゼロがリアに気づいた

「リア・・・か。」

「あ、ああ。ど、どうしたんだ？それ？／＼／」

リアがゼロの持っているペンダントを指差し言った
だが、ゼロは何も言わず、ただ考えた
すると、ゼロはリアの方へ歩いてきた

「・・・リア」

レウスヘアーの髪はユラユラとゆれ、リアに迫ってくる・・・
リアは少し驚き（内心めちゃうくちゃ驚いているが・・・）
ゼロを見た

「少し・・・目を瞑ってくれ。」

「どどどど、どうしたんだよいきなり！？わ、私はまだ心の準備が・・・

・／／／
「

そういいながらもちゃっかり目を瞑っていた
すると、ゼロは何かをリリアの首に回した・・・

(こ、これは・・・!? だだだ、抱きつこうとしてるのか!? いや、待て・・・私達はまだ付き合ってもなければ結婚もしていないのだぞ!? いや、しかし・・・ぜ、ゼロなら・・・って、何を考え
ているんだ私!!! / / / /)

顔を真っ赤にしながら、リリアはゼロが抱きついてくるのかこないのかとビクビクしながら、ゆっくりと目を開けた・・・

すると、ゼロは何かを着け終わったのが、少し満足した顔で後ろを向いた

不思議に思い、首にぶら下がっている物に気づき、ゆっくりと触れたそれは、黒真珠の様に美しい光を放ち、そして黄金石の如く煌びやかな光を放っているペンダントだった

すると、ゼロはドアを開け、去り際にリリアへ言った

「それは、俺がりオンさんから貰った物だ。大切にしてくれ。」

そういい残し、ゼロは船着場へと走っていった

リリアはぼかんとその場に取り残され、ただペンダントを見つめていた

父の残したペンダント・・・
そして、ゼロから貰ったもの・・・

「私は……ゼロが……／／／」

そこまで言い、顔が火照っている事に気づき頬に手を当てる。
やはり、ほんのり熱い……
しかし、心地の良い暖かさだった

(私は……アイツが……ゼロが……好き……なのか……
／／／)

そう思いながらも、ゆっくりと階段を降りていった。
やはり、このペンダントの放つ光はとても綺麗だ……

ゼロは遣り残した事が無いかと思い出しながら走っていた
あのペンダントはリリアが持っている方がいい。
そうに違いない。

あのペンダントは……

「……リオンさん。俺はどうしようもない馬鹿の様だ。」

攻防戦の前夜を思い出す・・・

それは、いきなりの呼び出しだった

リオンに呼び出され、城壁広場へと行ったゼロはリオンを見つけ、
近寄る

この時、ゼロ・ダークネスという名前ではなく
捨てた本当の名前で呼ばれていた頃である。

『リオンさん、なんのようですか？』

『・・・ここから見る月は・・・相変わらず綺麗だ・・・』

リオンは城壁広場にある、ベンチから空を見上げていた

ゼロも空を見上げ、美しく輝く満月を見た

すると、リオンはポケットに手をつ込み、何かを取り出した

『それは、なんですか？』

黒く、美しく、そして煌びやかな光を放つペンダントだ・・・

そして、リオンはゆっくりとゼロの首にペンダントを掛けた

『本当は娘に渡そうと思って、ラグナスに頼み込んで作ってもらっ

「 たんだ。」

「 師匠に? 」

「 ああ、そうだよ。でも、僕は娘に送る前に君に貰っておきたかったんだ。」

「 何故ですか? 」

ゼロがリオンに質問すると、ゼロは月を見上げ言った

「 いつか君が、僕の娘に渡してくれるって信じてるから。ね? 」

「 とは、ゼロの昔の名前・・・」

「 もう自分以外誰も知らない名前・・・」

「 彼の名を知る者は次の日に死んでしまったのだ。」

「 皆・・・皆・・・」

「 」

そして、ゼロは気がつき、ゆっくりと船の舵を取った。

この船は実は“悪魔”を撃退した事がドンドルマ上部の人間に認められ、船一隻と、大量の懸賞金を受け取ったのだ。

懸賞金はまだ手をつけていない。

『か・ん・が・え・て・お・く』

「できれば……リーダーとして入団してくれると嬉しいんだが・
・・／／／／」

ここには居ないゼロに向かい言い放ち、二人の後を追った
そして、リリアの顔はとても嬉しそうに笑っていた

ハーツ村……

海に浮かぶ島にある小さな村。

この村周辺の海域では様々な魚が釣ることができ、ある意味観光ス
ポットにはもってこいの場所なのだが、様々な魚が多い分、その魚
を求めてくるモンスターが多いのだ。

稀に、ガミザミ等が砂浜に出没するのだが、その度に、村長や色々
な人がそのガミザミを狩り、ガミザミパーティを開いたりするのだ。

そのハーツ村の船着場の逆側に位置する、ゼロ専用の船着場……
ゼロの船は軍艦一隻には劣る物の、捕獲したりオレウスを乗せても
大丈夫という超頑丈な船。

この船を使うのはゼロだけなので、滅多な事では使われないのだ。
そして、ゼロは小屋からアプトロスの「ルル」「レイ」をゆっくり

と島へと上陸させた

すると、ルルはレイを支えるように一緒に歩き、帰るべき農場を指す

実は、レイは妊娠しているのだ。

ゼロが狩りに出ている合間に子を授かったのである。

ゼロはその事に気づき、レイだけでも帰そうとしたのだが、ルルがそれを止めたのだ。

まったくこの夫婦には手を焼かされる・・・

船着場を降りると目の前には大きな森が広がっており、美しい緑色の空間を作り上げている。

ごく稀にランゴスタが現れるが、ゼロに見つかったが最後、巣ごと全て狩りつくされるのだ。

そして、森を抜けると小さな村が見えてきた

そこから、耳の長く、そして長身の男性がゼロに向かい言い放った

「ゼロー！お帰りー！！！」

こちらに手を振り、自分の存在感を表している。

ゼロは軽く手をあげ、手を振ろうと思ったが、その場で振り留まったすると、酒場の門を潜り、二人の良く似た姉妹がこちらへやってくる・・・

「お帰り。ゼロさん。」

赤いヒーラーのメイド服を着て、ゼロへと駆け寄ってくるのは空色の髪は青空を思い出させ、クリツとした目はとろんと少し下がっている美少女が居た

すると、青色のヒーラーのメイド服を着たもう一人の美少女はゼロに向かい、思い切り暴言を言った

「ちよつとアンタ！！戻ってくるならもつと早く帰ってきなさいよ！！このアホ男！！」

青色のメイド服を着た美少女ははたから見るととても可愛くて、守ってあげたくなる程の可愛さなのだが、言っている言葉にはやはりトゲがあった。

赤い目は若干ツリ上がっており、そして、怒りを露にしていた。

「お、お姉ちゃん。そういうのは駄目だつて・・・」

「ううっ・・・スノウが言うなら仕方ないわね・・・」

青色のヒーラーのメイド服を着ているのはキア・ブルーネル。

そして、その妹のスノウ・ブルーネル。

彼女達はゼロよりも一歳年下なのだ。

スノウは大人しく、キアは活発な双子である。

ハーツ村では有名な二人である。

酒場に行けば、二人の天使に会えるといわれ、その噂を聞きつけてくる男達は多いのだが、セクハラ等をした者には笑いながら鉄製のオボンで頭をぶっ叩かれると言う体罰が待ち受けているのである。

勿論、ゼロがこの村にやってきた時に初めてできた歳の近い知り合
いである。

この村は基本男は少なく、女性が多いと言う事でも有名なのだが、
なんというか、個性が凄いということでも有名なのだ。

すると、鍛冶屋からスタイルのいい美女がこちらへやってきた
・・・胸元を少し露出しながら

「ゼロや〜ん 久しぶり〜」

そっつい、ゼロを抱きしめようと近寄ると、キアが女性の前に立ちふさがり、抱きつきを強制終了させた

「ちよつと、ナタリア!!! 何しようとしてるのよ!!!」

彼女の名前はナタリア・フリーク。

一般的には鍛冶屋の仕事をしており、リリアやエアロにも負けないほどのスタイルを誇る

なぜか関西弁で、本人曰く「なんや知らんけど、気いついたらこーなつてた」らしい。

「むっふふ、ゼロって意外と優しいやん?それに、料理美味いしまあ、本人の味は分らんけど、実際に食うて見たら分かると思うから、どいてくれー」

「ちよつ!? アブナイ発言しない!! おまけに、ゼロも何不思議そうな顔してるのよ!!! 早く逃げなさいつて!!!」

「・・・いや、逃げる意味が分からんのだが・・・誰か俺に状況の説明を・・・」

ゼロがそっついと、村長はニヤニヤとしながらゼロを見ていた

(役得、役得つと)

村長はゼロの鈍感さ加減に驚きつつも、さらにその光景は明らかにぎやかで、このハーツ村を活気付けていた。

そして、ゼロはキアの奮闘により、色々と守られたのだが、本人は暢気に村長の誘いで茶屋でお茶を飲んでいた

それに怒ったキアは後ろに下がり・・・

「人の気も知らないで、アンタって人はぁーーーーー！！！！！！！！！！」

ゼロに向かい、某ライダーも顔負けのキックを喰らわせ、ゼロは吹き飛び、ハーツ村の市場で気絶・・・

今日もハーツ村は平和だった。

第五話 ハーツ村（後書き）

さて、今回はちょっとコメディ風にお送りさせて頂きました。
感想もらえると嬉しいです。

さて、次回予告と行きますか。

ペンダントを受け取り、上機嫌なリア！

しかし、ハーツ村ではゼロを欲する個性豊かな女性が沢山！

次回！「住人」

お楽しみに！！！！

第六話 住人（前書き）

簡単なあらすじ・・・

傷を完治したゼロはハーツ村へと出航しようと思ったが、大切ペンダントを忘れ、宿に戻ったが、本来持つべき人にそのペンダントを渡し、そのままハーツ村へと出航したのである。

そして、彼を待ち受けていたのは、個性豊かな村の女性達であった。
・
・

第六話 住人

ゼロがキーマに蹴り飛ばされ、ゼロが気絶をしまい
キーマは慌ててゼロに近寄り、自分のやった行為を後悔した

「あゝあ。キーマはやり過ぎるんや。まったくもおゝ、少しは加減
したってゝ」

「アンタは何仕出かすか分かんないから鍛冶屋に戻ってなさい!!」

「うえゝん、スノウっちゝ、キーマが虐めるゝ」

そついい、ナタリアはスノウに助けを求めたが、スノウは半泣きで
ゼロに膝枕をしていた

「ふえ!? 私に言われても困りますよおゝ」

スノウはゼロをユサユサと揺らし、必死に起こす・・・
すると、ナタリアの魔の手が・・・

「ナタリア!! いつまでサボるつもりだ!!! 戻って来い!!!」

突然、鍛冶屋からナタリアを凌駕するほどの美人がでてきた。
すると、ナタリアはゆっくりと後ろにさがり言った

「お、お館!？」

お館と呼ばれた人物は怒りを込めた拳をゆつくりとナタリアに叩き込んだ

「この馬鹿者がぁー！ー！ーッ！ー！ー！」

「いったぁ！？」

頭を抑え、必死にお館と呼ばれる女性に謝った

「お、お館！ー！えっと、ゼロが帰ってきて！それでー．．．ええ
とー．．．」

「それは知っておる。私を誰だと思っている。」

この美人さんはナタリアの師匠。
レイハ・リーヴィルである。

名前は女性として響きがいいが、本人のヤル気は男性を遥かに凌駕する。

スタイルはごく普通。

しかし、自分よりも年下なのにスリーサイズだけは月とスッポンの
ナタリアは普通の弟子より10倍近く厳しくしているのだ。

女性の嫉妬ほど怖いものはない。

「さあてナタリア．．．ちょーっとお灸をすえてやろっ．．．」

ポキポキと拳を握り締め、ナタリアに迫って行く．．．

その顔はさつきまでとは違い、鬼の様に見えるのは気のせいではないだろう。

そこへ、受付嬢の女性がこちらへ向かって歩いてきた

「あら、レイ八さんは今日も元気なのねー あら、ゼロちゃん帰ってきたのー？なら、お持ち帰りしても問題は・・・」

「だから!!!なんで年長組のアンタまで危ない発言してるのよ!!!」

実は、この女性は若い人が多いのだ。

しかし、男性の中で一番年上なのは学者のフェール爺じいである。何歳かは不明だが、明らかに歳をとっている。

しかし、女性は若く、年長であるこの受付嬢、ソーマ・デインとレイ八は同じ歳で、四捨五入すると40代なのだが、年齢をバラしたら、昔ハンターだったソーマとレイ八に狩られるだろう。

「う・・・ううん・・・?」

ゼロがゆっくりと目を覚ました・・・

そこには色んな意味で危ない状況が繰り広げられていた

ナタリアは正座をしながら必死にレイ八に向かい誤っていた。

そして、キアはソーマを必死に止めており、スノウはゼロに膝枕をしていた・・・

一体気絶している間に何が・・・と言うのは海に放り投げて。

ゼロはゆっくりと立ち上がり、スノウにお礼をいい残し去っていった・・・

ゼロが居なくなつた事に気づくと、ゼロはやはりあの場所へ向かつていた……

村の住人なら誰でも知っている……

絶龍人が誕生した理由の場所だ……

そこは、ゼロ以外誰も行く事のできない道……

石で出来た大きな門は大男でも動かす事は不可能……

ましてや、リオレウスが頭突きをして少しグラツと揺れる程度……

ここはゼロ以外開けることのできない扉……

ゆっくりと右手を前に突き出し

ゆっくりと目を瞑り……

力を込めた……

すると、門は勝手に開いた……

ゼロはゆっくりと門に入ると……

門は勝手に閉まり、ガチャリという音を立てて静まった……

ここは真つ暗な洞窟……

そこをゆっくりと進みながら右、そして左……

どンドンと進んでいくと、波の音が聞こえてきた……

そして、光のあるこの道を進み……

出た先は……

ザザーッと波が押し寄せ、また去っていく……
そして、また……

ここはゼロだけが行ける場所……
波は強く、壁は登る事のできない……
まさに断崖絶壁……
そんな崖にちよこんと小さな墓があった。

ゆっくりと歩み寄り、膝を地面に着く……
そして、右手を左手と重ね、一礼……

「戻ってきました……師匠……」

そう、これはラグナス・ステイング……
ゼロの師匠の墓である。

思い出すのは悪魔と対峙し、ドンドルマ上部の人間に呼び出された
時だ……

ゼロの目の前にはドンドルマの長老に呼び出され……
話が始まった

『さて、お主はよく守ってくれた……あの悪魔を撃退できる子
供ぢゃとは……まげたわい……』

長老はゼロに世辞を言い渡し、ゼロは深く頭を下げ、言った

『長老様……俺から……お願いがあります……』

『ん？なんぢや？』

そして、ゼロは顔を上げ、静かに言った

『シュレイドに住んでいた人は……全て死にました。』

『分かっておる。大部隊で調査したからのお……』

『その中で……俺の師匠……ラグナス・ステイングの遺体が発見されたと思います……』

すると、ゼロは拳を握り締め、長老に言った

『その遺体……俺に引き取らせてください……』

『貴様！ラグナス大隊長の遺体が欲しいだど！？ふざけるな！！いくら弟子でも……』

『構わん。わしゃあ、ラグナスの語るお前の武勇伝の話が好きぢやった……しかし、遺体はわしが持つても意味は無い……弟子であるお前が、師匠をともらってやりなさい……』

『はっ……』

ゼロは立ち上がり、長老に深く頭を下げた・・・
その後、懸賞金と船を貰い・・・
師匠の武器の封印と共に、師匠の眠るべき場所を探し、旅を始めたのであった・・・

そして、見つけたのがこの場所・・・
ラグナスは海が好きだった・・・
そして、青空も・・・

だから、この場所を選んだ・・・
ゼロもここが好きになったから・・・

「師匠、聞いてください・・・俺をチームに入れようとする物好きな奴らに会いました・・・また今度狩りをしないかと誘われましたが、考えておくつもりです・・・」

静かに言い放つが、やはり波の音以外帰ってこない・・・

「また、来させていただきます・・・師匠。」

そっぴい残し、静かに洞窟へ戻っていくゼロ・・・
ほんの一瞬だけ、ゼロが笑っていた風に見えたのは気のせいだろうか・・・？

第六話 住人（後書き）

さあ、少しだけ心を開いたゼロ！

しかし、絶龍人をも巻き込む大きな暗雲が動き始めているのはまだ、彼は知らない！！

そして、時は流れ、一ヶ月！

成長したりリア達はどうなっているのか！？
次回！！！！

「成長」

お楽しみに！！！！

第七話 成長（前書き）

簡単なあらすじ・・・

ゼロはハーツ村へと帰還し、村長や住人達に軽く挨拶をしたら、なんだか知らないが、美少女に蹴り飛ばされ気絶。

数分後に起き上がるが、何が起きているのかさっぱり分からず、あの程度無視し、自分の師匠の眠る墓に向かい

墓を見つめ、居ない師匠の事を思い浮かべ、そして去り際に笑ったように見えたとか・・・

そして、墓参りをして

一カ月後のある日・・・

ハーツ村へとやってくる三人の美女が居た・・・

第七話 成長

「ここが……ハーツ村……か。」

リリアはハーツ村を見上げ、言った
やはり、小さな村だ。

しかし、活気に溢れていて、笑顔の絶えない村だ……

「おや？君達、ハンターかい？」

すると、長身の男がこちらへ向かってきて、軽く挨拶をしてきた。
どうもと頭を下げ、挨拶をすると。
ニッコリ笑って返事してくれた

「あの、ここにゼロさんが居るって聞いたんですけど……」

リリアが静かに言うと、長身の男が笑いながらそれに驚いた

「驚いた！ゼロの知り合いかい？でも、ゼロは今あそこに居るよ。」

指を刺した場所はハーツ村の中心部に位置する大きな山。

モンスターの生息する火山よりも遥かに小さく、だが、ハーツ村の
象徴とも言える場所だった

「ゼロはねえ、小さい頃からあそこに行って青空とかを眺めるのが
趣味でねえ。片道三十分なのにそんなのお構い無しで行っちゃうか

ら驚きだよ。あつ、ちなみに、僕はここ、ハーツ村の村長さー！」

ゼロの趣味を教えてくださいてもものすごく嬉しいが、後半、親指を立ててこっちに向いてきたのは少し引いた

「あの、それでは、ゼロさんはいつ頃帰ってくるんですか？」

「そうだねえ・・・ざつと夕暮れかなあ・・・」

腕を組み、ゼロの行動を思い出す・・・

いつもどおり起き上がり

そして、普段着の黒い服で山に登るといい、そのまま行ってしまったのだ。

「じゃあ、私探しに行ってきますー！」

そういい、エアロはダッシュで山に向かい走り出した

村長はそれを止めようとしたが、案の定砂塵を巻き上げ、山に登っていった

「まったく・・・エアロはもう少し考えて行動して欲しいものだ・・・」

「・・・」

頭を抱え、リリアがうなだれた

そして、フィリアは若干苦笑しながら村長に質問した

「あの、村長さん？」

「ん？なんだね？僕には嫁が居るから結婚の申し出は却下だぞう！」

なんだか言っている事が無茶苦茶だが、フィリアは無視して話を続けた

「ゼロさんは、いつ頃この村に？」

そういうと、村長は笑いながら酒場へと案内した。そして、村長は言った

「なあに、お酒でも飲みながら教えるよ！」

そう言い放ち、酒場の門を潜った

「うりゃあああああああ！！！！！！」

叫びながらハーツ山（村長命名）を駆け上がるエアロは森を抜け、ハーツ山を駆け巡っている
やはり、この山は小さい。

しかし、日々のトレーニングを見るにはいい機会だ。
そう思いながらゼロの居る山の頂上へ向かった

だが、「おい」と声をかけられ、その場で停止した
そこにはゼロが山の頂上付近でゆっくりと空を見上げていた
急いでそこへダッシュし、ゼロを見下すようにたった

「……どうした？」

すると、ゼロはある事に気づいた
風に揺れる青い髪はユラユラと揺れ、女性独特の柔らかい匂いがゼ
ロを包み込んだ
こちらを見ている緑色の目は美しく、普通の男性なら見惚れて動け
なくなっているだろう。

すると、ゼロの真横に座り、ゼロの隣で空を見上げた

「うわっ・・・綺麗なんだなあ・・・」

空には様々な形の雲があり、そして風が運んでくる塩の匂いはとて
もいい気分にかけてくれる。

ゼロが毎日ここに来ている理由が分かる気がした

「・・・どうした？ドンドルマで仕事をしていたのだろうか？」

「あっ！！思い出した！！！！」

急いで起き上がり、「ごそごそとクエストの依頼書をゼロに向けて見
せた

そこには、「ヒプノック二頭の討伐」と書かれた紙があった

ゆっくりと手に取ると、これはハンターランクを階級を上げるクエ
ストであった。

一般的なクエストの紙の色は決まっており、下級が白、上級が黄色、
そして、G級が赤と決まっているのである。

ちなみに、緊急クエストの場合、青い紙に緊急の判子を押された紙
がでかかかと集会所に張られる

この紙の色は緑・・・それは、ハンターランクの階級を上げる為の
クエストである。

どうやら、彼女達の腕を買って、ドンドルマ上部がクエストを依頼

したのであろう。

「ヒプノック・・・か。」

「なあなあ！！ゼロさ、一緒に狩りに行かないか！！！！こいつ等倒さないとG級に上がれないんだよ！頼むッ！！！！」

深く頭を下げ、ゼロにお願いをしたが、ゼロはゆっくりと言った

「・・・俺でなくても、他のG級のハンターに頼めばいいだろう。」

「いや・・・さ。あたし達、ゼロ以外のG級ハンターの知り合い居ないんだ・・・」

G級ハンターに上がるこのクエストは少し面倒で、上位のヒプノックよりも連戦を重ね、攻撃力も警戒力も高くなったヒプノックを二頭狩らねばG級には上がれないのだ

「・・・別に構わんが」

「ホントか！？いや、助かった助かった・・・ありがとな！！ゼロッ！！！！」

起き上がり、緑色のクエストの依頼書をエアロに返却すると、エアロがゼロに向かい抱きついてきた

やはり、女性独特の匂いに包まれ、尚且つ、とても豊かな胸が当たっているのが分かる。

「・・・どうでもいいが、離れてくれ。」

ゼロはエアロを無理矢理引き剥がし、また空を見上げ、後ろに倒れた隣からはエアロから喜びの声が聞こえる

「ゼロが居れば怖いものなしだぜ!!!ゼロ、これからもよろしくな!!!」

「・・・生憎、俺は今回のクエストには同行するが、変な期待は起こすなよ?あくまで、今回だけの同行だ。」

「そんな堅っ苦しいことはいいだろ!!!」

エアロは無邪気に笑っている・・・

自分が最後に笑ったのは一体いつ以来だろうか?

確か「十文字」時代の頃は仲間と共に笑いあっていた記憶が・・・

「それじゃ!!!あたしはフィリア達に伝えてくるわ!!!じゃな」

エアロはいきなり立ち上がり、凄いスピードで山を下りて行った・・・

だが

「ふぎゃああッ!?!?!?!?」

スピードに乗り切れなかったのか、転んでしまった様だ
まったく、世話の焼ける奴だ・・・

そう思いながらも転んだエアロに近づき、「大丈夫か?」と質問した

「いまだ……うう、最悪だあ……」

髪の毛には砂が混じり、少し汚れてしまっている。

そして、インナーではない普段着の中には沢山の砂が入っている。

「……まったく。」

ゼロがエアロを見て呆れていた

エアロは身体中に付いた砂をぱんぱんと叩きながらゼロを見ていた

「なあ、ゼロ」

「……なんだ？」

少し間をおき、返事をする、エアロから質問された……

「お前っていつからこの村に？」

「……」

何も言わず、その場でゆっくりと考える……

これから同行するとはいえ、何も知らないままでは流石に失礼というもの……

よし、気は乗らないが、教えるとしよう。

「いらつしゃい。村長さん。あれ？そちらのお二方は？」

酒場に入るとヒーラーのメイド服を着ながらせつせと仕事をしているスノウであった

キーアはゆっくりと三人を酒場の席に案内した

「えっと、私はリリア・リンス。ゼロのちょっとした知り合いだ。」

「あら？あの無愛想男に知り合いが居たなんてね。ちょっと驚きだわ。」

キーアが三人に水を持ってきて言った

すると、フィリアは不思議そうにキーアに質問した

「え？ゼロさんを知ってるのですか？」

「知ってるも何も、この村ではゼロさんを知らない人は居ませんよ」

スノウが少し穏やかな口調で話した

すると、フィリアは驚き、二人に質問した

「お二人は、ゼロさんと仲がよろしいのですか？」

「キーア・ブルーネルよ。キーアでいいわ。そうねえ・・・仲はいいのかしら？」

キーアがスノウに質問すると、スノウは困った顔で「さあ？」と答え
えた

「彼がやってきたのは……何年前だったかなあ……凄く雨の降っていた夜の事だったな……」

村長が水をゆっくり飲みながら言った

それは、ゼロがシュレイド攻防戦で功績を称えられた数カ月後の事だ……

ハーツ村に激しい雨と共に危機が迫っていたのだ
ヤミザミとダイミヨウザザミが村に現れ、民家を破壊しながら人を襲い始めていた時だ

船着場周辺の砂場から現れ、いきなり人を襲い始めたヤオザミ達は数匹だった物の、逃げたヤオザミがダイミヨウザザミを連れてきてしまい、ハーツ村壊滅の危機にゼロが現れたのである。

突然、海から現れ、ヤオザミ三匹をほんの数秒で片付けたのだ。
ダイミヨウザザミはゼロが現れた事を知り、ゼロに襲い掛かったのだ
ゼロの左腕は負傷しており、双剣を片手剣として、必死に応戦したのだ。

結果、ダイミヨウザザミの頭に剣を突き刺し、ゼロの勝利で終わったが、ヤオザミ達が残っていた為、ゼロはボロボロの身体で戦い続けたのだ

そして、次の日の事だ……

『どづいっ……事だ?』

村人全員は森へ避難し、ヤオザミが一匹も追ってこない事に気づき、急いで村へと戻ると、ヤオザミや、ダイミヨウザザミの血を浴びた一人の少年が砂浜で倒れているではないか……

周りには、ダイミヨウザザミの死骸があり、ヤオザミの甲殻など、沢山の物が発見され、ダイミヨウザザミに突き刺さっていた双剣と、少年の持っている剣が対になる事に気づき、少年を保護したのだ。

そして、当時のスノウとキアはゼロに付きつ切りで看病をし、ゼロが目を覚ました時に思い切り泣きついたので

そして、少年の乗っていた船と思われる小船がハーツ村に打ち上げられ、所持品から、特別ハンターと分かり、それと一緒に誰かの亡骸と思われる箱も見つかり、少年に返すと、少年はこの村の最大の不思議である「開かずの扉」へと向かい、手ぶらで帰ってきたのだ。そして、当時結婚していなかった、若かりし頃の村長は……

『この村に住まないか？』

そういい、ゼロは心を良くこの村に所属したのであった……そして、その翌年に十文字のリーダーとして、活動する為、数年間ハーツ村に帰ってこないと思ったら、なんと心を閉ざして帰ってきてしまったのだ。

「そんな事があつたんですね……」

フィリアが村長の話を聞き、少し涙目で言った

リリアは興味津々で聞いていたが、少し切ない気持ちになり、ただペンダントを見ていた

「それで、リアちゃん首に下げているそのペンダントを見ながら、いつか過ごしていたよ。」

そういうと、キアもリアの首に提げているペンダントを少し羨ましそうな目で見た

(あいつの……ゼロが子供の頃から肌身離さず持ってたあのペンダントか……羨まし……じゃなくて！なんでアイツはこんな女に渡したのよ！？胸！？胸なの！？スタイルの問題なの！？あの変態男めえ……！！！)

若干背中から燃え上がる炎は近くに居たスノウにしか分からないだろう。

スノウもなんだかんだ言っただのペンダントが欲しかった訳である。

「……それで、俺はこの村に居ると言う訳だ。」

ゼロの方もエアロに説明が終わり、ゆっくりと腕を組みながら言う、エアロはぼろぼろと涙をこぼしながらゼロを見ていた

「お前がそんな過去持つてるのに……いきなり押し付けに来てごめんなさい……」

「え？あ、いや……泣かれても困るのだが……」

すると、エアロは涙を流しながらゼロに抱きついた……

というか、勢い余って、押し倒した
ひりひりする背中痛みを我慢しながら、ゼロはエアロの頭を静かに撫でた

「・・・気にするな。俺は・・・決して強い人間ではない。お前みたい泣いていた時期だってあるのだから・・・」

小さかったゼロの泣き顔はある意味見てみたいが、エアロはそんな事を考えずただ涙を流していた

「うわああん・・・ゼロお・・・」

やはり、泣き止んではくれないようだ。

そう判断したゼロはゆっくりとエアロの背中に手を置き、そして、右手で太ももをゆっくりと支え、立ち上がった・・・

これは、俗に言うお姫様抱っこである。

突然の事に泣きやんだエアロは顔を真っ赤にしてゼロにいった

「ななななななな!?!?!いいい、いきなり何すんだよ!!!
/ / / / /」

じたばたと暴れ、ゼロの腕から脱出したエアロはそのまま着地した

「・・・そろそろ降りるぞ。お前が居るとい事は、フィリス・ホーク達も居るとい事だ。」

そっぴい残し、ゼロはその場を去っていった。

すると、顔を赤くしたエアロは急いでゼロの真横に立ち、一緒に下

山した

ゼロとエアロが下山すると、最初に会ったのはナタリアであった。ナタリアはゼロに抱きつこうとしたが、突然現れたキア、スノウによってそれは未遂で終わったが、隣に居たエアロは少し複雑な気分でゆっくりとゼロに抱きつこうとしたが、運悪くフィリア達と合流してしまい、こちらも未遂で終わった

そして、彼女達はゼロの船「アビス号（村長命名）」に乗り込み、フルーンのゼロ専用船着場に船を置き、ドンドルマの集会所へと向かい、樹海へ行く許可をもらい、樹海へと向かうのであった

「この子がゼロのアプトロスか？」

頭を撫で、旅の友とも言えるアプトロスに言った
性格は大人しく、とても扱いやすい子の様だ……

「……ああ。ルルって名前だ。」

ルルは頭を撫でられ上機嫌。

そして、ルルは気持ちよかったのかエアロの手をゆっくりと舐めた

「あっはは、くすぐったいって」

ルルとじゃれ合うエアロはとても機嫌が良かった。

何せ、ゼロの共に行く始めての狩り、楽しみで仕方ない・・・

それは、リリアとフィリアも同じだった

「・・・・・・・・」

ゼロはゆっくりと荷物を乗せ、そして、ゆっくりと手綱をとり、ルルを出発させた

後ろの荷車の広いスペースを使いゆっくりとくつろぐエアロは眠りに付いたようだ。

そして、フィリアはゆっくりと本を開き本を読んでいた

ゼロの隣の助手席には何故かリリアが乗っていて、ゼロはそんな事をお構い無しに手綱を引く

「なあ・・・ゼロ。星が綺麗だ。」

リリアが空を見上げ、言った

ゼロもゆっくりと見上げ「ああ」と答えた

すると、リリアはゆっくりとゼロの肩に頭を乗せた

ゼロは彼女の行動に驚いたものの、そのまま手綱を手放さずゆっくりとした夜と堪能した・・・

(ああ・・・ゼロの肩・・・気持ちいい・・・なんだか、とても落ち着く・・・)

すると、隣から聞こえる寝息に気づいたゼロはゆっくりと見ると、そこには眠っているリリアの姿があった・・・

「・・・まったく。どこまで俺を困らせるのだ・・・」

フィリアも本を閉じ、眠ったことを確認したゼロは静かな声で言った隣で眠るリリアの寝顔に心を奪われそうになったが、なんとか理性が保てた。

「・・・アイツ等・・・どこで何してるんだろっな・・・」

思い出すのは十文字時代・・・

一緒に狩りをしていた仲間の顔・・・

するとルルに話しかけ、ゼロはゆっくりと眠りに付いた

「キュウウウ」

ルルの鳴き声は静かに聞こえた・・・

そして、ルルは樹海へと向かう・・・

第七話 成長（後書き）

次回予告！！！！

樹海へ到着したゼロ達を待ち受けていたのはヒブノック二頭！
ゼロは一頭を請負^{うけおい}、三人はもう一頭のヒブノックと対峙！！

次回！！！！

「力」

お楽しみに！！！！！！

第八話 力（前書き）

簡単なあらすじ・・・

ゼロの所属するハーツ村にリリア、フィリア、エアロがやってきた。しかし、ゼロはハーツ山でゆったりとした時間を過ごしていた。しかし、嵐のように現れたエアロからお願いされたのは「共に狩りをして欲しい」

ゼロはそれを引き受け、美女三人に囲まれながらも、樹海へ目指すのであった・・・

第八話 力

樹海……

独特の湿った空気と、自然に生えた木々が重なり生まれた場所だ・

・
この樹海の名前は「レイン樹海」

この樹海にはまだ秘密があると言われ、数々の調査隊が調べた所、昔、ここに塔を立てようとしていた種族が存在していたとか……

しかし、彼等は自然に生きる者達を怒らせてしまい、塔の建設中、モンスターに滅ぼされたとか……

その樹海のベースキャンプでゼロ達はゆっくりと標的のヒプノックについて話をしていた

「いいか？ヒプノックの動作はイヤンクックとそう変わりはないが、厄介なのが睡眠作用のある睡眠ブレスだ。これを喰らったらすぐに眠ってしまう。」

樹海において、眠ってしまうというのは、永遠の眠りに繋がってしまふのだ。

ゼロは予備動作、弱点、そして部位破壊できる場所を徹底的に教えた

「以上。これがヒプノックについてだ。」

ゼロから長々と語られたヒプノックの話はやけに詳しく、さらに、予備動作などを教えてもらい、とてもよく理解できた。

そういうと、ゼロは銀色の太刀

飛竜刀【椿】を背負い、ゆっくりと進んでいった

リリア達もゼロに続き、急いでヒプノックの現れると言うエリアに向かった

エリア5・・・ここは、ヒプノックの巣と思われる場所の真横である。

ヒプノックはまずこのエリアに居る小型モンスターを眠らせ、捕食するのだ。

すると、ヒプノックが食べた後と思われる死体が残されていた。爪からして、これはランポスの死骸だった。

「・・・」

ゼロは何も言わず、後ろに居る三人に告げた

「いいか、恐らく、ヒプノックの内一頭はまだ眠っているはずだ。

しかし、もう一匹はすでに起きて、行動を開始しているらしい。俺は起きている方を片付ける。お前達は巣に居る方を頼む。」

ゼロはそう告げ、ヒプノックの居ると思われるエリアへと走って行った

残された三人は、ゼロに討伐と言う報告をするため、ヒプノックの

巢へと入った

「・・・ホントに眠ってる・・・」

エアロが静かに言った

目線の先には眠っているヒプノックが一頭・・・

すると、リリアがゆっくりと近づき、大剣を構えた

そして、ゼロの教えてくれた言葉を思い出す

『いいか、奴が眠っていたらまず、奴等のクチバシを狙え。部位破壊もできるが、睡眠ブレスを吐かれると厄介だからな。先につぶしておいて損はない。』

そして、ゆっくりと溜め切りを行い、最大限まで力を溜め・・・
一気に振り下ろした

『グエエエエエエエエエエ!!!!!!!』

クチバシを攻撃されたヒプノックから大きな鳴き声が聞こえた
その瞬間、三人は行動を開始した

フィリアはサンドウォール改で状態以上を起こす、麻痺弾を打ち始め、エアロは近すぎず、かつ遠すぎない場所から毒ビンを縫った弓矢を打ち込んでいく・・・

すると、リリアはポーチにあったとある道具をヒプノックの前で爆発させた

それは「閃光玉」である。

辺り一体が一瞬だけ明るくなり、ヒプノックは混乱し、辺り一体に睡眠ブレスを吐き散らした

その隙に大剣で攻撃を仕掛け、フィリア達も援護射撃を行った

すると、目が回復したのか、ヒプノックはその場で大きく翼を広げたあたりに風圧が送られ、リリアは後ろに後退し、ヒプノックを追おうとしたがわずかに届かなかった

すると、遠くに居たエアロがピンを換え、飛んで逃げようとするヒプノックに先端がピンク色の弓矢を放った

すると、辺り一体に独特の匂いが覆った

これはペイントビンの匂いだ。

三人は武器を背負い込み、ヒプノックが向かったと思われるエリアを特定した

それはエリア4・・・

ヒプノックが合流しやすいエリアだ・・・

恐らくゼロも戦っているだろう。

急いでエリア4へと向かう三人

すると、エリア4に到着した三人は驚くべき光景を目の当たりにした
ヒプノックが二頭居た・・・

しかし、ゼロの姿が見えない・・・
一体何処へ・・・？

すると、一頭のヒブノックがその場で倒れた
そこには銀色の刀身を美しく輝かせる、赤い装備の男だった
ゼロだ！

『ピエエエエエエエエツ！！！！』

『ピエエエツ』

一頭のヒブノックがその場で断末魔の声をあげた
すると、もう一頭のヒブノックはゼロに向かい突進をした。
クチバシには傷がある・・・
恐らくリリア達と戦っていたヒブノックだ

「・・・ふっ！！！」

するとゼロは、襲い掛かってくるヒブノックの足の間に入り込み、
擦れ違う瞬間に刀を振るっていた

『ピエエエエツ！！？』と悲痛の音が木霊した
そこへ、リリアが先陣をきり、ゼロの真横に立った

「・・・上級ハンターが・・・よくここまで出来たな。」

ゼロがリリアに向かい言った
普通だったなら、レベルの違う世界に驚き、ヒブノック二頭を必死に
狩るのだ。

しかし、この三人は違った。

彼女達の才能の進化するスピードが半端ではないのだ。

ゼロはリリアに小さく耳打ちをした

そして、ゼロは飛竜刀【椿】を使い、切り込んでいった
すると、ギアアギアアと何処からか鳴き声が聞こえてきた
ランポスだ。

恐らく、仲間の仇を取りに来たのだろう。

しかし、フィリア、エアロはランポスに銃口を向けた
狩りの邪魔をされては困るからだ・・・

「はあああああッ！！！」

ゼロの気刃斬りを行い、ヒプノックを斬る

ヒプノックは足を攻撃され、右に倒れた

だが、ゼロはその場から瞬時に離れた

すると、助走を付けてリリアがこちらに向かってきた

「たあああああッ！！！！！」

これはさつき耳打ちした時に教えた技である。

大剣の重さ、そして攻撃力を利用した大技

「天斬^{テンザン}」である。

これを習得するには一ヶ月を有するのだが、彼女は一発でやり遂
げたのだ

すると、ヒプノックは力無くその場に立ち上がった

『ピエエエエッ・・・』

ヒプノックはその場で倒れ、小さく、そして儂い命の最後を見せて
くれた・・・

フィリア達がランポス退治を終えた直後にヒプノックは死んだのだ
沢山の血が流れ、そして息絶えた・・・

「やったあああああああ!!!」

弓を背負い、助走をつけてゼロに抱きついた

勿論、ゼロは押し倒されてしまい、椿がクルクルと回転し、地面に突き刺さったのである。

すると、刀身から美しく輝く太刀からは炎が発せられ、4人の勝利を祝ってくれるかのように思わせた

そして、4人は剥ぎ取りを始めた

「このヒプノックの羽毛、枕に使えないのでしょうか・・・？」

「・・・使えるらしいぞ。もともと、そんな事するのは貴族位だろうな。」

ゼロ達は二頭のヒプノックから沢山の素材を手に入れた

こんなに沢山の素材が手に入れば、きつといい装備ができる。

手に入ったのは眠鳥の剛爪、眠鳥の尖爪、眠鳥の橙毛、眠鳥の胃石、眠鳥の豪橙毛。

そしてなんと、珍しい事に眠鳥の稀胃石が手に入ったのだ。

4人は喜びながらベースキャンプに戻った

そこには案の定ルルが一人で寂しかったのか、その場でゼロに近寄り頬擦りをしてきたのだ

そつと頭を撫でてやり、ゼロ達はドンドルマへ向かい、クエストの報告をしに行くのであった。

ゼロの料理が完成した。

机一杯に広げられた料理は全て上流貴族……いや、王族でも出さ
れないであろう高級感の溢れる料理ばかり。

「……すまん。なんかつい手を込んで作ってしまった……」

そして、4人は箸を取りご飯を食べ始めた
やはり美味しい。

ゼロは将来いいお父さんになれそうだと心で思いながら三人はご飯
を食べた。

そして、ご飯はあつと言う間になくなり、4人はドンドルマへと向
かうのであった。

第八話 力（後書き）

次回予告！！！！

フィリア達はドンドルマへ向かい、クエストの報告を行った！
しかし、ゼロは懸賞金だけ貰い、ハーツ村へと帰ってしまった。

次回！「ようこそ！ハーツ村へ！！」

第九話 ようこそ！ハーツ村へ！！（前書き）

簡単なあらすじ・・・

村長「あれ？何してんの作者さん？」

「ああっ！！！！邪魔すんなっての！！！！って、時間があああああ
！！！！」

村長「絶龍人物語、始めるよ」

「何故アンタが！？」

第九話 ようこそ！ハーツ村へ！！

ゼロ達はドンドルマへと戻り、今現在、酒場で勝利の祝杯をあげていた。

リリアは好物の乳製品中心の料理を食べ、フィリアは栄養バランスに拘った定食

そして、エアロはなんと見る限り全て真っ赤の毒物と間違えそうな位の真っ赤な料理を平らげていた。

エアロはなんと辛党なのだ。苦手な食べ物はすっぱい物。

ちなみに、リリアが何故乳製品が好きなのかは父の影響だとか。

フィリアは二人の栄養の向かう先・・・とても豊富な胸を見て羨ましそうな目線を送ったが本人達は気づかず、ただ料理を口に運んでいた

そんな中、ゼロが注文したのは魚介類を中心とした、定食であった。ヤミザミのサザミソを煮込んで鍋に、豪快に入れられた大玉イカを丸々一匹

そして、その横にあるスープは兜ガニとダイミョウザザミのサザミソを煮込んだスープ。

なんとも豪勢だろう・・・

酒場では一般的にハンターランクに合った食事を注文できるのだ。

下位ハンターは熟成チーズ等の一般食、そして、上位ハンターはプリンセスポーク等の高級食材・・・

そして、G級ハンターは龍頭等の珍しい料理を味わう事が出来るのだ。

ゼロの定食は「上級魚介定食」である。

書かれたメニューから好きな物を選び、アイルーに頼み、その場で

作ってくれるのだ。

ゼロは基本的に肉料理と魚介類を順番に食べるのだ。
前回は肉料理を沢山食べたので、今回は魚介類を食べようと考えたのだ

エアロは真っ赤な定食（本人が一味を携帯している）を食べている
リリアも案の定嬉しそうにロイヤルチーズとプリンセスポークのス
テーキを平らげていた。

フィリアも定食を美味しそうに平らげた

ゼロは三人よりも早く食べ終わり、その場で立ち上がった

「・・・俺は懸賞金も貰ったから、俺はこの場で失礼する。じゃあ
な。」

酒場のテーブルにお金を置き、ゼロは酒場から出て行った

しかし、彼女達がひそかに企てた計画が今ココに明かされようとしていた・・・

ゼロはフルーンへと急いで戻り、アビス号にルルを乗せ、ゆっくりと舵を握った

そして、目指すは自分の村、ハーツ村だった

「・・・ただいま」

誰も居ない夜のゼロ専用船着場にゼロの声が小さく聞こえた
早朝の今、太陽が少しだけ顔を出している。

ゼロはゆっくりと森を抜け、ハーツ丘の上にあるゼロの家に向かった

ガチャリと音が鳴り、ドアを開いた

すると、そこには眠っているアイルーが2匹・・・

ゼロのオトモアイルーである。

しかし、滅多な事じゃない限り、一緒には行動しないのだ。

ゼロは自分のベッドに向かい歩き、そしてベッドに横たわった

「・・・・・・」

なんだろう、この脱力感は・・・

何かをやり遂げたこの感覚は久しぶりだった・・・

そして、何故か笑い合っているリリア達と十文字時代の仲間達の笑
顔が重なった

「・・・」

ゼロは目を閉じ、ゆっくりと眠った

「……………」

目が覚めると、オトモアイルーの2匹はせつせと掃除をしていた
ゼロが起きた事に気づくと「おはようなのニャ！」と元気良く手を
上げたアイルーとペコツと紳士のように振舞うアイルー……

挨拶をしたのが「アルファ」

そして、紳士のように頭を下げたのが「マサムネ」

アルファはマサムネの弟子。

そして、マサムネはゼロの弟子(?)なのだ。

すると、アルファがゼロに手渡したのはハンター通信である。

表紙には「古龍現る!? 街を救ったのは絶龍人!?」と大きく取り
上げられている

最近、派手な事はしていないが、どうしてこう言う記事を書けるの
かがゼロには分からなかった。

俺は英雄でもなければ、殺戮者でもない。

自分は……………ただの……………

「ご主人様！今日は村に新しい人が増えたそうなのニャ！」

「・・・そうか。」

「ゼロ様、酒場で村長さまからです」

マサムネが村長から何かを預かったようだ。
まったく、何が書かれているのやら・・・

『起きたら、酒場に来いよな
村長』

クシヤツと手紙を握り締めた
まったく、今度は何をしでかすつもりだアノ人は・・・

酒場へ向かうと、思いがけない人物達が居た

「オッス！ゼロ！！！」

「・・・エアロ・フィール、これは一体どういう事だ？」

ゼロが不思議そう（表情にはでていない）に言った

「それは、彼女達が正式に、このハーツ村に所属する事になったのだよ！！！！！」

第九話 ようこそ！ハーツ村へ！！（後書き）

次回予告！

リリア達は正式にハーツ村へ所属する事ができ、三人に一軒ずつ家を与えてくれた村長！

個性豊かな村人に歓迎され、ゼロは？

次回！！「家」

お楽しみに！！！！

第十話 家（前書き）

簡単なあらすじ・・・

ヒプノック二頭を狩り終え、4人はドンドルマへで懸賞金を貰い、酒場で食事をした・・・

そして、ゼロはハーツ村へ帰還。

しかし、次の日、リア達がハーツ村に正式に所属し、彼を巡る争いは更に強くなったのである。

そして、彼女達の思いはゼロへと届くのか・・・

第十話 家

「それじゃ、君達の家を紹介しようかな！じゃじゃーん！！！」

酒場から出たゼロ、リリア、フィリア、エアロと村長は、ハーツ村に最近出来た家へと彼女達を招きいれていた

その家は、ハーツ村の名所「心の木」を通り過ぎた所にあると言う。心の木には伝説があり、かつて、最強と謳われたハンターがこの村へと訪れた時に、この村の中心に突き刺した一本の大剣があるのだ。この剣は彼が駆け出し時代から使っていた物らしい。それを強化し、最終強化版にした大剣……。まさに彼の相棒なのだ。

リリア達は村長から語られる話を聞きながら、その大剣に触れていた……

錆び付いた剣には数々の傷跡が残っていた。

その傷跡はハンターの様々な歴史が刻んである……

そして、村長は腕を組み、笑いながら言った

「その剣、引っこ抜いて見れば？きつといい剣だよー」

「いいのか！？つしゃあ！！英雄の剣は私のだあー！！！！！！」

それを聞いた瞬間、エアロが大剣の柄に手をかけ、思い切り引っ張った

しかし、大剣はビクとも動かない。

全力で引つ張るも、全然動かない・・・

すると、ゼロがゆっくりと言った

「・・・その剣は選ばれし者にしか抜けないらしい。」

ぜえぜえと息を荒くしたエアロは肩で息をしながら言った

「そ、それを・・・早く言えって・・・」

「ゼロさんも抜けないんですか？」

フィリアがエアロをさすりながら言った

すると、ゼロはゆっくりと言った

「・・・ああ。俺も抜けなかった」

「なるほど・・・」

そっぴいながら、リリアは剣を触った

錆びているが、この剣からは何かを感じる・・・
まるで、誰かを求める様な・・・

リリアは手に力を込め、ゆっくりと剣を引つ張った

・・・しかし、まったく上がる気配が無い。

そう判断したリリアは手を離し、ゼロの元へ向かった

「駄目だ・・・」

「……まあ、しょうがないだろう。村人全員でやっても抜けないんだ。」

ゼロがリリアの頭を撫でながら言った

リリアは少し心地いいのか、笑顔でゼロを見た

(な、なぜそこで笑顔になる……?)

若干驚きながらも、ゼロは村長の呼ばれ、村長の元へ行った

エアロは少し羨ましそうにリリアを見て、フィリアは心の木に触れて、目を瞑っていた

「じゃじゃじゃーん!!!!ここが君達の住み家!!!!」

村長が案内した家は赤、緑、空色と、色が別々の屋根の家だった
すると、エアロは家を見回し、空色の家の前に走り

「ここ、あたしが貰うー!!!!」

と叫び、嬉しそうにくるくると回っていた

すると、フィリアは緑色の屋根の家の前に立った

「では、私はこの家をお願いします。」

「それじゃ、私はここだな。」

エアロ、フィリア、リリアの三人の新しい家が決まり、さっそく彼

女達は新しい家に家具等を運び始めた。

ゼロは彼女達が家具を家に運んでいる時、ハーツ山でゆっくりと空を見ていた。

やっぱり、この空は綺麗だ・・・
修行時代を思い出させてくれる・・・

『どうした、　　？その程度か？だらしないな。』

師匠・・・ラグナスが余裕のある表情で小さい頃のゼロに言った
ゼロは必死にラグナスに一撃を喰らわそうと攻撃を重ねる。
この頃は片手剣を主に使っていた・・・

『でええええええい！！！！』

壁を蹴り、ラグナスへとジャンプ斬りを喰らわせようとする・・・
しかし、ラグナスは双剣をクロスさせ、ジャンプ斬りを防ぎ、無駄
の無い動きで双剣をしまい、ゼロの胸倉を掴み、背負い投げをした

『ぐあああッ！?!?!?』

ゼロは柔らかい草原に叩き付けられた。

ゼロは必死に立ち上がる・・・

『泣くな、 。強くなれ。』

ゼロは目から溢れる涙をごしごしと拭き、ラグナスに再度立ち向かった……

あの頃の記憶はまだまだ残っている。

あの上に食べたラグナス特製スープはとてもじゃないが食べれなかったが、無理矢理食べさせられ、次の日地獄を見た事はまだ覚えている。

ラグナスは腕はいいが、料理の腕はからつきしで、チームの中では「あの料理で人は死ぬる」といわれていた。

肉を焼けばあつと言う間に焦げ、まるで灰をかじっているのと同じ感覚になるらしい。

ゼロはそれをきっかけに料理をし始め、今では王族の料理長に弟子入りを頼まれるほどだが、断っているのだ。

昔、王女がどうしても食べたいとお願いをしに来て、食べさせたら、王女専用の料理人になれと言われたが、丁重にお断りした。

「……家……か。」

それはゼロが生まれて間もない頃、父親と母親の顔を思い浮かべる……

父はハンター……

母は酒場の受付嬢だったらしい。

両親の顔は今でも覚えている。

しかし、いきなり現れた古龍に襲われ、死亡してしまったのだ。

その後、ゼロは倒れ、拾ってくれたのがラグナスなのだ。

昔の家は酷く狭く感じられた

自分以外誰も居ない部屋。

誰も居ない居間・・・

誰もくつろいでいない母達の部屋・・・

ゼロは家を抜け出し、ただ世界を見たかった。

ほんの5歳の少年がする事ではない・・・

「・・・・・・・・・・」

ゼロはただこの空を見上げる。

あの頃とまったく変わっていない。

だが、自分は変わってしまった。

今はもう夕暮れだ・・・そろそろ降りようか・・・

そう考えた時だった。

二人の顔が頭の中に過よぎる

すると、立ち上がった足が止まった

「・・・父さん・・・母さん・・・」

いつの間にか涙が出てきた

涙なんて何年ぶりに流した事だろう・・・

「・・・・・・・・ゼロ。」

声を掛けられ、静かに目を擦った。
そして、振り向くとリリアが居た
素っ気無い態度で彼女と話す

「・・・なんだ？」

「・・・泣いてたの？」

リリアはゼロの後ろに立った
そして、ゼロへといった

「・・・泣いてなんか・・・ない。」

「嘘。」

そして、リリアは静かにゼロを抱きしめた
この時、ゼロは何をして言いか分からず、ただリリアを見ていた

「泣いても・・・いいんだぞ？」

「リリア・・・」

すると、リリアの背中に手を回した
そして、ただ流れてくる涙と共に言った

「俺は・・・馬鹿な男だ。人の涙が嫌いで、悲しむ顔が嫌いで・・・
ただ、そんな顔をさせたくないから戦って・・・でも、俺の力に脅
えて、俺の周りから人は居なくなっていく・・・俺は一人で戦い
続けると・・・決めただ・・・」

「うん・・・」

泣いているゼロは、ただリリアに向かい言った
その涙はただ流れ、地面に落ち、吸い込まれていった

「ゼロは一人じゃない・・・私達が居るだろう？それに、昔の仲間
だって居る・・・私はお前と一緒に狩りができて嬉しい。でも、こ
れからもお前と一緒に居たい・・・ずっと・・・ずっとな・・・/
／／／」

「・・・あり・・・と・・・」

ゼロから小さく途切れた言葉がリリアに向けられた
そして、ゼロは腕に力を込めていった

「あり・・・が・・・とう。／／／」

いつの間にかに涙は止まり、ただリリアを抱きしめていた。
しかし、気づいた事があった。

彼女の豊満な胸が見事に当たっている！
それに気づいたゼロはゆっくりと離れ
リリアに言った

「そ、そういえば、どうして俺の所へ・・・？」

「えー？あ、いや！？ただ、家具とか運ぶのが終わったから、ゼロ
を迎えに行つて来いって・・・／／／」

リリアは自分の言った言葉を思い出す・・・

『これからもお前と一緒に居たい・・・ずっと・・・ずっと』

これは、捕らえ方によっては完璧に告白の言葉である。
しかし、ゼロは立ち上がり、リリアに手を差し伸べた

「行く。」

すると、いつもの間は無く、ただこちらを見ているゼロが居た・・・
ゼロの差し伸べられた手に？ まり、しっかりと立ち上がる。

(よかった・・・気づかれてないようだ・・・いや、気づいて貰った方が・・・って、何を考えているんだ私は!!!)

内心、気づいてもらえればよかったと思いつつもゼロと共にハイツ村へ降りていく・・・

手と手を繋ぎ、自分達の後ろに伸びる影はとても長かった・・・

(・・・人の手って・・・こんなに温かいんだな・・・)

ゼロは4歳の頃の記憶を思い出す。

母親と父親と手を繋ぎ、一緒に帰った記憶がある・・・
隣に居るリリアの顔は夕日に照らされ、とても美しく見えた・・・
すると、何故か顔が赤くなり、リリアから視線を変えた
そして、村に降りたゼロ達は手を繋いでいる所が目撃され、ゼロとリリアは尋問を受けたのは言うまでも無い。

第十話 家（後書き）

次回予告！！！！

G級に昇格した彼女達は順調にクエストをこなし、ゼロとの距離も近づいた！

しかし、今度のクエストは・・・

次回！

「戦う意思、強き思い」

ゼロ」と言うか、今度から簡単なあらすじは要らない気がする・・・」

「うっさいわボゲエ！！」

第十一話 戦う意思、強き思い(前書き)

簡単なあらすじ・・・

ゼロ「以下省略。」

「って!!お前ツッコミキャラだろおが!!!!!!」

ゼロ「絶龍人物語。始まるぞ。」

「人の話を聞けえ————!!!!!!」

第十一話 戦う意思、強き思い

G級ハンターになったリリア達はまず、昔、主に狩りを行われていた樹海、旧密林等の素材ツアーのクエストをやった。

でてきたモンスターの強さは上級では味わえないほどスリリングで、ハードだった。

何より、旧沼地に行った時にバサルモスが現れ、彼女達に襲い掛かったが、ゼロの的確な指示と実力でなんとか狩る事ができた。

旧砂漠に行った時に突然ダイミョウザザミが現れ、ついでに狩ったのは言うまでもない。

そして、今、彼女達は……

「
　　」

エアロがご機嫌でブルーネル姉妹が経営する酒場に入ってきた
すると、二人からはいらっしやいといわれ、水を渡された

「やけにご機嫌なのね、エアロ。」

「だつてえ〜 この前注文したヒプノックの装備が今日できあがる
んだぜー？ 楽しみ楽しみ〜」

彼女は遊撃型ガンナーなので、装備はできれば凝固で、尚且つ動き

やすい物が一番いいのだ。

そして、今日届くのはヒプノックのガンナー装備一式。それが待ち遠しいようだ。

「おはようございます・・・って、エアロさん居たんですね。」

すると、フィリアがエアロを見つけ、向かい側の席に座り水を貰った

「あれ？ゼロとりリアは？」

エアロがフィリアに質問した。すると、フィリアは丁寧に答えた

「ゼロさんは、村長さんに呼ばれて、リアさんは、新しい装備を注文しに行きましたよ？」

「なんだよー。あたし達二人だけかー」

エアロが机に屈服し言った。

彼女はブルーネル姉妹に料理を注文し、食べる事にした
フィリアも同じ事を考えたのか、料理を注文した

「で、村長？俺に話って何だ？」

「ほお、まさか君から話かけてくるとは・・・彼女達のおかげかね」

ゼロは少しむつとなり、村長を睨んだ

「おやおや、君でもそんな顔できるんだね。子供の頃以来だね、そんな顔見たの」

「からかわないでくれ。とっとと用件を言ってくれ。」

「もう、冷たいねえ」

ゼロは少し心を開いたが、相変わらず冷めた態度は変わらなかった後、もう少しで彼が笑うだろう。

そんな事を思いながらも村長はドンドルマから渡された紙をゼロに渡した

「これは……?」

「今度、王族の間で料理会が開かれるらしいんだ。で、肝心なダイミヨウザザミの肉が切れちゃったんだって。だから、君達に直々にお願いをしたって訳さ。」

「……俺はまた料理長になれとかそういう関係だと思ってひやひやしたぞ……」

ほっと安心した彼の表情の変化を見たのもずいぶんと久しぶりだ。そして、村長は静かに言った

「でも、その依頼はちよーっと大変なんだって。」

「……なるほど。」

依頼紙を見ると「近頃ダイミヨウザザミの亜種が目撃されている。送った偵察者達は、大怪我で帰ってきた……」それを見る限り、上級のダイミヨウザザミを狩って欲しいという依頼だが、もしかしたら、亜種と遭遇するかもしれないという依頼だった。

「分かった。引き受けよう……」

この時、旧砂漠で蠢くこごめ紫色の甲殻を身に纏ったモンスターが居た……

「というわけで、今回の依頼はダイミヨウザザミを狩る事だ。だが、注意してもらいたいのは、亜種だ。」

ゼロが酒場に行き、フィリア、エアロに次の依頼の説明をしていた。その途中、げっそりしたフィリアがこちらへ酒場へきたのは気にかかったが、無視する方向性でいこう。

そして、解散した一行は、それぞれの装備と、必需品を用意する為家へと向かった

ゼロは氷属性の太刀、氷刃【雪月花】を取り出し、エアロは新しい装備へと着替えた

そして、アビス号の前ではゼロ、フィリア、フィリアは揃っているが、

エアロがまだ来ない・・・
すると、こちらへ走ってくる影があった

「ごめーん！！遅れたあ！！！！」

すると、こちらへ走ってきたのはエアロであった。

そして、新しい彼女の装備を三人（ゼロは見ない様に努力したが、チラ見している）は凝視した

整ったボディラインから突き出た大きな胸。

それを覆う様にヒプノックの橙毛があり、とても美しく見せていた

「さあ、行こうぜえー！！！！」

エアロがアビス号に乗り込み言った

すると、我に返った三人は急いで出航の準備をした

「しかし、彼のあんな顔を見るのは久々だなあ・・・」

村長が自分の家で酒を飲みながら言った

村長の趣味は酒を作る事、そして、その酒を村のみんなと飲むことである。

彼の自慢の酒はほんに人をほろ酔い気分にした・・・

『俺は、ラグナス師匠を超える男になるんだ!!!』

そついい、十文字を作り上げた彼はこの村を飛び出していった……だが、帰ってきた時、彼は心を閉ざしてしまった……

「アナタ、お昼からお酒はだめよ？二日酔いになりますよ？」

「いいじゃないか。それに、僕はすでに君に酔っているから」

そついいながらも、イチヤイチャする二人は、この村有名のカップルである。

実は、彼女と付き合う前に、一回だけゼロに相談したのである。すると

『なら、村長にできる事をやってあげればいいじゃんか。俺にそんな事聞く方が間違ってるぞー？』

少年時代のゼロが村長に言い放ち、次の日に告白し、見事結ばれたのだ……

だから、彼には人並みの幸せを得て欲しいのだ。

村長のように……

「うわー！ー！ー！潮風が気持ちいいー！ー！ー！ー！ー！」

新装備のエアロはヘルムを脱ぎ、とても広い海を見ながら言った

旧砂漠に行くにはアプトロスでも結構な道のりなので、長老の許可でゼロ達は船で向かっているのである。

旧砂漠には二つのベースキャンプが存在し、一つは一般ハンター用、そして、もう一つが海に面した場所に位置するのだ。

それはゼロが師匠の亡骸を探す時に、村長がゼロ用にテントを渡してくれたのだ。

そのベースキャンプはとても広く、快適で、モンスターも近寄れない場所に位置するが、絶壁とも言える大きな崖のせいでモンスターは上れず、そして、ゲネポス等のモンスターは近寄れず、最高にいいベースキャンプなのだ。

「まったく、これは船旅ではないというに・・・」

ゼロが呆れながら舵をとった。

すると、リリアは持ってきた釣竿をたらし、釣りを始めた。リリアはハンモックに乗りながら昼寝といった所だろうか・・・

「いつからこんなに愉快になったんだ・・・？」

そんな疑問は海の底へと消え、ゼロ達は旧砂漠に到着するのであった。

第十一話 戦う意思、強き思い（後書き）

小ネタ

ゼロ「・・・お前等、いつハンモックなんて取り付けた・・・」

フィリア「ご勝手ながら、家具を移している時にエアロさんが・・・」

エアロ「いいじゃん!!船に揺られ、潮風を吸い・・・そして、美しい海!!これほどいい物なんてないだろ!!」

ゼロ「・・・酔いやすくなるぞ?」

エアロ「大丈夫大丈夫。・・・うっ」

ゼロ「駄目じゃねえか!!!!」

エアロ「・・・え?」

フィリア「ゼロさんが・・・叫んだ?」

リリア「嘘・・・だろ?」

ゼロ「あ、いや・・・き、気にするな!もつすぐ着くから準備しろ!!!!」

リリア「……可愛いなあ……（ゼロの子供っぽい所が）」

フィリア「どうかしました?」

エアロ「ゼロおー!?!?!なんで叫んだんだよー?」

ゼロ「うるさい!?!?!寄るな!?!?!抱きつくな!?!?!/ / / /」

次回予告!?!

「以下省略 BYゼロ」

次回!「亜種」

第十二話 亜種（前書き）

簡単な・・・

エアロ「ゼロー！！なんだかデツカイ魚釣れたんだけど、どーすればいいー？」

ゼロ「知らん。焼いて食べ。」

だから、邪魔するなって！！！！

フィリア「絶龍人物語、始まりです。」

フィリアさんも無視しないでー！！！！！！！！！！

第十二話 亜種

ベースキャンプに到着したゼロ達は短い船旅で疲れたのか、ゼロにご飯を作ってくれと頼んだ。

すると、ゼロの作った料理を頬張りながらも作戦会議を始めていた

「いいか？ダイミヨウザザミは上位ランクと言う報告が来ている。

だから、俺達でも難無くできるクエストだろう。しかし、問題はダイミヨウザザミ亜種だ。」

「ふおふえっふえどんふあいふおはほ？（それってどんな色なの？）

エアロはゼロの料理を口に含みながら喋ったため、何を言っているか分からない。

しかし、ゼロは理解したのか、言った

「普通のダイミヨウザザミと違い、亜種の背負っている頭骨は全然違う。普通のダイミヨウザザミはモノブロスの骨を愛用するが、亜種はディアブロスの頭骨を愛用するんだ。そして、エアロ。お前はちゃんと飲み込んでから喋れ。口の中が見えて汚い。」

ゼロはエアロ達にちゃんと伝えると同時にエアロの食べ方も注意した。

すると、フィリアが持っているダイミヨウザザミ亜種の資料を見た

「えっと・・・亜種はどうやら、雷属性より、氷属性の方が有効のようですね・・・」

「なるほど、だからゼロは氷属性の太刀を・・・」

そういい、ゼロが誤って持ってきたと思われる太刀を見た
その太刀はまるで降り積もる雪の様に輝いていて、とても煌びやかな光を放っている

「まあ、そういう事だ。食べ終わったらとっとと行こう。もしかしたら領土争いが始まるからな・・・」

ゼロは食べていた皿をさげ、ゆっくりと言った
そして、一時的にアビス号へと戻った

「ご主人様ー。ホントにいいんですかー？」

「アルファ、しつこいですよ？ゼロ様、この船の管理は任せてください。」

二匹の心強いオトモマイルーを見ながら言った
すると、ゼロは頭を撫で、二匹の守るこの船を後にした

「さて、行こう。」

ゼロが船から出ると、親切にもフィリアが皿を洗っていてくれた
ゼロはフィリアに「ありがとう」とお礼を言うと、エアロとフィリアから物凄い変なオーラを発せられ、たじたじになるのであった・・・

ベースキャンプから出る前にゼロ達はクーラードリンクを取り出し、飲み干した

そして、ベースキャンプから離れていくとどんどんと気温が上昇していった……

あたり一面砂と岩……

ここは本当に砂漠……

何も無い……

そんな中、4人はただひたすらに目標であるダイミヨウザザミの居る位置を確認した。

ゼロのスキルは「高級耳栓、早食い、捕獲の見極め、悪霊の加護」そして、武器のスロットと合わせてようやく発動する「自動マーキング」。

ゼロが三人を導くと、ゼロがその場で止まった

「……嘘だろ……？」

「どうした？ゼロ？」

すると、ゼロから驚くべき言葉が告げられた

「ダイミヨウザザミが……三頭居る……」

ゼロが静かに言うと、三人は驚きを隠せなかった、そんな中、ゼロ

がまた衝撃の事実を告げた

「その内・・・一頭が・・・死んだ」

「マジかよ!？」

ゼロ達は死んだダイミヨウザザミの居る場所へ向かうと、ゲネポスが数匹ダイミヨウザザミの死肉をあさっていた

エアロとフィリアはゲネポスを一頭も逃がさず、その場で撃ち殺したそして、ゲネポス達のあさっていたダイミヨウザザミの死体を見たとても大きな穴が三つ・・・

正面と反対側から突き刺された様だ・・・
頭骨は粉々に粉碎され、血は砂漠の砂に落ちると同時に蒸発している・・・

胸から溢れるサザミソはゲネポス達が食べていた為、麻痺毒がある危険性があるので、採取はしなかった

「ッ!？散開!?!?!」

ゼロがいきなり叫ぶと、ドドドドドドッ!?!と地面が大きく揺れたそこからとても大きな二本角の頭骨を使用する紫色の甲殻・・・
そして、地上に現れた巨体は4人を大きく凌駕していた

それは、ダイミヨウザザミの亜種。

こちらへ向かってくる事に気づいたゼロはメンバーを散り散りにさせ、三人の居た場所の真ん中に亜種が来る様に誘導したのである。

これは、歴戦の者にしか成せぬ技である

ゼロは太刀に手をかけ、亜種目掛けて剣を振った

ガキインと太刀と亜種の爪がぶつかり合った

すると、亜種はもう片方の爪でゼロをはさみ殺そうとしたが、リリアがそれを無理矢理爪を攻撃し、狙いを逸らしたのだ
後ろへ回避している時、ゼロはある異変に気づいた

この亜種の頭角の真ん中に穴が開いている・・・

そして、角の一部が欠けている・・・

「くっ、フィリア！」

ゼロが後退しながら言った

すると、フィリアは雪山の素材ツアード遭遇したドドブランゴの素材を生かした新武器

「テイルランチャー」を取り出した。

テイルランチャーは状態以上の弾を撃てなくする代わりに、属性弾を撃ち込むことができるのだ。

しかも、氷結弾を連射できるという大きなメリットもあるのだ。

エアロは駆け出し時代に愛用していた「ニクスファアボウ」の強化版「グラフィファアボウ？」を使っていた

実は、グラフィファアボウ？に最終強化しようと思ったが、マボロシチヨウが一匹も手に入らず、まだ作れてないのである。

フィリアの代わりに状態以上にさせる為に麻痺ビンを縫った弓矢を打ち込む

そして、フィリアは氷結弾をどんどんと亜種に叩き込んでいく

リリアはゼロのサポートに周り、攻撃を繰り返していた

この巨体を転ばすいい手は・・・

そう考えながらもリリアは攻撃の手を緩めない

ゼロは隙のできる瞬間を見逃さず、弱点である関節と関節の間を切

号を出していたどうやら、眠っている様だ・・・
なぜ眠っている理由が分かった

恐らく、ダイミヨウザザミ亜種と領土争いをしている所にあの上位のダイミヨウザザミが乱入したが、二匹に刺し殺され、死亡。

その後、領土を争っていた所、互いに突撃で攻撃しあい、ダイミヨウザザミのモノブ羅斯の角と、ディアブ羅斯の角がぶつかり合い、互いを貫いたようだ。

しかし、弱点である肉がむき出しにされ、危険と判断し逃げたのだろう。

「・・・最後の一匹は致命傷を負いながらも、まだ生きている。だが、今は傷を治すために眠っているはずだ。」

三人にそう告げ、早速剥ぎ取りを始めた

やはり、ダイミヨウザザミと違い、甲殻の質も全然違うことに驚きつつも、解体を続ける

盾蟹の紫殻、盾蟹の紫爪、堅竜骨、極上黒真珠、極上ザザミソを剥ぎ取る事ができた。

そして、4人は残りの一匹の居るエリアへと向かった

すると、ヤドが破壊され、血を流しながら眠っている一匹のダイミヨウザザミが居た。

そっと近寄り、シビレ罠を設置する・・・

そして、ゼロが罠を仕掛け終わると、ゼロはその場で回避運動をし、後ろに居るエアロがダイミヨウザザミに石ころを投げつけた

起き上がったダイミヨウザザミは4人に気づき、まっすぐとこちらへ向かってくると、罠にかかり、その場でもがき苦しんだ

そして、ゼロとフィリアが共同で顔に麻酔弾などを投げつけ、捕獲に成功した

「いやー、今回は疲れた疲れたー」

エアロは笑いながらベースキャンプへと目指していた。周りにはゲネポス達が少し警戒しながら見ている。

しかし、ダイミヨウザザミの死肉を荒らしにいきたいが為に、ゼロ達を放置したのだ。

勿論、亜種の死骸は気球から降りてきた解体メンバーが見ているため、近寄れないのだ。

解体メンバーに捕獲したダイミヨウザザミが居る場所を教え、ゼロ達はアビス号へと向かっているのだ

アビス号では、二匹のアイルーがせっせと掃除をしていた。そこへ、予想よりも早くゼロ達が帰ってきたのだ。

「あつ、ご主人様おかえりー。」

「ゼロ様、おかえりなさいませ。」

ぺこっと挨拶する二匹のアイルーはとても愛くるしく、エアロは挨拶をした瞬間に即効でアルファを抱きしめている

「紹介する。アルファとマサムネだ。」

「アルファっていいです。よろしく願います。」

「マサムネと申します。我が主がお世話になっております。」

ぺこつとマサムネが頭を下げた

「マサムネ、少し疲れたから、舵は任せていいか？」

「了解しましたマスター。」

そういい、ゼロは自室へと向かった

アルファはエアロとじゃれついており、フィリアも参加し、楽しいひと時を過ごしたとか・・・

第十二話 亜種（後書き）

小ネタ

アルファ「ご主人様ー」

ゼロ「アルファ……（撫で撫で）」

アルファ「にゃーー」

フィリア「微笑ましいですねー」

エアロ「ホントホント……（どくどく）」

フィリア「溢れている鼻血はちゃんと拭きましようねー……あれ？リリアさん？」

リリア（ううむ……ゼロの膝の上で撫でられている……羨ましい……）

次回予告ー！！

帰るや否やドンドルマ上部の人間が村長に緊急の依頼を渡した！！
それに気づいたゼロはその依頼を見た……
その内容は……

次回！「我が倂王女の成長」

第十三話 我が仮王女の成長（前書き）

簡単な・・・

エアロ「さて、今日のゼロの料理教室はー？」

ゼロ「・・・王女もビックリ、チーズステーキを紹介する」

だから、貴様！！！！邪魔をするなど言つた筈だ！！！！

リリア「絶龍人物語、始まるぞ。」

・・・もついいや（泣）

第十三話 我が倂王女の成長

ハーツ村に到着したゼロ達は、家に帰り、持ち帰った素材を置きに行った

しかし、ゼロは村長に呼び止められ、話をしていた

すると、村長の懐から取り出されたのは黄色い依頼書にも見える手紙だった

これは……

「第三王女様から、君宛てだよ？」

「……はあ……」

ゼロは嫌々ながらも村長から依頼書……ではなく王族からの直属の手紙だ。

すると、細かく、美しい字が見え始め、ゼロはそれを読み始めた

『信愛する我が夫、ゼロ・ダークネスへ』

それを見た瞬間、ゼロはこの紙を引き裂きたいと心から思ったが、下に続いている文字を読み始めた

『元気かの？童わらわは元気じゃぞ。ゼロは相変わあひかわらず無愛想な顔でこの手紙を読んでくれるんじやろうなあ。』

しかし、童は分かっているぞ お主はツンデレだからのお 』

そこまで読んだぜ口は静かに村長に言った

「なあ？これを今すぐ燃やしてもいいか？」

「駄目駄目駄目！！！届いた恋文は最後まで読まなきゃ！！！」

「・・・むう」

そう言いながらも手紙を読み始めた

すると、長い文章には彼女の最近起きた出来事、父親である王の悪口・・・

そして、ようやく終わりに近づいた頃だった

『実はのう・・・童の国境付近でも大きな黒い龍の影を見たと言う噂があるのじゃ。だが、気球の者達に話を聞いた所、何も居なかったそうじゃ。』

近々童の城に遊びに来るがいい、丁重にもてなすぞ
それではな。我が夫よ。

未来の妻 レイン・スピリアン・バークライトより。』

「・・・はあ。」

読み終わったぜ口はとても疲れた。

何せ、十文字時代に護衛をしただけなのに、いきなり婚約を進められ、丁重に断つてもなお婚約を進めてくる彼女・・・レインに少々

呆れていた

バークライト国家はシュレイド国家にもっとも近いとされる大きな街である。

村人達の笑顔は絶えず、美しい自然が有名な場所である。

その第三王女の彼女から、言い寄られている理由がいまいち分からなかった。

もともと、彼女とゼロの歳は全然違うのだ。

ゼロは17歳だが、彼女はまだ14歳・・・

本人曰く「もう大人じゃ!!」らしい。

そんなゼロの肩にそっと手を置いてくれた村長には少し感謝した。

「そんじゃー！ダイミヨウザザミを狩った事を記念してかんぱーーい！！！！！」

エアロが高らかに酒を持ち上げ言った

すると、リリア、フィリアも高く手をあげ、乾杯した。

ゼロは酒ではなく、ブドウジュースを少し低く挙げた

実は、酒を飲むと泥酔するまで飲むという男なのだ。

一回飲むとまったく止まらず、ブルーネル姉妹が困ったのは言うまでも無い。

席にはゼロ、リリア、フィリア、エアロ。

そして、何故かナタリアが出席しているが、気にしないことにしよう。

「ゼロー。あゝん」

すると、ナタリアが早速ゼロに向かいアプローチを始めた。ゼロは拒否したが、ナタリアがゼロを無理矢理抱きしめた！それに驚いたリリア達は急いでゼロを救出。

キーアがナタリアを厨房に連れ去り、罰として皿洗いをさせられた。
・

「キーア、これやり過ぎとちゃうん？」

「黙らっしゃい！！早く皿洗いなさいよ！！一枚でも割ってみなさい！レイ八姉さん呼び出して締め上げてもらうから！！」

「全身全霊で皿洗いをさせていただきます！！！！」

ナタリアはやはり、レイ八の事が苦手の様だ・・・

スノウはゼロに水を飲ませ、少し顔を赤くしながら言った

「大丈夫ですか？」

「げほっ・・・ごほっ・・・これが大丈夫に見えてたらドンドルマに目の治療に行つて来い・・・」

ゼロはナタリアの胸の間に無理矢理押し込められ、息ができず、あと少しで窒息していた所だろう。

恐るべし、ナタリア・・・

「しっかし、ゼロが酒が苦手なんて、子供だなあ」

酒を飲んで、酔ったエアロはゼロの頬をぷにぷにと触りながら言った
ゼロはうるさいといい、箸を進めた

「・・・・・・・・」

リリアが先ほどから何も喋ろうとしていない・・・
フィリアは少し気につけ、リリアに話しかた・・・

「あの？リリアさん？」

「ぜろお～～」

案の定、酔っており、突然隣に居たゼロに抱きついた
勢いをつけたリリアに抱きつかれ、横に倒れたゼロは酔ったリリア
を傷付けてはいけないと判断し、抱きしめて反動を軽減した
しかし、これは間違った行動だった

「うつふふ～ ぜろあつたかい」

「リリア、とりあえず離れてくれ。痛い・・・」

すりすりと頬擦りするリリアはまるで猫のようにゼロに甘えている
リリアから押し当てられた胸は柔らかく、本人からも甘い匂いがし
て、ゼロはある意味生き地獄を堪能していた。
すると、少し顔のリリアはゼロと視線をあわせ、ゆっくりと顔を近
づけていった・・・

「ちょっとリリア!!!! 離れなさいよ!!!! / / / /」

顔を赤くしたキーアはリリアを引っぺがし、ゼロとのキスを妨げたと、リリアから不満の声があがった

「むううっ・・・べつにいいじゃん。へるもんじゃないんだからあゝ」

「減る!!!! 確実にゼロの何かが減るわ!!!! ね!? ゼロ!?!」

「よく分からんが、そうだ!」

ゼロはさっき何されるか分からず、とりあえず、キーアに加担した方がいいと考え、加担した

すると、リリアはむっと頬を膨らませ、装備を脱ぎ始めた

「ちよちよちよちよと!!!!!! 何脱ごうとしてるのよ!?! / / /」

「だつてえゝ、あついのぉ・・・」

脱ぎ始めたリリアの身体はすらつと美しいボディラインを描いており、10人いたら、まったく関係ない者まで彼女を見るだろう。

すると、リリアの瞼がゆっくりと閉じていき、眠ってしまったようだ・・・

「ま、まったく・・・このデカ乳娘は・・・そりゃ、ちょっとは憧れるけどさ・・・ / / / /」

キーアが自分の胸を見ながら言った。

大、中、小で表すなら、大体中の小といった所だろうか。
もっとも、ナタリア、エアロ、リリアは大よりも大きい、巨の部類に入るだろうが・・・

ブルーネル姉妹もリリアの様な胸に憧れを抱くし、何より、小さい頃から思い続けた青年に恋しているのだ。

少しでも惹かれる要素は欲しい・・・

そう考えながらも、キアはリリアをあいている席に眠らせた

その後も、酒を飲みながら祝杯は続いた・・・

『グルルルルルツ・・・・・・』

今は地図にすら名前を載せていない、名も無い国にとても大きな黒龍が居た・・・

片目は昔襲った城で戦った少年に突き刺され、見えなくなっている・・・

第十三話 我が仮王女の成長（後書き）

次回予告！

エアロ「もう面倒だから、あたしがやる！！次回！」「絶影」！！！」

あれ？いつの間にか俺の役割が奪われていくぞ・・・？

閑話 ゼロ・ダークネスの修行時代（前書き）

今回は、ゼロの身の回りに起きる修羅場・・・
もとい、コメディっぽいお話

閑話 ゼロ・ダークネスの修行時代

.....

初めまして・・・と言ったらいいのか？

俺はゼロ・ダークネス。

世間では絶龍人と言われている。

俺はそんなことに興味は無いがな。

さて、今回の話は・・・特に無いな。

なんだ？その顔は？

なんか無いのかって？

.....あると言えはあがあるが.....

つまらない話だぞ？

それでもいいなら、聞いてくれ.....

あれは、まだ俺がラグナス師匠に弟子入りした時だったな・・・

(ここからは、少年時代の俺が話を進める。テンション等が違うが、気にするな。)

「いいいいやっほおおおおおっ!!! 元気が!!!」

「はいはい。師匠。おはようございます。」

俺は だ。

これは俺の師匠のラグナスさんだ!

ってのは俺の名前だ!

だけど、物語の関係上、まだ明かせねえんだ!悪いな!!!

「さて、弟子よ。今日の修行は・・・夜空を見上げながら寝ようか。」

「修行じゃねえじゃん!!!ただ寝るだけなんかい!!!しかも夜空を見上げながらって、普通は風邪引くわ!!!」

まったく。

この人はポケてばっかりで困る・・・
ちなみに、俺はツッコミ気質だから、意外とツッコムんだぜ？
覚えておけよ、これテストに出るから。

「分かったよおう。弟子がそこまで言うなら、俺だって真面目に修行してやるよ！！！」

「逆ギレすんな！！仮にも大人だろうが！！！！それだから、ランさんに嫌われるんだぞ！！！」

まったく・・・この人は・・・

あつ、ちなみに、ランさんはラグナス師匠の彼女で、師匠曰く（将来の嫁）らしい。

だけど、師匠が会いに行つて、抱きついたりすると殴り飛ばすほどの人だ！

でもその後にはぼそぼそ言うけどうまく聞こえないだよなあ・・・

「うるさい！！俺の嫁を出すな！！！！（泣目）」

「涙目で言われちゃ説得力ねえよ！！！！！」

こうして、俺は愛刀の「アサシンカリング」を背中に背負い言った俺達はフリーハンターなのだ。

フリーハンターとは、自由にモンスターの居る区域を駆け、好きにモンスターを狩っていいととてもいい制度なのだが、ハンターランクという物が存在しないため、一般的にはどこかへ所属するのだ。

そして、危険区域なので、金は無いし、自給自足で生活するのだ！このアサシンカリングは、この師匠が打ったものである。

師匠はハンターであると同時に、武器の生成、そして強化まで行え

る万能な人なのだ!!!

ちなみに、俺も武器の作り方を教わっているので、将来が楽しみだぜ!!!!

(もつとも、今のゼロの姿を見たら色々と崩れるのである。 By 作者)

「それと!!!ちゃんどゲリヨスも狩ったし!!!フルフルから電気袋も剥ぎ取ったし!!!竜骨【大】だって揃ってるからいい加減サンダーペイン作ってくれよ!!!!」

「まったく、君はあせりすぎなんだよう。もつと師弟の関係をだねえ.....って、竜骨【大】はまだ持つてないでしょ」

「うっさいですよ!!!!それに、師弟関係だからといって、人の掛け布団を奪うのはどうかと思いますよ!!!!」

そう!!!!何を隠そうこの人は.....

寝相超悪い.....

朝起こそうとするも、引っ掻いて蚯蚓腫れにさせるわ.....

水ぶっ掛けるとキレるわ.....

大変なんだぞ!!!!

「はいはい。分かった分かった。それじゃあ、今度は砂漠にでも行こうか。今度はガノトトスを一人で狩れるか試練だ!!!!」

「.....つか、ソレ前も言ったし、ガノトトスって弱いな。アサシಂಗリングでも余裕で狩れんの。これも師匠からの教えだなあ.....」

「……はい？」

「だから、この前に密林に行った時に、ガノトトスが現れたんで、適当に相手してたらいつの間にか水中に逃げ込んだんで、頭きて音爆弾ぶん投げたらいきなり陸に上がってくるし……なんなんですようね？あれ。」

「……そ、その証拠は……？」

「はい。ガノトトスの素材です。」

俺はバツクに入れている「水竜の鱗 竜骨【大】 魚竜の牙」を取り出し言った。

すると師匠が血相を変えて俺に振り向いてきた

「……今度はティガレックスな。頑張れよ。サンダーペインは今日中に作つとくから……」

「え？何！？師匠！？師匠！？なんでそんなに顔が青いんですか！？ねえ師匠！？師匠おおおおおおおおお！！！！？！！？！！？」

それから数年後、ドンドルマと言う大きな街に所属し、とても大きな闇と対峙するという事は・・・
まだ誰も知らない・・・

閑話 ゼロ・タークネスの修行時代（後書き）

今回は少年時代のゼロのお話でした！

ちなみに、この時のゼロの年齢は6歳から8歳ですよー。

閑話 ゼロ・ダークネスの受難（前書き）

ゼロ（修行時代）「簡単なあらすじ。

俺は師匠とフリーハンターをしていた。

師匠は相変わらずやる気がゼロ。

そして、そんな師匠が見てくれないので俺はガノトトスを狩りに
すると、ラッキーな事に竜骨【大】をゲット

これでサンダーペインが作れる・・・

そう思ったのも束の間、師匠が新たに俺に無理難題を押し付けてき
た！！

今度の標的は・・・ティガレックス！？そんなの聞いてねえよ！

！！

閑話！ゼロ・ダークネスの受難！！！！始まるぜ！！！！」

閑話 ゼロ・ダークネスの受難

「それじゃあ弟子、俺はゆっくりとベースキャンプでエールを遅らせてもらっぜえ、頑張れよー」

あれから数日、密林から一週間をかけて到着したのは灼熱の台地「砂漠」。

この砂漠は「リユング砂漠」と呼ばれ、フリーハンターでも滅多に近寄らない

B+級危険区域である。

俺はそこでティガレックスを狩らなければいけないのである。

まったく、無理難題はいつもの事だが、なんで俺がこんな目に・・・

俺は最初にベースキャンプに置かれているクーラードリンクを3つほど拝借し、ゆっくりとベースキャンプから走り出した。

ちなみに、俺の装備はレウスシリーズだ。

攻撃力UP【大】と探知のスキルがある。

ちなみに、自動マーキングにしないのは、素材が足りないからだ。

・・・今度雪山にでも行って狩ってくるか・・・

さて、俺がティガレックスを狩る様にと言われて、俺はただ熱いだけの砂漠を無謀にも走り抜けている。

勿論、クーラードリンクは飲んだぞ！

無味無臭だけど、なんだろう・・・こののどを通った時の冷たい温度・・・

まあいいや。

さて、俺は今、ティガレックスの縄張りだと思われるエリアに居るのだが・・・
まったく言っていないほど気配が無い・・・
どういうことだ・・・？

『ギャアアアアアアアアアアアオ!!!!!!!!!!!!!!』

すると、遠くの方からとても大きな叫び声にも聞こえる鳴き声が聞こえた・・・
ティガレックスの物だろう・・・
だけど・・・なぜ？

俺は岩陰から、そっとティガレックスが居る場所を覗き込んだ・・・
すると、ティガレックスは数匹のガレオスの群れと対峙していた・・・
周りには、鳴き声を聞き、鼓膜が破られ、息絶えたガレオス達が居る・・・
すると、ガレオスが一齐に砂ブレスを放った。
だが、ティガレックスはそれを避け、一匹のガレオスに噛み付き、食いちぎろうとしたが、周りのガレオスも一齐にティガレックスに噛み付き、身動きを封じた

「くっ……」

出来れば……本当は逃げてしまいたい……
だけれど、ゼロは緊張する自分をとても恥ずかしいとは思っていないな
かった……
強化された相棒「サンダーペイン」を掴み
そして、ゼロは静かに言った

「不吉を……届けにきたぜえ!!!!!!」

『グロオオオオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

この時、ゼロとティガレックスの戦いが始まった……

「……ろ……」

(ん……?だれ……だ……?)

「ぜ……ろ……ぜろ……」

（ゼロ……？ああ、俺の名か……）

ゆさゆさと肩を揺らされ、ゼロはゆっくりと意識を覚醒させた

「ゼロ……おはよう。」

そこに居たのはリリア……

どうやら、ここはアビス号のゼロの部屋らしい。

自分は……ええっと……ババコンガ亜種を狩って……
晩飯作って……それで、眠くなって……

「大丈夫か？船酔いでもしたのか？」

「……大丈夫だ。何も心配はない。」

「そう……か。」

すると、リリアが俺の横に座ってきた。

やはり、女性独特の甘い匂いがする……

「何の……夢を見てたんだ？」

「……修行時代のな。リオンさんと出会う前の夢を見ていた……」

「そう……か。なら、教えてくれないか？お前の過去を……」

「……つまらない話だぞ？」

「こうして、彼の知らねざる過去が明らかになっていく……」

閑話 ゼロ・ダークネスの受難（後書き）

「さて、質問があります。」

ゼロ「・・・どうした？」

「えっとですね。このまま閑話を続けるのか、それとも、絶影をすめるのか決めてなくて・・・」

リリア「・・・つまり、読者が全てを握っているのだな・・・」

ゼロ「・・・俺はどっちでもいい。好きにコメントしていってくれ。」

第十四話 絶影（前書き）

簡単なあらすじ・・・

ゼロ「さて、今日の献立は・・・」

・・・もういいや。

絶龍人物語！！！！始まりますZE！！！！

第十四話 絶影

これはゼロ達がババコンガ亜種等を討伐し、ハーツ村で一時の休息をとっている時だった

「ゼロくん。ドンドルマからの緊急依頼だよ」

酒場にいつものどおりの雰囲気が入ってくる村長・・・

ゼロはゆっくりと立ち上がり、村長の持っている依頼書を見た

指定されている場所は・・・

「じ、こじは！！？」

ゼロは依頼書を見た瞬間、突然叫び、酒場を飛び出していった

リリア達はゼロの後を追おうと思ったが、村長がリリア達に別の依頼書を渡した

「君達はこれ。ドンドルマからのハンターランクを上げる為のクエスト。」

「で、でもゼロは・・・」

「彼は大丈夫。知っているだろう？彼の腕前。大丈夫だって。心配ないさ。」

村長がリリアを撫でながら言った

リリアは少し複雑な気分で村長の手を払った。

クエストの内容は・・・

「ナルガクルガ・・・」

書かれた依頼書にはナルガクルガを狩って欲しいと書かれていた。場所はレイン樹海・・・この前、ヒプノックを狩った場所だ。

「よかつたじゃん、リリア。大好きなナルガ装備が揃つかもよ？」

「そう・・・かもね。」

リリアが静かに頷いた

リリアの父、リオンはナルガ装備で戦場を駆け抜けたというのが有名なのである。

そして、リオンの相棒のラグナスはレックス装備で駆け抜けたのが有名である。

ラグナスとリオンの弟子であるゼロは二人の活躍を見ており、それに尊敬し、今では誇れるほどの腕前を持っている。

(・・・ん？待てよ・・・父上がナルガ装備・・・そして、英雄ラグナスがレックス装備・・・)

すると、リリアが考え出した。

何を考え出したかという・・・

(ゼロはレックス装備だ・・・そして、私はまだ上位の頃のナルガ装備だが・・・最高の相棒パートナーになれるんじゃないか！？私と・・・ゼロ

口なら・・・)

リリアは未来で活躍する、自分とゼロの姿を思い浮かべる・・・
そこには、互いを信用しながら、狩りを続けるゼロとリリア・・・
最後のランポスを狩り、互いに向き合い笑いあった・・・

(あ、あれ！？ゼロの笑顔が思いつかないぞ・・・?)

そう、まだゼロはリリア達に笑ったことがないのだ。
少し残念に思いながらも、リリアに新たなる目標が出来た。

(ゼロの笑顔・・・見よう。)

素直で、簡単な考えだが、彼女のこの考えがゼロに届くかはまだ分からないのである。

すると、ゼロがこちらへと戻ってきた

「そのクエスト受けるんだろ？俺は参加できないが、頑張ってきて来いよ。」

「え？どうしてゼロこれねえの？」

エアロが静かに言うと、ゼロは少し俯き言った

「・・・俺には・・・俺のやることがある・・・」

そっぴい、静かに後ろを向いた

その背中には数え切れないほどの死線を潜り抜けた英雄というのに
ふさわしいなにかがあった。

だが、それは英雄の様に輝くのではなく、ただ、黒い塊のように、
ゼロの背中にある……

「……分かった。それじゃ、今回は私達だけでいこう。」

リリアが何かを察したようにゼロに言った

すると、ゼロはそのまま去っていき、去り際に言った

「早く準備しろ。レーン樹海に向けて出発だ。」

ゼロは去っていき、三人は顔を見合わせ、自分の家に向かった
来たるべき戦いへ向けて……

「マサムネ。」

「……ここに。」

ゼロは自分の家に戻り、マサムネを呼んだ。

マサムネは静かにゼロの横に立ち、兜を被る

そして、手に持ったニンジャソードはマサムネ専用の特注品である。

「アルファ、私と主は少しだけ帰ってくるのが遅くなる。しっかりと
とアビス号を守っておくれ。」

「分かったニヤ。．．．決着ですかニヤ？」

「．．．ああ。俺とアイツとの因縁の決着さ。」

ゼロは静かに言った

ゼロの手にある依頼書は．．．

『シュレイド城に悪魔が現れた．．．

絶龍人よ。

因縁に決着をつけてきなさい。』

長老からの手紙は、こうかかれており、ゼロは長老に大きく感謝した。

そして、改めて自分がやるべき事を思い出す．．．

「．．．師匠。リオンさん．．．いつてきます。」

右手に彼等の誇りとハンターとしてのプライドを込め、ゆっくりと歩き出した

「頑張れ・・・ゼロ君。」

村長がぼそつと呟いたが、その声は儚く消えた・・・

『ガアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!』

シュレイド城の城壁を破壊しながら進んでいく悪魔・・・

その姿は怒りに満ちており、憎きあの少年を待っているかのように見える・・・

火球は城壁を破壊し、すべてを燃やす・・・

そして、強靱な鱗はどんな攻撃をも弾く・・・

昔の人はその姿を見てこう名づけた

「ミラボレアス」と・・・

第十四話 絶影（後書き）

次回予告・・・

ゼロ「・・・それもいい。」

・・・はい。

ゼロ「次回。絶龍人物語「悪魔」・・・俺の戦いはまだ続くぞ。」

・・・寝よ。

第十五話 悪魔（前書き）

簡単な・・・

ゼロ「絶龍人物語、始まるぞ。」

・・・今日だけ泣いてもいいですか？

明日もちゃんと生きていきますから・・・

ゼロ「有名な曲をパクるな。切るぞ。」

・・・すいません。

第十五話 悪魔

リリア達を樹海へ下ろし、ゼロは決戦の舞台へと向かっていた……

・ シュレイド城にもっとも近い森……

バイド密林だ……

バイド密林の近くにはモンスターは生息しない……

そこには豊かな果実、そして、栄養豊富な魚……

だが、この先にはシュレイド城と、シュレイド城下町があるのだ……

・ シュレイド城下町には壊れた壁、何か^{えぐ}に抉られた爪痕……

ゼロが見つめる先には、漆黒の鎧の様な鱗を身に纏い、その眼光に映った者に絶望を与える瞳……

奴だ……

船を止め、静かにバイド密林を歩いていく……

ゼロの知っている限りの情報では、悪魔は半年に一度、この場所から何かを待ち続けるように見るといふものだった

シュレイド城の焦げた古文を読み上げると、ミラボレアスは一度会った人間の顔は殺すまで忘れないそうだ……

そして、バイド密林の奥から光が差し込み……

密林を出た……

「ゼロ、大丈夫かな？」

エアロがルーン樹海を歩きながら言った

手にはナルガクルガの素材が握られている・・・

どうやら、ナルガクルガを狩れた様だ

だが、彼女達はいつも居た頼もしいリーダーを思い浮かべる・・・

今は一体どこで何をしているのだろうか・・・

「ゼロなら大丈夫さ。さて、とつとと帰ろう。私の装備がボロボロだ・・・」

リリアの装備はナルガクルガとの戦闘でボロボロになり、胸元が大きく露出されていた

どうやら、ナルガクルガの翼の攻撃を掠って切れたらしい

だが、彼女の美しい肌は傷ついておらず、リリアの美しい体は健在だった

「……………」

リリアの胸元を見ながら自分の胸に手を当てるフィリア……
なぜこんなに不平等なのだろう……

そりゃ……自分だって大きいほうだけど、二人のは以上に大きい
し……

等と考えながらも、樹海を歩いていく……

バイド密林では、かつて無いほどの死闘が繰り広げられている

絶龍人の全力全開……

それとまったく引けをとらない悪魔の圧倒的力

「ニヤアアアアア!!!!!!」

マサムネも全力でゼロのサポートをし、ミラボレアスの胴体を切った
しかし、鱗が堅く、後ろに弾き飛ばされた

「ニヤ、ニヤなんて奴だ……」

ゼロはいつもの様に無言で戦っていない……

どうやら、ゼロは本気を出すと普通のハンターのように叫びながら戦
うようだ

「うおおおおおおおッ！！！！！」

『キシヤアアアアアアアア！！！！！！！！！！』

双剣でミラボレアスの顔面を切り裂こうと高く飛ぶが、尻尾がゼロを捉え、ゼロは向きを変え、顔面ではなく、こちらへ向かってくる尻尾へと狙いを定めた

尻尾と双剣が激しくぶつかり合い、そして真つ黒な稲妻が尻尾を包み込む・・・

しかし、威力が段違いなので、ゼロは後方へと吹き飛ばされた
ゼロの向かう先には、大きな木がずんと佇んでおり、ゼロは吸い込まれるように木に衝突した

「ぐはぁッ・・・」

口から血を吐き出し、ゼロはこちらへと向かってくるミラボレアスを見た

このまま・・・終わるのだろうか・・・
師匠の仇もとれずに・・・

刹那、バイド密林に悲鳴が木霊した

第十五話 悪魔（後書き）

倒れてしまったゼロ！

ゼロのピンチを知らないリリア達！！！！

ゼロの運命やいかに！？

次回！絶龍人物語！！！！

「敗北」

ゼロ「次回の運命を見逃すな。（カンペ見ながら）」

だろう・・・？孤独は・・・痛かったよな・・・』

『ニン・・・ゲン・・・？』

ゼロは静かに涙を流し、マサムネを抱きしめている
マサムネの心に・・・怒りと言う感情が消え・・・
マサムネは一生この主と共に生きると決めた・・・

これが、ゼロとマサムネの出会い・・・

あれから、色々あった・・・

マサムネが落ち込んだりした時はゼロが慰め・・・
ゼロが暗闇に沈んだ時も、マサムネが助け・・・
お互いを信頼できるパートナーとして認め合った・・・
そんな大切な物が、自分を守るために戦っている・・・
しかし、ゼロの身体は動いてくれない・・・
ゼロは静かに願った

（マサムネ・・・死ぬんじゃないぞ・・・！！）

「・・・主。」

・
ミラボレアスと対峙しながらも、思い出すのは自分の大切な相棒・・・
ミラボレアスが口に炎を凝縮し、火炎弾を放とうとしていた

第十六話 敗北（後書き）

「次回予告！」

エアロ「ゼロが負けてしまう程の強敵がどこかへと向かってしまっ
た」

リリア「そして、ゼロの運命は・・・？」

エアロ&リリア「次回「託された思い」」

報告

よっ！

俺は。

ゼロ・ダークネスの修行時代の名前さッ！！

最近更新できてないこの小説も、とうとう復活の兆しが見えてきそうだぜ！

作者の試験も無事終わり、後は合格するかどうかなんだってさ。

さて、次回予告だけど、次回のお話は相変わらず閑話の“ゼロ・ダークネスの修行時代”だ。

俺の修行時代が描かれた話だったさ。

ティガレックスの話かもしれないし、別の話かもしれないってさ。

ちなみに、作者は双剣が出ないって理由で3（トライ）は買ってねえぜ。

そんじゃ、現状報告は以上！！！！

おまけを言っと、作者の感想の欄に最近誰も書いてくれないから寂しくて更新できなかつたそうだ。

まったく、変な作者だよな？

第十七話 託された思い

(俺……何をしているんだ……?)

ゼロは、目の前の映像をただ見ていた……

街に現れた古龍……

街の人を護ろうと必死に戦ったハンター達……

十文字のリーダーとして、街へと侵入した古龍を次々に殺していったゼロ……

そんな中……逃げ遅れた子供が居た……

だが、クシャルダオラが死ぬ間に放った風ブレスが彼女へと向かって……

ゼロは彼女を護ろうと、全速力で走り、彼女を助けた……

抱き上げた少女はゼロをまるで化け物を見るような目でこう言った……

『じ、こないで……化け物……!!!』

……目を覚ませば、そこは見知らぬ天井だった……

「あ、気がついたか？」

ゆっくりと起き上がると、十文字時代の頼れる仲間が岩に腰掛けて

いた・・・

装備はガルルガX一式・・・

そして、桜色の髪の毛がとても綺麗で、サファイアのような瞳がとても美しい女性だった

「・・・レンカ・クルトウフ・・・久しぶりだな」

彼女の名前はレンカ・クルトウフ

ギルドチーム“十文字”に置いて、太刀を使い、ゼロと共に前線で戦っていた頼れる仲間である

「絶龍人ともあろう御方が、黒龍に負けちまうとはねえ・・・まったく、命がなければ、復讐もできないぞ？」

「・・・うるさい。・・・！？そうだ！マサムネは！？うつ！！」

ここには居ない相棒の名前を呼んだ・・・
しかし、マサムネは居ない・・・

「まだ動くな！傷はまだ完治していないのだぞ！？・・・それに、残念だが現場に向かった調査スタッフが真っ黒になったマサムネの兜を発見したそうだ。それに、辺りには黒龍の焦げた鱗が確認された・・・恐らく、死ぬ覚悟で突貫したのだろう・・・」

「・・・そんな・・・」

ゼロは真実を受け入れられなかった・・・

マサムネと共に初めてリオレウス亜種を倒しに行こうとし、マサムネが無茶ばかりをして

何回も回復のため地面に埋まった事か・・・
雪山に現れたドスファンゴを狩り終え、村に帰る最中にドドブラン
ゴに見つかり戦闘になったのも覚えている・・・

俯くゼロに、レンカはイラついたのか、近づき、頬にビンタをした
パアんと、辺りに響き渡った音と、痛みがゼロを襲った

「何を言ってるのだ！お前がそんなに落ち込んでいてどうする！マ
サムネはお前を守るために命を懸けたのではないのか！？それなの
に、お前がそんなに落ち込んでいて、死んだマサムネはどうなる！
？」

「・・・・・・・・・・」

ゼロは言い返すことが出来なかった・・・
大切な相棒の死・・・

それは、師匠であるラグナスを失った時と同じ痛みだった・・・
大切な者達が消えるのは・・・どうしてこんなにも辛いのだろう・・・

「お前がしつかりしないで・・・ハーツ村の人達はどうなるのだ！
？お前が誰で、一体なんの為にハンターになったのか・・・言っ
てみる！！この馬鹿者がツ！！！」

「俺は・・・ゼロ・ダークネス・・・人を・・・力の無い人が笑顔
で暮らせるようにするためにハンターになった！」

ゼロが・・・数年ぶりに怒鳴った・・・

自分の感情を剥き出しにし、仲間であるレンカと喧嘩をしている・・・

「では、何故お前は心を閉ざした!?なぜ、十文字のリーダーの座を蹴った!?お前が居なくなったせいで・・・どれだけの人が悲しんだと思っっている!!!」

「守りたいと思った者に拒まれたんだよ!!!そんな俺が・・・十文字のリーダーであってはいけないんだ!!!」

「馬鹿者ツ!!では・・・なぜ・・・なぜ仲間である私達に相談しなかった!?なぜ、辛いと言わなかった!?孤独の中で生きていく悲しみを・・・お前が誰よりも知っているではないかツ!!!」

「街の復興を手伝っていたお前達を・・・人を守ろうとしているお前等の邪魔をしたくなかったんだ!俺は・・・もう・・・独りなんだって・・・その時に初めて知ったんだ・・・お前の・・・あの気持ちがあつたたまるかツ!!!」

ゼロがとうとう本気で怒った・・・
だが、レンカもまったく引こうとはしなかった・・・
しかし、レンカの目には涙が溜まっていた

「じゃあ・・・どうして・・・どうして私に相談してくれなかった・・・お前が失踪したと聞いて・・・ずっと・・・ずっと探していたのに・・・ハーツ村に行って・・・会いに行こうにも、ハンターとしての仕事で忙しい日々・・・ようやくの休暇で会いに行っても・・・お前は居ない・・・私が・・・どれだけお前のことを好きだったか分かるのか!？」

そう・・・

実は、レンカはゼロの事が好きなのだ・・・

十文字時代からずっと一緒に過ごしてきた仲間・・・
そして、心に決めた意中の人物・・・それがゼロだ・・・

「レンカ・・・お前・・・」

「お前は・・・まったく変わっていない・・・一人で抱え込もうとする所も・・・誰よりも人を愛し、護ろうとしていることも・・・」

レンカは涙を流しながらゼロに抱きついた・・・
女性独特の匂いがゼロを包んだ・・・

「なのに・・・お前は・・・どうして・・・私やレイヴン・・・ソフィアを信じてくれないのだ・・・？」

十文字に所属しているかつての仲間の名を呼ぶレンカ・・・
遊撃型のレイヴン、バックで補助を行うソフィア・・・
前線に出て戦うレンカ・・・

そして、誰よりも強いリーダー・・・ゼロ。

十文字は、この四人を中心として出来た最強チームである。
今では、数百人を超える大部隊になっている・・・
ゼロは、最強と謳われる初代団長なのだ・・・
しかし、今では十文字のリーダーを放棄しているが、彼の帰りを待ち望んでいる者が多い・・・

「今からでも遅くない・・・ゼロ・・・十文字に・・・戻ってきてくれないか・・・？」

レンカからの勧誘・・・

かつての仲間からの頼み・・・
そして、一人の女性としての願いであった・・・

「すまない・・・俺は・・・もう十文字には戻れない・・・」

しかし、ゼロはそれを受け取ることはできなかった

「何故だ！？お前ほどの実力者が、一つの村に居るなど・・・」

「あの村は・・・何も無かった俺に居場所と、人の温かさを教えてくれたんだ・・・十文字に戻れば・・・ハーツ村を支援することもできる・・・だが、俺はあの村がいいんだ・・・暖かくて、賑やかで・・・活気に溢れるあの村がな・・・」

「そう・・・か・・・すまない。変なことを言ってしまった・・・」

「・・・それよりも、レンカ・・・離れてくれないか・・・？」

気付けば、ずっと抱きついたままだった。

いくら防具を装備しているとはいえ、怪我人のゼロにとって、それは色々とダメージが大きかった

「・・・馬鹿者・・・いくじなし・・・ヘタレ・・・」

離れたレンカから冷たい目線を送られ、ゼロのことを酷く言っている・・・

しかし、ゼロはため息をつき言った

「・・・確かに、俺は馬鹿者かもしれないな・・・お前を・・・泣かせてしまったからな・・・」

そういうと、ゼロは、少しだけ流れているレンカの涙をそっと拭いた
そして、自分の答えを言った

「・・・俺は・・・お前の気持ちに答えることができない・・・中途半端な気持ちで・・・お前と付き合いたくない・・・だが、お前の気持ち・・・とても嬉しい・・・ありがとう。」

そういい、ゼロはこの日、初めて笑った・・・
その顔を見た瞬間、レンカは石の如く固まった・・・

「ぜ、ゼロ・・・？お前・・・いつから笑えるように・・・？」

「・・・さあな。もう二度と笑えないと思っていたが・・・これも、あいつ等のおかげかもな・・・」

ゼロの答えを聞いた瞬間、レンカはゼロを奪われる危険性を感じた

(ま、まさか・・・ゼロ・・・お前・・・別の者と一緒に居るのか・・・？た、確かドンドルマで有名だった女ハンター達がとある村に所属したと言うのは・・・本当なのか・・・？まずい・・・ぜ、ゼロが奪われる！？)

「・・・レンカ、どうした？なんか・・・顔が怖いぞ・・・？」

ゼロがそういつた瞬間

レンカがゼロを押し倒した・・・

第十八話 ポスク村

ポスク村・・・

そこは、ハーツ村とは違い、山の下にある大きな村だ。

ここには、十文字の厳しい修行をする、訓練所がある。

その訓練所を卒業する、卒業試験は、ポスク山へ単独で狩りに行き、指定された物を納品すればいい

という簡単な物であるが、ポスク山にはブランゴ等が生息していて、時々ドブランゴなどと遭遇する時があるのだ。

しかし、冷静な判断力や、ハンターとしての能力を開花させるには打って付けの場所なのだ。

ごく稀だが、クシャルダオラを見たと言う報告や、ティガレックスがポポを狩りにここへ来る時があるのだ。

しかし、訓練所を指揮しているのは、レイヴンが直々に訓練した優秀なハンターが長官をやっているので、なんとかなっている。

しかし、前の長官は、卒業試験中に現れたティガレックスの罠をしたらしい

幸い、命は助かったものの、複雑骨折などをしたらしい

だが、ティガレックスは彼の捨て身の大タル爆弾Gにより、死亡が確認されている

そのポスク村にゼロは居た・・・

どうやら、ポスク川にまで流されていたようだ。

「・・・なあ、レイヴン？」

「ん？なんだい？ゼロ？」

ゼロが久々に見るポスク村を眺めながら言った
最後にこの村に来たのはいつだったか・・・

そっぴいえば、訓練所はどうなっているだろう？
自分が最初の頃使っていた双剣は、まだ刺さっているだろうか？
そんなことを考えながらも、レイヴンに聞いた

「・・・この街の復興・・・終わったようだな」

「・・・まあな。キミが居なくなつた後、この村は十文字が全力で
復興したからね・・・」

二人でこうやって歩いたのは何年ぶりだろう・・・
二人を見たハンター達がこそそと喋っている・・・

「なあ、レイヴン団長の隣のアイツって・・・誰だ？」

「ばっ！？お前知らないのか！？最強の初代団長だぞ！？レイヴン
団長でも敵わないと言われている、あの最強の絶龍人の、ゼロ・ダ
ークネスだぞ！？」

「あ、あれが最強の絶龍人！？まだあんなに若いのかよ！？」

ざわざわと騒ぐハンター達・・・

レイヴンとゼロは十文字を結成する前からの親友だった。

ハーツ村からドンドルマに戻った時、ドンドルマの依頼で、ポスク

村まで来たのだ

その時に、現地の駆け出しハンターのレイヴンと出会ったのだ。最初の頃は、喧嘩ばかりしていたが、とあることがきっかけで仲良くなったのだ

ゼロは、高く聳え立つポスク山を見つめた

「・・・懐かしいのか？あの、山が」

「・・・ああ。とても懐かしい。」

レイヴンも立ち止まり、ポスク山を見た

そういえば・・・あの山ではレイヴンと色々やっていたな・・・

ゼロが、ポスク村に任務で滞在している間、レイヴンと一緒に狩りをしていたのだ。

ポスク山にブランゴが現れたという情報が入ったので、二人で狩りに行くことに・・・
だが、彼等が現地に着いた時には、ブランゴは一匹たりとも現れなかった

「なんだよ、ブランゴはおろか、ポポすら居ねえじゃん。あゝあ。
時間かけてまで来た意味ねえじゃん。」

レイヴンが嫌そうな声で言った
当時、ゼロの強さに嫉妬していたレイヴンは、ゼロをライバル視していたのだ

『うるさいぞ。ポポが居ない・・・そして、ギアノスも巢から一歩も出ない・・・これが意味することは、この山に、強大な何かがあるということだ。』

『ハッ！！そんなに居るかよ！！とつとと帰るぞ！！お前なんかと狩りしてたら、こつちがくたびれるだけだぜッ！！！！』

そういい、レイヴンは持っていたデスパライズを腰に戻し、歩き出した

ゼロは警戒を解かず、双雷剣キリンをまだ握っていた・・・
ゼロは・・・何か、嫌な予感がしたからだ

次の瞬間、レイヴンの世界が暗くなった
突然、空から巨大な何かが落ちてきたのだ
緊急回避で、なんとか避けると、落ちたのは何か確認し、目を疑った

『グルルルルルルッ！！！！』

そこには、目を赤く染め上げた轟竜、ティガレックスが居た・・・
しかし、背中は何者かによって、食いちぎられ、血を流していた

『危ない!!!』

ゼロが怯えて動けないレイヴンに噛み付こうとしているティガレックスの注意をひこうと、尻尾を切った

レイヴンは、最近ゲリヨスを狩ったばかりの新米ハンター

ティガレックスとなれば、上級のハンターでも苦戦を強いられる相手だ

レイヴンを殺されまいと、ゼロは鬼神化し、尻尾に乱舞をお見舞いした

すると、ティガレックスはレイヴンではなく、ゼロをターゲットにした・・・

刹那、ゼロはティガレックスの突進を避け、尻尾を集中狙いした。

次の瞬間、尻尾は切れ、ティガレックスは悲鳴を上げた

そして、ゼロはティガレックスを斬り、止めを刺した

しかし、まだ終わりではなかった

ドシンッ!!!

次の瞬間だった・・・

ゼロの目線の先に、巨大な影が現れ、その場にもう一頭のティガレックスが現れたのだ・・・

翼や、背中の傷からして、上級のハンターが狩る筈のティガレックスだ

口元を確認すると、先ほどのティガレックスの鱗をボリボリと噛み砕いていた

『グルルルルッ・・・』

ゼロを睨んでいるティガレックス、こちらの様子を伺っているよう

だ・・・

だが、レイヴンは父親から譲り受けたデスパライズを取り、ティガレックスに向かっていた

『こんのおおおおおおおお！！！！』

ティガレックスは気配に気付き、レイヴンの方を向き

その場で雄叫びをあげる体勢をとった

『危ないッ！！！！』

ゼロが双雷剣キリンを戻し、レイヴンに向かい、走り出した

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！』

レイヴンの元に辿り着いた瞬間、ティガレックスの咆哮が木霊した・・・

それと同時に、二人は吹き飛ばされ、崖から落ちた・・・

あの後、ゼロがレイヴンを抱えるように倒れており、レイヴンが目を覚ました瞬間、ゼロは安心したように目を閉じた・・・

自分が考えなしに突っ込みさえしなければ・・・
そう考えると、ゼロへの謝罪の気持ち湧いてきた・・・

『ごめん・・・俺なんかの為に・・・！！！！』

その時、レイヴンは決意した
あのゼロが起き上がるまで、自分がゼロを守ると……

「……………」

ゼロとレイヴンはそんな事を考えていた

レイヴンは、あの後、二人で共にティガレックスを狩り、その時、初めてレイヴンは自分のしてきたことの謝罪をした……

そして、今では親友と呼べるような存在となっていた

「あの頃は……駆け出しだったから……色々と分からなかったんだと思う。……あの時は、ごめん。」

レイヴンが静かに言った

ゼロが気に食わない存在で、ずっと嫌悪をしていて、でも、そんな自分を見捨てず、命を賭けてまで守ってくれたゼロには色々と学んだのだ……

「……………いいんだ。」

そういい、ゼロはまた歩き出した……

小走りでゼロに駆け寄り、寄るレイヴン……

そして、レイヴンがゼロの頭に手を置き、髪の毛をくしゃくしゃにした

ゼロは少し笑いながらレイヴンを小突いた
彼等が向かっているのは、訓練所……

レイヴンがどうしても見せたい物があると言っているので、一緒に行くことにしたのだ

第十八話 ポスク村（後書き）

おまけ

レンカ「……………（じいーっ）」

二人が訓練所へと向かう道中、ずーっっとストーキングしているレンカであった……

レイヴン「僕と一緒に向かう訓練所」

ゼロ「何故、レイヴンに呼ばれたのかも分からない俺」

レイヴン「訓練所に居る、十文字の初期メンバーの最後の一人との遭遇」

ゼロ「そして、訓練所へと呼ばれた理由とは？」

レイヴン「次回「懐かしき場所」」

第十九話 懐かしき場所（前書き）

久々の更新ですが、6月まで更新が停止しそうです・・・

作者がめっちゃくちゃ忙しくなってしまったため、6月まで更新ができません。

更新を楽しみにしてくれている人が居てくれるというのはいいものですね・・・

それでは、どうぞ・・・

第十九話 懐かしき場所

ゼロがレイヴンに案内され、向かった場所は、幼き頃の自分がレイヴンに片手剣の極意などを教えた、懐かしい訓練場だった

「・・・あっ・・・」

大きく聳え立つ門に駆け寄り、静かに門の裏に手を回し、ある物を確認した

そこには、剣が突き刺さったようにえぐれている傷後があった

「懐かしいでしょ？」

レイヴンも近寄り、静かにそっと触れた

その傷は、レイヴンとゼロがつけたものだった

「・・・ああ。この門の前で、お前の卒業試験をやったのだったな」

数年前のことを思い出し、思い出し笑いをする

数年前、レイヴンが一人前と認められる卒業試験の内容を思い出した

教官からの指令はこうだった。

ゼロと共に、現れたゲリヨス二頭の討伐。

そして、その後に明かされた、真の卒業試験・・・

『ゼロと模擬戦をし、ゼロを認めさせることができたなら合格。』

というものだった。

「あの時、君は容赦なくやってきたからねえ・・・ボコボコにされた記憶しかないよ。」

「・・・だが、最後の一撃は、ちゃんと俺に届いたぞ?」

勿論、当時のレイヴンは片手剣で挑み、ゼロにボコボコにされたのだ。

だが、レイヴンの決死の覚悟の攻撃は、ゼロを追い詰め、この門と共に、ゼロを切ったのだ。

しかし、ゼロは直前で避けたが、頬を掠ってしまったのだ。

その時、レイヴンが振り下げた片手剣がここに当たったのだ。

その後、ゼロはレイヴンを認め、一人前となったレイヴンは、彼とともに十文字を作り上げた。

「なんだか・・・君が居た頃の十文字時代はとても輝いていたよ・・・」

「・・・なんだ、今は輝いていないと言うのか?」

ゼロが静かに言った。

当時のレイヴンの夢は、ドンドルマにも響き渡るような伝説のチームを作る!というものだった。

その夢は実現したが、それは親友である一人の少年を絶龍人と言う

存在に陥れてしまったのだ・・・

「・・・君が居なくなつた夢を叶えても、僕にはあまり充実した日々は過ごせなさそうだよ・・・」

「・・・悪いが、俺は戻らない。今のリーダーはお前だ。俺は、ただ偶然流されただけのハンターだ。」

ゼロは冷たく言い放つと訓練場のドアへと歩き出した

レイヴンは、とても悲しそうな顔をするゼロに心を痛めた・・・自分のせいで・・・こんなことに・・・

すると、訓練場のドアを開いた

「・・・だが、俺とお前の関係は変わらない。一応、親友だろ？」

そこまで言うと、ゼロは静かに訓練場に入って行った

レイヴンも少し照れたようにゼロの後を追った

まず、ゼロを待ち受けてくれたのは・・・

「・・・おいおい・・・嘘だろ？」

ゼロは嬉しそうに言った

訓練場の中の大広間、ここに、訓練生が集まり、集会を行う。

その大広間の中央に双剣が突き刺さっていた。

その双剣の周りにはロープがあり「触るな！」と書かれたボードがぶら下がっていて、その双剣の詳細が書かれた石碑を見た

『ゼロ・ダークネスの双剣。』

この剣は、初代十字団長のゼロ・ダークネスが愛用していた双剣である。

彼の戦う姿は美しく、強い

最強の初代団長が駆け出し時代か使っていた名刀である。
決して触ってはいけない。』

その下にはさらに長い文が続いているが、ゼロは照れるように笑った

「どうだい？君の相棒を見た気分は？」

「……なんて言えばいいのだろうか……少し感動している。」

「……ゼロも感動するのかわ？」

訓練場の入口から入ってきたレンカが静かに言った
すると、ゼロはふっと笑い、静かに言った

「……ああ、俺の相棒だ。師匠が居た頃からの……な。」

「……」

レンカも、何回かこの剣を使い、ティガレックスに立ち向かうゼロの姿を見たことがある。

しかし、どの鍛冶屋に行っても、“こんな剣見たことがない”と言
い、一体誰が作ったのだと、言う質問が絶えない……

ドンドルマの鍛冶屋も頭首も「こんな立派な剣、一体だれが・・・」
とまで言うほどだ。

一体、どこの誰が打った剣なのだろうと、レンカも気になっていたのだ。

「・・・この剣は、俺と師匠のオリジナルの剣だ。加工の仕方、俺と師匠しか知らない・・・」

黒い刀身が、ゼロが近づくほど美しく輝く・・・

・・・さすがに、ゼロの相棒の剣にまで嫉妬しては、もしもゼロと結婚していたら、やっていけないなと心で思うレンカであった・・・

「・・・？レンカ、顔が赤いぞ？」

「う、うるさい！！／＼／＼／＼」

レンカは、顔を赤らめ、ぷいっとそっぽを向いてしまった

ゼロも恥ずかしいのか、静かにレンカと視線が合わないようにする・・・

レイヴンは、二人の行動を見てニヤニヤしていた

（なるほど・・・とうとうクルトウフが告白したんだ・・・それは、ソフィーが黙ってないだろうなあ・・・口数の少ない娘だけど、ゼロのことになると周りが見えなくなるからなあ・・・）

レイヴンは、静かに十文字最後のメンバー、ソフィア・ラックスのことを思い浮かべた・・・
その直後だった・・・

「……ゼロ……?」

「……ソフィア・ラックス。久しぶりだ「ゼロっ!!!!」 ガ
アン!!! (ゼロが頭をぶつける音) ぐふうっ!?!」

噂をすればなんとやら。

ソフィアがゼロにタツクルにも似た抱きつきをしたのだ

ゼロはソフィアを受け止め、そのまま後ろの壁に頭をぶつけた

「ゼロっ! どうして来るって言わなかったの!? 言えば、すぐにでも迎えに行ったのに……」

ソフィアがゼロに抱きつきながら言った

すると、それを見て複雑な心境のレンカがソフィアを引っぺがそうとした

「ソフィア! いい加減にしろ! ゼロが嫌がっているであろう!!! /
//」

「……ゼロは優しいから絶対に嫌がらない。それに、ゼロは私の理解したらとっとと消えて爆乳女。」

「いつゼロがお前の物になった! い・い・か・ら! とっとと離れろ
オオオオ!!!!」

ゼロの怪我はまだ完治していないのにも関わらず、二人はゼロの上で口喧嘩をしている……

当の本人であるゼロは、ソフィアの好意にはまったく気づいておらず、過度なスキンシップと言うことで割り切っているらしい……

(ああ・・・この天井をこんな形で見るのは久しぶりだな・・・)

ゼロは、十文字時代の事を思い出した・・・

ソフィアのアタックはすべてスルーに終わり、偶然大広間に通りかかったゼロをソフィアが押し倒し、レンカがそれを必死に引きはがそうと奮闘していて、レイヴンが笑いながらそれを見ていた

懐かしいと言えば懐かしいが、どうしてソフィアはそんなにしてまで自分に過度なスキンシップをしてくるのだろうと、ゼロは心の中でそう思っていた・・・

「まあまあ、ソフィー。一旦離れてあげなよ。それと、耳寄りな情報が・・・」

レイヴンが介入し、ソフィアが渋々ゼロから離れ、レイヴンと一緒に大広間の端の方へ行ってくれた

レンカがゼロを介抱しようと、静かに手を伸ばした

「あつ・・・」

ゼロとレンカの声が重なった・・・

偶然、ゼロとレンカの手が触れたのだ・・・

ばつと二人は後退し、なんとも言い難い初々しいカップルのムードへと突入していた

『・・・それ本当？レンカがゼロの告白したって・・・？』

『ああ・・・あの二人の雰囲気見てみなよ・・・いかにもカップル
『・・・レイヴン、それ以上言ったら殺すよ・・・？』・・・やだ
なあ、冗談だつてば。だつて、どこからどうみても・・・『レイヴ
ン・・・生きて・・・いたい？』すいません。調子に乗りました。
だからその弓を下げてくださいお願いします。』

端の方でひそひそと会話が聞こえてきたが、ゼロ達の耳にはまったく届かないようだ・・・

「あ、あの・・・ゼロ・・・／／／」

「な、何だ・・・レンカ・・・」

レンカが少しもじもじしながら言った

「そのつ・・・もしも、だぞ？・・・私がお前と結婚したとして・・・
／／／／／」

「・・・つ！！！！」

シユカカカカッ！！！！

何故か投げナイフがレンカの方へ放たれた

レンカは後退し、太刀を抜刀し、ナイフをすべて叩き落とした
投げナイフを投げたのはソフィアだった・・・

「ソフィア！何をする！！／／／」

まだ顔の赤いレンカに向かい、殺気を放つソフィア・・・
すると、ソフィアはゼロの方に向かい歩き出した

「・・・ソフィー、投げナイフなんてどこから取り出した？」

「・・・ゼロ、もう我慢できない・・・私、ゼロが好き」

すると、投げナイフの次が大タル爆弾Gにも匹敵する爆弾発言だった
ゼロは驚き、レンカに至っては、静かに驚きのあまり、言葉を失っ
ていた

「なっ・・・!？」

「正直に言えば・・・結婚を前提に付き合っしてほしい。」

「・・・ハッ!?そ、ソフィア!!一体何を言ってる!!/!/ /
すると、レンカがソフィアの横に立ち、敵意を露わにしていた
その顔はわずかに赤い・・・

「うるさいデカ乳娘。私とゼロは運命の赤い糸で繋がってるの・・・
その無駄に大きな胸でゼロを惑わせないで。とっとと視界から消え
て。お望みなら、今この場で消し去ってあげる・・・」

「で、デカっ・・・か、勝手に運命の赤い糸などと言うな!!第一、
誰が、いつそんな運命を決めた!!少なくとも、お前のように平均
以下な胸より、私の胸の方がゼロは「ちょっとストロップ。」・・・
なんだレイヴン？」

まさに、一触即発・・・

そんな雰囲気を出している中、レイヴンが少し笑いながら前に出た

「仲間同士で争つても意味なんてないでしょ？第一、ゼロが貧乳好きか、巨乳好きかどうかは」「静かにしないと消すよ？」「すみませんでした。僕が悪かったです。だから、その手に持った武器を下ろしてください！！！」

レイヴンが、二人の殺気に怯えながら後退した・・・

数多の死線を潜り抜けたハンターであるレンカとソフィアの放つ殺気がめちやくちや怖かった・・・

ゼロはなぜこうなってしまったのか、心の中で考えていた

（な、なぜ俺なんかに好意を寄せてくるんだ・・・？俺は二人に何かしたわけでもないが・・・考える・・・何かがあったはずだ・・・
・・・駄目だ。まったくわからん・・・）

ゼロはひたすらそう考えていた

すると、ソフィアが行動を起こした

「・・・えいつ」

むぎゅつとソフィアがゼロの左腕に抱きついた

「そ、ソフィア貴様！！・・・わ、わたしも！！／／／」

今度はレンカがゼロの右腕に抱きついた

「・・・真似しないでよ。ゼロは私だけの物・・・」

「う、うるさい！！私がゼロのどこに抱きつこうが私の自由だ！／／／」

鎧越しに伝わってくる二人の熱を感じながら、ゼロはまだ考えていた・・・

第十九話 懐かしき場所（後書き）

ゼロ「ポスク村に久々に来てみれば、ソフィアとレンカからの突然の告白・・・俺はどうしたらいいんだ・・・」

ゼロ「次回「訓練場の日々 前篇」」

第二十話 訓練場の日々 前篇

ゼロ達は修羅場を繰り広げながらも、訓練場を進んで行った

途中、ソフィアがゼロを押し倒したり、服を脱がそうとしたりしたのだが、レンカと修羅場を繰り広げながらも訓練場を歩いていた

やはり、昔から変わらず、広く、とても大きい決戦場ステージが目の前に広がっていた……

「……………」

右手にはレンカが、顔を赤くしながら抱きついていて、左手にはレンカを睨みつけているソフィアが居て、レイヴンは書類仕事が残っていると言って訓練場の執務室の方へ行ってしまった

執務室に行く途中「死ぬなよ」と一言言って、その場から去ってしまった

「……ゼロ、どうかしたの？」

心配そうに自分を見てくれるソフィア……すると、ゼロはそれに答えるように言った

「ああ……大丈夫だ。心配してくれて、ありがとう」

「っ!?!?」

久しぶりだ・・・

ゼロにお礼を言われるなんて、数年ぶりだ・・・

それに驚いたソフィアは静かに顔を伏せた

どうやら、恥ずかしいようだ・・・

やはり、彼女は可愛い・・・

見た目だけではなく、行動も可愛い・・・

見ていると照れたのか、ゼロもソフィアに目を合わせないようにレンカを見た

すると、レンカはジト目でゼロを睨んでいた

「ゼロ!!」

突然レンカがゼロから離れて言った

背中には、彼女の愛刀「氷刃【雪花】」を手に取り、言った

「久しぶりに・・・勝負だ・・・」

「・・・いいだろう」

ゼロも静かに頷いた

すると、ソフィアは静かにその場から離れ、見学をすることにした
ようだ

ゼロは、静かに背中に収めてある双剣を掴んだ・・・

ミラボレアスに挑んだ時の双剣“封龍剣【真絶一門】”ではなく、

ゼロが修業時代から使っている愛刀・・・

装備は着けていても、武器を持っていなかったゼロは「いい加減返してもらおう」とだけ言い、触るなと書かれたロープを乗り越え、この

双剣を抜き取ったのだ

久しぶりに触った相棒の感触は、とても懐かしかった・・・
静かにレンカと対峙する・・・

彼女は本気だ・・・

先ほどまでとは違い、纏っている気が違う・・・
今まさに、レンカとゼロの戦いの火ぶたが・・・

切って降ろされた

「はあああああッ！！！！」

太刀の長いリーチを武器に、ゼロに向かい剣を振り上げるレンカ
ゼロはそれを察知すると、横に跳び、回避

すると、今度はゼロがレンカに仕掛けた
双剣を構え、彼女に振りおろそうとした時だった
彼女は体勢を変えて、太刀で薙ぎ払ってきたのだ
それを右手の剣でガードし、左へ跳んだ

彼女も随分と強くなったものだ・・・

「まだだッ！！！！」

「っ!?!?」

左へと跳んだ時だった、レンカの太刀がこちらへ迫っていた
恐らく、自分に突きを放ったのだろう

それを双剣をクロスさせ、ガードした
だが、あまりの威力に後ろに後退してしまった

「今度は……こちらから行くぞっ!!」

ゼロは双剣を構え、レンカへと向かって行った

(……ゼロ、楽しそう)

二人の勝負を見学しているソフィアはじっとゼロを見つめていた
どうやら、レンカは眼中にないようだ

二人とも舞うように攻撃を繰り返し、攻撃を防ぎ、見切り、そして
また仕掛けている
何度もその繰り返しだった

しかし、ソフィアはただゼロのことだけ見つめていた

ソフィアは、元々商人の娘として生まれた
しかし、竜車に乗っている最中にモンスターに襲われ、両親は死亡

自分も危うく襲われそうになったのだが、目の前にモンスターを倒している同年代の少年が居たのだ

それは、ゼロだった

この時、ゼロは森丘にドスランポスが現れたという報告があったので、被害が出る前にドスランポスの討伐へと向かったのだ

しかし、それが原因で逃げだしたランポス達が竜車を見つけ、アップトロスに襲いかかったのだ

ゼロはクエストが終わったと思い、一息ついていた所に悲鳴が聞こえたので、ここへと辿り着いたのだ

しかし、最初のゼロの印象は最悪だった
もっと早くゼロが気づいていれば、両親は死なないですんだのかも
しれない

ゼロがドスランポスを討伐しなければこんなことにはならなかった
のかもしれない・・・

ソフィアは憎しみに囚われたままハンターへとなったのだ

しかし、訓練場に赴くと、そこにはゼロの姿があったのだ

当時の彼は教官（仮）として、訓練場を任されていたのである
本物の教官はドンドルマに出張にいつてしまい、代わりにゼロが教官をやっていたのだ

訓練場で会った時のゼロはまだ普通に話が出来て、レイヴンとも良
く一緒に居た・・・

ソフィアはゼロから強さの秘訣を盗もうと、彼を尾行したりしていた

しかし、彼は表立ったことは何一つしていない・・・

“表立った”事は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思い出すのは、就寝時刻だと言うのに外へと歩き出すゼロの姿を見つけた時だった

こっそり尾行すると、彼は訓練場の裏で木を殴ったり、剣の乱舞や、大剣の素振りなどをしていた

途中、ゼロにばれて、休憩しているゼロのとなりに座った
そして、ソフィアは尋ねた

「・・・・・・・・どうして、そんなに頑張るの？アナタ、元から強いじゃない」

「・・・・俺は、決して強くない。俺には・・・・師匠が居たんだ。でも、その師匠は死んじゃってさ・・・・墓場はちゃんと見つけれただ。でも、その村、いつ買収されるか分からない村なんだ・・・・小さな村でさ。でも、皆明るいんだ・・・・こんな俺でも、快く迎え入れてくれた大切な人たちなんだ・・・・」

ゼロは静かに語ってくれた・・・・
自分がハンターになった理由、師匠との思い出・・・・
そんな話を聞きながら、ソフィアは静かに思った・・・・

(・・・・何よ、いつもニコニコ笑ってるかと思ったら、こんな過去が・・・・ほんと、バカみたい・・・・ホント・・・・馬鹿みたい・・・・)

話を聞いて行くうちに、涙が出ていた

どうしてだろう・・・彼のことを知って嬉しい気持ちと、彼の悲しみに触れて悲しい気持ちが押し寄せてきた・・・
涙を流しているソフィアに、暖かい温もりが伝わってきた
そう、ゼロが抱きしめてくれている・・・

『・・・なんで泣いてるか分からないけど、泣きたい時には・・・泣けばいいさ。俺も、付き合っよ』

『・・・うん・・・あり・・・がと・・・ううっ・・・』

月夜が二人を静かに見守ってくれていた・・・
この日、初めてソフィアはゼロに好意を抱いた・・・

「・・・ゼロ・・・」

静かに彼の名前を呼ぶ

目の前で、ゼロがレンカと戦っている・・・

レンカの方が息切れし始めているので、そろそろ勝負がつきそうだ・・・

ちらつとレンカを見た

桜色の髪が動く度に揺れて、まるで花のように美しく揺れている

そして、女性のシンボルとも言える胸は、これでもかと言うくらい大きく膨らんでいる

(・・・)

レンカと巨と例えるなら、自分は中の小の部類に分類される・・・
なんで世の中こんなに不公平なんだろう・・・

レンカも、訓練場時代からの同僚。
いわば、腐れ縁と言う奴である。

しかし、自分は寝る前にバストアップの運動を毎日欠かさずしている……

だが、この差はなんだろう？

一緒に食べる料理も大体一緒に、なんでこんなにも差があるのだろうか？

(……レンカの馬鹿……)

心の中で親友に悪口を言っておく、いくら腐れ縁の親友でも、これだけは許せない

「ッ!!」

「……勝負ありだ」

ゼロの剣がレンカの太刀を吹き飛ばして、太刀は宙を舞い、訓練場に突き刺さった

そして、ゼロの剣はレンカの目の前で寸止めされていた
完全にレンカの負けであった……

……レンカを見ていたら、自分までゼロと戦いたくなくなってしまった
まったく、あまり戦闘は好きではない……
モンスター相手になら容赦なくできるのだが、相手がゼロなので、
少々やり辛い……

「……ゼロ。」

「ん？なんだ、ソフィー……まさか、お前もか？」

コクつと一度頷き、ソフィアはゼロと対峙した
レンカは太刀を引き抜き、その場から離れ、ソフィアが座っていた
場所へと腰を下ろした

「……ゼロ、勝負。」

「……いいぞ。受けて立とう」

ソフィアは静かにレンカを見つめながら言った
息切れしていて、力なくその場に座っているレンカはとても綺麗だ
った

「……絶対に負けないから（ぼそっ）」

レンカに向かいそう呟くと、ソフィアはゼロと勝負をした……

目の前で、ソフィアが舞を踊るようにゼロへと弓を放っている
特別ルールで矢尻は折ってあり「ゼロは5回被弾したら負け」と言
うルールの下二人は戦っていた
レンカは静かに二人の戦いを見ていた

（ソフィア……綺麗だな……）

レンカは舞うように弓矢を放つソフィアを見ながら思った
本当に、パツと見ただけならどこかの国の王女と見間違いそうな位
の顔立ち……

まるで人形のような瞳……
動く度に揺れる長髪は二つに結ばれている……

(それに比べて私は……)

性格は、少し男勝りと言われた事がある。

それは……別にかまわない

でも、この胸だけは正直好きになれなかった……

あるだけで肩は凝るし、重いし、狩りの時に凄く邪魔になる……
それに比べてソフィアは別だった

胸もそれなりにあるし、自分のように男勝りではない……

おまけに、性格も優しい……

自分と比べると、彼女の方がゼロと釣り合ってるのかもしれない……

(……ずるいぞ……ソフィア……)

心の中でそう呟き、ソフィアから目を逸らし、ゼロを見る
相変わらず、舞うように戦ってる……

(……ゼロ……)

静かにゼロを見つめる……

彼と初めて出会ったのは、訓練場だった……

臨時教官をしていたゼロに太刀の扱い方を教えて貰ったのは、未だに覚えている

ただ、初めてだというのに、振り方や、素振りを何回もさせられた記憶がある

それから、ゼロと反発するようになって、ゼロとよく喧嘩するようになってしまった

同僚には「夫婦喧嘩」だとか言われた事もあった

それを聞くだけで顔が赤くなる・・・

自分では明らかにゼロと不釣り合いだ・・・

(・・・ゼロの馬鹿・・・お前のせいだぞ・・・／／)

それ以来、ゼロへの思いが急激に増えだしたのだ・・・

だが、喧嘩は日に日に悪化・・・

酷い時は獲物まで取り出す始末・・・

目の前で繰り広げられている戦いを見ると、ソフィアの矢がもつすぐ切れそうだ・・・

恐らく、ゼロが放たれた矢を全て叩き落としたのだろう・・・

(・・・ソフィア・・・悪いが、負けられん・・・私だって・・・

ゼロが好きなんだ・・・／／)

そう考えた直後、ソフィアは負けを認め、少し息を乱したゼロがそこに立っていた

第二十一話 訓練所の日々 後篇

二人との模擬戦を終えた後、三人は食堂への道を歩いていた

訓練所から食堂への道は別名「空腹の道」ハラヘコロートと言われ

訓練を終えた新米ハンター達がダツシュで食堂へと向かうのだ

元の発端はレイヴンがゼロの厳しい訓練を耐え抜いた後、ゼロと競争で「どっちが速く食堂に着くか勝負」と言う青春真つ盛りな一言から始まった

これが引き金となり、当時のソフィアやレンカも一緒になって走り出し、その後から凄まじい量の生徒達が波になるかのように押し寄せてきたりしていた

中には怪我人が出るという事態もあつたが、教官が「弱肉強食の世界！生き残りたければ走れ！世界の果てまで！」と謎の迷言を残し、ゼロ達を追い抜きそうな勢いでダツシュ

それからと言う物、この訓練所には鉄の掟が出来てしまい

その一、走りたくない者は裏ルートランナーを使うべし、走者の邪魔をするべからず

その二、弱肉強食 疲れた者は歩け、食いたい者は走れ

等々……

今でもこの掟が生きてるとか……

ここの特別教官をしているソフィアとレンカの話聞いて少しため息混じりに呆れると同時に、昔の自分達の話が今にも残っていると云う事を聞き、嬉しい気持ち少しだけこみあげてきた

「まったく……あの頃は大変だったなあ……」

そっと立ち止まり、空腹の道ハラペコロードを眺めるレンカ

ゼロとソフィアも立ち止まり、ゆっくりと懐かしい道を見る……

記憶にも、この瞳にも覚えのある、この道……

レイヴンが狡賢い手を使って、後ろの走者ランナーを一網打尽にして教官に怒られたり

レンカが暴走して前に居た走者ランナーを薙ぎ倒しながら前に進んだり……明らかにゼロが先に走っていたはずなのに、横にソフィアが走っていたり……

その道をじつと見ると、あの頃の自分達が走っていて、楽しそうな声で何かを話していた

『今日の献立はなんだろう？』

『アイツセコイ道使ってるぞ！』

『ああ！お前裏切ったなあ！！』

『邪魔をするなアアア！！デザートは私の物だアアア！！』

『……ゼロ、レイヴンがチーズパン独占してる……』

『なんだと！？おいこらメエエエ！！俺のパン独占しようとしてんじゃないエエエ！！』

『ゼロ！！今日と言う今日は前から牛乳を……あ、すみません！あ、ちよっと！誰だ！俺のパン盗ってった奴！？』

後ろから同僚の音がする……

昔の自分達が食堂の入り口に辿り着き、歩きながら話をしていて、皿にそれぞれトッピングをしながら喋っている……

レンカがデザートを3つとって、レイヴンがチーズパンを4つとり、

レイヴンからパンを横取りしようとするゼロ・・・
さり気なくレイヴンのチーズパンを一つパクったソフィアがゼロがいつも座っている窓側の方へと皿を置き、ゼロを待っていた
ゼロとじゃれあいながらも、レイヴンとゼロがいつもの席に座り、ゼロの隣をちやっかり座っているソフィアがにっこり笑っていた
それを面白くなさそうな顔でレンカがゼロの近くに座り、皆で食事をとっていた

昔の自分達の背中が、見えてきて・・・
とても楽しかったあの頃が蘇ってきた・・・
食堂の前で立ち止まっているゼロに、後ろから誰かがゼロに肩を回してきた

誰かはおう分かっている・・・自分の肩に手を回すのは知り合いの中でアイツしかいない・・・

「ゼロ、呑気に突っ立って何してんの？ほら、二人とも先に食堂入ってるよ？」

やはりレイヴンだった。

しかし、レイヴンの顔を見た瞬間、一瞬だけ昔のレイヴンの顔が見えた

突然笑い、そして消えた・・・

「え・・・？あ・・・今、お前・・・いや、なんでもない」

恐らく、幻だろう・・・
だが、悪い幻ではない・・・
寧ろ、いい幻であった・・・

「？ まあ、いいや。とつとと食べようよ。今日の献立は君の好きなチーズパンがあるよ」

それを聞いた瞬間、肩に手を回していたゼロが突然居なくなった気がつけば、先に食堂の中に入っていて、大きめの皿を手に取り、今まさにチーズパンを取ろうとしていた・・・

「って、ちよつとオオオオ！！明らかに取り過ぎだアアアア！！！」

皿にこんもりと乗ったチーズパンを見た瞬間、ツツコミを入れたレイヴン・・・

急いで皿を取り、ゼロの横に立つと、ゼロの皿からチーズパンをいくつつか奪おうとした

「・・・貴様・・・俺のチーズパンを奪おうとは・・・いい度胸だ・・・」

「ふっ・・・いつまでも昔のまんまだと思ったたら大間違い・・・あ、すみません！ちょ、熱々のお茶をこっちに向けないで！」

ゼロに反攻の意識を見せた瞬間、ゼロが御茶碗に熱々のお茶が入れて、レイヴンの方へ投げようとしていた

レイヴンの決意はゼロの持っている御茶碗によって木端微塵に粉碎された

「・・・チツ」

レイヴンがチーズパンを奪うのを止めると、ゼロは渋々御茶碗を片手に席を探しに行った

レイヴンは皿にサラダやスープ等に乗せてバイキングを楽しんでいた

ゼロはゆっくりと昔の自分の座っていた席へと向かっていた
一番奥の窓側にある席・・・

ここは、ゼロの良く座っていた席であった

窓から雪山を見ながら、午後の訓練の内容を考えたり、ティガレックスが出現しているかしていないかの確認をしたり・・・
とにかく、色々な思い入れがある場所なのだ

そこに近づいて行くにつれて、レンカとソフィアが自分の席に自分が来る事を知っていたのか、その席を空けてくれていた

「・・・ありがとう」

皿を置き、ゆっくりと席に座るゼロ・・・

レンカとソフィアはゼロを待っていたようで、まだ食べていなかった
遅れてレイヴンがやってきて、十文字の初期メンバーの4人が全員
そろった事で、皆で手を合わせて言った

「・・・いただきます」「・・・」

全員で食事に感謝をして、食べ始めた

ゼロの皿にはこんもりとチーズパンが乗っていて、そのサブとして
サザミンスープや、サラダなどが盛りつけられていた

「ゼロ、お前相変わらずチーズパンが好きなんだな・・・」

レンカがおちよくるように言った

僅かに笑みを浮かべながら言うてるレンカはとても可愛かった

「・・・お前がそれを言うか？」

レンカの皿を見ながら言った

レンカの皿には色とりどりのフルーツに、デザート・・・
チーズパンの代わりに、サラダとスープがサブに置かれていた

「わ、私はいいんだ！それを言ったら、ソフィアはどうなるんだ！
！」

レンカがゼロの隣に座っているソフィアを見ながら言った

ソフィアの皿はまるで火山のように真っ赤で、ソフィアが好んで食べる唐辛子をメインにした料理の数々・・・
彼女は辛党なのだ。

「・・・私は辛いのが好きなの。」

「でもその色はあり得ないだろ！？なんだそのマグマみたいなスープは！！」

「・・・サザミソを唐辛子と激烈キノコキムチの地獄谷スープ（ソフィア命名）」

「明らかにマグマじゃないか！！なんでコポコポ音が鳴ってるんだ
！」

「・・・秘密」

どうやら、彼女のオリジナル料理を見てツッコミを入れずにはいられないようだった

いつもだったら、食堂の給食を食べるのだが、何故か今日は違った

のだ

彼女が自らキッチンに入って行き、自分で作ったようだ

「ゼロ、あーん」

スプーンで掬ったスープをそつとゼロの口元に持っていくソフィア・

・

ゼロは若干引きながらもそのスープを飲んだ・・・

「・・・・・・・・!!!!」

とにかく辛い

舌が焼ける位熱かった・・・

先ほどレイヴンにかけようとしたお茶がぬるく感じたのは気のせいではない・・・

「・・・辛いけど・・・美味かった」

「そう・・・」

ソフィアは内心でガッツポーズをしながら、嬉しそうにスープを口に運んだ・・・

ん？これって間接キスじゃ・・・

「・・・・・・・・／／／／」

「・・・・・・・・（イライラ）」

そう考えたら恥ずかしくて、ゼロに顔を見られないように俯いた
レンカはソフィアの事を睨み始め、顔が赤いままのソフィアもレン

力を睨んだ

ゼロは徐々に食べるチーズパンの変わらない味に嬉しさを隠せなかった

「……レイヴン、これ……」

「うん。思ってる通り。ミラおばさんのだよ」

「……そうか。なんだか懐かしいな……」

ミラは自分の訓練生時代からずっと給食を作ってくれた人だったどの料理も美味しくて、よくレイヴンと喧嘩した記憶があった……

「……変わらないな。」

ゼロは静かに言った

すると、レンカとソフィアがにらみ合うのをやめてゼロを見たレイヴンもスプーンを置き、ゼロを見た

「あの山も……この訓練所も……お前等も」

山を静かに見つめ、自然の厳しさや自然の優しさを教えてくれたあの雪山……

皆との絆を作ってくれたこの訓練所……

そして、昔のように自分を温かく迎えてくれる仲間達……

「変わらないさ……君は少し変わっちゃったけど、僕は全然変わってないさ」

「そうか？昔は“俺”と言っていたのに、今では“僕”と言ってるじゃないか」

「……ある意味一番変わったのはレイヴン」

「ちょよ！？二人とも酷くない！？ゼロもなんか言っつてよ！！！！」

くすくすと笑うソフィア達……

自分に助けの言葉を求めるレイヴン……
まったく変わっていなかった……

「……さあな。お前はやっぱり馬鹿だな」

「な！？ゼロまでー！！！！」

声を上げて笑ったレンカとソフィア……

そして、少しだけ笑ったゼロ……
レイヴンも笑いだして、皆で笑った……

何年か前の自分達が、窓から自分達を見て居たような気がしたが、
気にしなかった……

ゼロは笑い終わると、チーズパンを一口食べると、嬉しそうに言った

「……ありがとな」

「？ゼロ、なんか言っつた？」

「……いや、なんでもない……」

「ゼロ！！チーズパンだけでは飽きてしまっぞ！私のデザートも食べ！！！」

すると、レンカがゼロの口の前にデザートを差し出した

ゼロは拒むことなく、それを食べた・・・

レンカも間接キスに成功し、そして顔を赤らめ俯いた・・・

楽しい昼食も、もうすぐ終わりを迎えようとしていた頃、教官や、訓練所の生徒達がポスク村に帰ってきたとか・・・

第二十二話 教官

ゼロ達が昼食を食べ終わると、訓練場が若干がやがやとにぎわい始めた……

ゼロは久しぶりの訓練生達の声を聞くと、何故かおろおろしていた
まずい、このままじゃ確実に嫌な予感がする……

教官が……
会いたくないあの教官に会ってしまう……
ゼロはあまり教官の事は好きではない……
いや、昔は好きだった

だが、絶龍人と呼ばれるようになってから教官から距離を置き始めて、今では音信不通と言う状態のまま放置していた……

あの熱血で、血まで炎で出来てるんじゃないかと思えるような教官の御説教は長い……
昔、レイヴンが怒られて、3時間の間正座させられていたのを覚えている……

「……………」

ソフィアはくすくすと笑いながらゼロを見ていた
どうやら、困っているゼロを見て嬉しいようだ……

「……………」

レンカはゼロの表情を見て安心したのか、そのままじっとゼロを見ていた
心を閉ざしたゼロでも、こんな表情をするのか・・・と、心で思いながらほっと息を吐いた

「・・・・・・・・（ニヤニヤ）」

レイヴンはニヤニヤと笑いながらゼロを見ていた
どうやら、この後どうなるかを予想して、ニヤニヤと笑っていた

「静粛にいつ！！！！！」

ゼロが静かに出口に向かい歩き出そうとした時に、教官の声が訓練場に響き渡った

ゼロはビクッ！と反応すると、そのまま逃げようと出口まで向かっていた

「午後の訓練は、ここの卒業生である、レイヴン、レンカ、ソフィアによる訓練だ！！分かる通り、彼女達は、十文字の初期メンバーだ！！！」

「教官、一人忘れてますよ」

レイヴンが出口に向かって歩いていたゼロを指差した
すると、教官は驚いたように言った

「おお！！ゼロじゃないか！！！！！」

「・・・・・・・・・・」

終わった・・・・・・・・ゼロの脱走計画がレイヴンによって完膚なきまでに無駄になった・・・・
こうなってしまったら、やるしかない・・・・・・・・！！

「ど、どうも・・・・」

「ゼロお！！！！久しぶりだなあ！！！！」

豪快に笑う、教官はゼロに駆け寄った
そして、壇上まで連れて行くと、ゼロの背中を叩いた

「お前等！！ここに居るのは、ゼロ・ダークネス！！！！知つての通り、十文字の初期メンバーの中で最強と謳われ、初代リーダーだ！！！！」

ざわざわと騒ぐを訓練生たち・・・・
十文字の初代リーダー、ゼロ・ダークネス・・・・
つまり、目の前に生ける伝説が居るのだ・・・・
驚きながらも騒ぐ訓練生達・・・・

「お前等ア！！最初に言っておくが、コイツの事を絶龍人と言ってバカにする奴は俺の前に出て来い！！俺がみっちりお説教をしてやるう！！！！」

後ろでレイヴンが苦笑していた・・・・

昔、レイヴンがゼロをバカにしたことがあったのだが、教官に見つかつて、お説教を受けた記憶がある・・・

陰口が耳に伝われば、訓練生達にキツツイ訓練が待っているのだ・

・

だが、死人が出ていないのはある意味凄かった・・・

「午後はゼロも加えた十文字初期メンバーからの訓練だ！！サボったりするなよ！！！！以上！！！！」

そう言った瞬間、訓練生達がゼロにわらわらと寄ってきた
いつの間にか教官達はゼロから離れ、遠くから見ていた

「ゼロさん！！ナナ・テスカトリとテオ・テスカトルの二体を同時に討伐したって本当ですか！？」

「ラオシャンロンをたった一人で倒したって本当ですか！？」

「シェンガオレンの頭殻を真つ二つに斬ったって本当ですか！？」

どんどんと質問攻めに会うゼロ・・・

訓練生達は、絶龍人と言う、異形の存在としては見てはいなかった・

・

純粹に、この先輩として・・・そして、十文字の初代リーダーとして、純粹に尊敬して質問をしているのだ・・・

ゼロは若干困りながらも質問に答え始めた

「はっはっは！！ゼロは相変わらず人気だなあ！！！！」

教官は声を張り上げて言った

どうやら、久しぶりの再会でとても嬉しいようだ・・・

「はあー・・・なんで僕よりもゼロの方が、人が多く寄ってるんだろ・・・？」

「お前はいつでも会えるだろう？ここを拠点に動いているからな。」

「・・・それに比べて、ゼロはここよりも遠くで活動してる・・・」

十文字のメンバーが呟いた

レイヴンはよよっと泣きながらも、笑っていた

レンカとソフィアは呆れながらレイヴンを見た

そして、教官は嬉しそうに笑っていた

訓練生達が、ゼロを包囲し終わると、ゼロは疲れたと言うような表

情でレイヴンの所へ向かった
そして……

「てめえ何してくれてんだアアアア！！！！！」

「うわ、ゼロ、何をす……ギャアアアアアアアアアア！！！！！」

レイヴンを捕獲し、そのまま手を掴んで訓練場の壁にぶん投げた
すると、レイヴンは宙を舞い、そのまま壁に激突し、痛そうに背中
を抑えていた

「……………ふんっ！！！」

ゼロは教官や、客人が使う、休憩室へと向かうと、レンカとソフィ
アが付いてきた

教官は、訓練場にアイテムを設置したり、武器の手入れを始めた

・ 午後の訓練は、訓練生にとっては忘れられないものになるだろう。
ゼロ達は、休憩室で、午後の訓練について話し合いをしていた……

そして、後からレイヴンが休憩室に入ってくると、レイヴンが若干怒り気味でゼロに話しかけたのだが、ゼロは完璧に無視した

第二十三話 それぞれの訓練

訓練生達が休憩の時間が終わりを迎えようとしている頃・・・

訓練場では教官が武器の手入れをしていた

その手に持っている大剣は、訓練に用いられる訓練生用の大剣

しっかりと磨き、他に不備が無いか、徹底的に調べて、大剣を武器置き場に置いた

他にもレイヴンが片手剣に不備が無いか確認したり、ゼロが道具の準備をしていたり、レンカがソフィアと武器の手入れをしていたりと、教官達は忙しそうに動いていた

「さあて！もうすぐ時間だ！不備がないか確認できたか！？」

教官が声を張り上げて言った

ゼロ達は準備が終わった訓練場を確認し、不備が無いかを確認していた

「よし！！これで皆安心して訓練が出来るな！いやー、流石ゼロとレイヴンだ！剣の手入れが上手いな！」

「・・・教官が不器用なだけです」

「あ、それ同感。ボーンシックル研ぐだけって言ったのに、力み過ぎて折っちゃったんだよね・・・」

「あれは仕方が無いのだ！俺はつい力を込めて研いでしまうのだ！

それに耐えられんかった剣も剣だ!!」

(・・・ほんと、教官はパワー型だな・・・)

そう、教官は後方で援護するよりも、前線に出て、一気に敵を蹴散らす戦法と得意とする、突貫タイプ

その爆発的な攻撃力を最大まで高めるために、常にハンマーを使っていたとか・・・

今でも現役で、腕相撲だけなら誰にも負ける気がしねえ!みたいなことを常に口走っていた

「おっ、そろそろ皆が来るな。それぞれの持ち場について教えよう。レイヴン!お前は片手剣と双剣を教えてください!訓練生にお前の剣さばきを見せてやれ!レンカ、お前は太刀について先輩として教えてやれ!ソフィア!お前は、弓やボウガンなどの後方支援型の武器を担当してくれ!背中を預けられるような狩人^{ハンター}を育ててくれ!!俺は、大剣や笛、ハンマーを教える!!」

「分かりました!僕も全力で教えます!!」

「分かった教官。太刀について教えればいいんだな?言うておくけど、スタミナが尽きるまで教えるからな?」

「・・・分かった。」

それぞれの役割分担をしているにも関わらず、なぜかゼロの名前だけが挙がらなかった

まさか、と心の中で嫌いな予感がしてきたゼロは、おずおずと尋ねた

「・・・教官、俺は・・・」

「おう！！ゼロ！！お前は、好きな所を教えてくれ！お前の指導は分かりやすいからな！」

「……確かに、ゼロは教え上手」

「私も、ゼロに太刀を教わったのだったな……」

ゼロの指導は、誰にでも分かり易く、尚且つ、戦いの中で必ず役に立つ物ばかりだ。

恐らく、教官よりも教えるのが上手かもしれない

「……分かった。」

ゼロは少々不満そうに言った

実は、内心、教官に「お前は双剣を教えてやれ！」などと、久々に呼ばれたかったのである

「よし！！それでは、各員、持ち場につけえい！！！」

「……俺は？」

・
・
ゼロの小さな声が、教官の声にかき消されたのは、言うまでもない・

昼食を食べ終え、午後の訓練が開始され、一時間が経過した頃だろう
ゼロは、一度寮の机を借りて、ハーツ村への手紙を書いていた

内容は、「一応生きてます」や、「迷惑かけてすみません」などを
書いて置いた

それを書き終え、ゼロは訓練をしている訓練場へと足を踏み入れた
あっちからもこっちからも、訓練生の真剣な声が聞こえる

ゼロはまず最初に、レンカが教えている、太刀の訓練の方に足を運
んだ

何かと、レンカには世話になっているので、こう言う時くらい、少
しでも負担を減らしてあげたいのだ

太刀を訓練している訓練生の声と、間違った所を指摘しているレン
カの声が聞こえてきた

レンカは、真剣な眼差しで訓練生達を指導していた。

握り方、振り方、役割、その他の、ステージ狩場で役に立つための先人の教
え・・・

それを、レンカは訓練生達に教えていた

「そこっ！切り下がりが小さすぎだ！それでは、甲殻に阻まれて、
ダメージはおるか、傷一つ与えられないぞ！・・・っ！？ゼロ・・・
？」

「・・・よう。」

小さく手をあげ、彼女の近くに歩み寄った

それと同時に、ひそひそと訓練生達が話した

「あれが最強の団長・・・」や「どんな教え方するんだろう・・・」

「等の声が幾つも聞こえてきた

「……………」

ゼロは、先ほどレンカが注意した少年のもとへ向かい、静かに右手を差し出した

少年はおろおろしながらゼロを見た

「…………貸してくれ。」

「え！？あ、はいイ！！！」

「…………そんなに固くならないでくれ。もっとリラックスしろ…………いいか？まず、お前の切り下がりは少し力み過ぎている。切り下がりは、右手にしっかりと力を込め、左手でその力を制御して…………円を描くように、構え…………切り下がる！」

初歩的な切り下がりのやり方を少年に見せ、本当に切り下がっただが、切り下がった瞬間、暴風が生まれ、その暴風は収まる事を知らず、辺りに居た訓練生達が、その風を直に感じた荒々しく、大嵐を思わせるような威力…………ただの訓練用の太刀で、ここまで出来るとは…………訓練生達は眼の色を変えた

「…………これは、レンカの使っている技をまねただけだ。実際は彼女の方が威力が上だ…………俺は、真似しただけだからな…………」

「な、ぜ、ゼロお前！これは、お前が私に教えてくれた技ではないか！！私は、お前から教わっただけで、そこまで上手いわげじゃ…………」

「いいや・・・お前は、俺以上にその技を使いこなしている・・・お前は、俺の誇れる大切な仲間だ・・・」

そういつて、ゼロはレンカの頭に手を乗せた

レンカは少し恥ずかしそうな顔をしているが、まんざらでもないのか、手を払おうとはせず、そのまま黙って撫でられていた

「・・・みんな、よく見てて。あそこにある的目がけて、私が弓を射るから・・・絶対に邪魔しないでね・・・?」

「ソフィア先生！それ本物の矢です！！当たったら洒落になりませんよ！?」

「大丈夫・・・的は、あの無駄に大きくなった胸だから・・・きつと、レンカも邪魔だと思ってるはずだから、針の一本でも通して、中にある余計な脂肪を全部とらないと・・・」

「先生！やめてください！！神聖な訓練場でなんということをするとしてるんですか！！」

近くのボウガンや、弓を教えている場所から、訓練生の叫び声や、絶叫等が聞こえるが、ゼロとレンカはまったく動じずに、ほのぼのとした空気で過ごしていた

「ほらそこ！！振りが遅いぞ！！」

レンカが細かく訓練生達に指導をしている
その姿の、昔の未熟の頃のレンカと照らし合わせると、彼女は大きく成長しているのが分かった

「・・・・・・・・・・」

その姿をじっと見て静かに思い出す・・・
かつてのレンカの姿を・・・

あれは何年も前、教官の代わりにこの訓練場を任されていた頃・・・
ようやくレイヴンと仲良くなり、共に同じ所からスタートを切ろう
！という話から、レイヴンが訓練生としてこの訓練場の門を潜った
・
・

ゼロは半分強制的にレイヴンと同期の訓練生として入門されたのだ

しかし、師匠から「お前は人に教えるのが上手い」と言う理由で、
教官の試験を無理矢理受けさせられた時、ゼロは教官の資格を過去
最年少でとってしまったのだ

教官の資格を持っているゼロは、本来学ぶ事は無いのだが、教官に
その話をすると「そんな物はどうだっていい！問題は、お前が立派
な狩人ハンターになれるかどうかだ！！だがいい！俺の仕事が少し減るのだ
からな！」と言われ、何故か訓練生+教官としてこの訓練場の門を
くぐったのだ

ハンターになるには、三つの方法がある

一つ目は、訓練生となり、ハンターとしての心得、極意等を学び、

卒業する事

二つ目は、狩人承認試験に単独で合格する事

三つ目は、ハンターに弟子入りして、師匠から直々にハンターになった事を証明するハンター認定書を貰う事・・・

この条件の内、一つを満たせば、晴れて狩り場を駆け抜け、モンスターと命の駆け引きを行う「ハンター」になれる
ただ、三つ目の条件は非常に厳しい物だ。

師匠となる人物は必ずハンターランクが7以上・・・
つまり、G級のハンターでなければならぬのだ

ゼロはすでに、ハンター認定書をラグナスに貰い、すでにハンターとして登録されており、この時からすでに二つ名を持っていた
当時は「絶龍人」という名ではなく「黒い疾風」という通り名で呼ばれていた

文字通り、黒い疾風が戦場を駆け抜け、獲物を狩るのだ
ゼロは、この時から有名人だったのだ

教官の資格を持っているゼロは、すでに内定を貰っており、何もせずに訓練生として迎え入れられたのである。

レイヴンは、単独で狩人承認試験を単独で合格しており、彼も内定で、すでに合格していたのだ。

しかし、ゼロとレイヴンは内定で優遇されているからという理由で、訓練場の手伝いをしていたので

自分達と同じスタートラインに立とうとしている仲間達が、安全にかつ、最高の状態で合格して欲しいから、彼らは訓練場の手伝いをしていた

この訓練場は、人が少なく、村にもハンターが少ない状態だった

故に、二人が手伝ってくれたお陰で、速いペースで筆記試験が終わった

その後、実技の試験が行われ、ここでは「勇気」や「知力」が試されるのだ

この実技の試験で、ハンターになれるかなれないかは決まるのだ。ルールは簡単。訓練場に解き放たれた3匹のランポスを、一人で倒せるかどうか……
ただそれだけだ。

実技の試験が行われ、順々に合格、不合格を教官が決める……臆病風に吹かれた者は、不合格となり、勇気ある者は合格と順々に言われた

そして……とうとう、彼女の番が回ってきた……

『受験番号と名前を言え!!』

教官が怒鳴るような声で言い放った

そして、教官の前に立った少女は、大きな声で名前を言った

ゼロは装備品や、武器を預ける部屋の前で、腕を組みながら見ていたゼロの寄りかかっているこの部屋で装備を整え、実技の試験の行われる決戦場^{ステージ}へと足を踏み入れる

不正が無いかは、ゼロとレイヴンが判断し、教官に伝えるのだ

この時、レイヴンは決戦場^{ステージ}の上から監視を行っていたのだ

不正があれば、それを教官に伝え、空から飛竜等が飛んできたら、真っ先に声を上げるのだ

『受験番号31番！レンカ・クルトウフ!!』

大声で、自分の名前を言う少女・・・
これが・・・レンカと、ゼロの出会いだった

(クルトウフって、王族の血を引いた貴族だよな?)

(ああ。でも、なんでそんな貴族がこんな場所に・・・?)

(お前等知らねえのか!? クルトウフ家は、飛竜の被害にあって、潰れたんだぞ!?)

(マジかよ!? じゃあ、アイツは貴族から落ちこぼれになっちまったのか?)

ゼロが見つめる先は、合格者が居る部屋だ

その部屋からひそひそと小さな声が聞こえた

耳を澄ませてみれば、レンカの家的事をぼそぼそと話していたのだ
さらに聞いていれば「死に損ない」や「落ちぶれた貴族」などと陰
口が聞こえてきた

・・・何故、そんなにまで仲間になるかもしてない者を悪く言うの
だろう・・・

ましてや、これから苦楽を共にする仲間になるかもしれないのに、
何故、彼らは彼女のことを悪く言うのだろう・・・

『31番だな!? よし! ならば、あそこにある装備から好きな物を選
んでこい!』

『はいっ!』

教官がゼロの居る方を指さし、言った

レンカはそれに答えると、ゼロのもとへと向かって来た

『この装備から好きなものを選んでくれ。それぞれ、片手剣、大剣・

』

『そんなのどうだっていい』

キツとゼロを睨むレンカ・・・
その瞳には、決意の炎が宿っていた・・・
・・・コイツも・・・俺と・・・同じ・・・

『太刀の装備を頼む。』

『・・・いいだろう』

本来なら、ここで「太刀の扱いは難しいぞ？」等の質問を行うのだが、ゼロはレンカの瞳を見るや否や、ゼロは何も言わず、彼女に太刀と装備を手渡した

その後、レンカは太刀を使い、ランポス3頭を簡単に討伐し・・・
合格するはずだった・・・
だが、死んでいるにも関わらず、レンカはランポスに攻撃を続けたのである

その目には、憎しみしかこもっておらず、危険な状態だった
ちよつと刺激すれば爆発してしまふ・・・
いわば、爆弾のような状態だったのだ

『死ね！死ね！！死ね！！死ねエエエ！！！！』

何かにとりつかれたように太刀でグチャグチャになった死体を切り裂くレンカ・・・

これでは、剥ぎ取りはおろか、原型がなんだったのかさえ思いつかないくらい、グチャグチャにされていた
レンカが何度も何度も切り裂いた結果、ステージ決戦場の一部が真っ赤に染

まっってしまった

『お、おい見るよ・・・あれが元貴族のやる事だぜ・・・？』

『酷え・・・アイツ、人間かよ・・・』

『所詮、落ちこぼれた貴族って訳だな・・・父親と母親の顔を見てみたいぜ・・・あ、死んでるから無理か。』

『おい馬鹿・・・!!』

受験生のほとんどが、レンカの姿に怯え、それぞれ感想を言っていたしかし、合格者の一人がレンカに聞こえるような声で、隣の合格者と話を振った

その声を、わざとレンカに聞かせるように・・・

『（ピクツ）今・・・父上と母上を侮辱したなあ!!』

合格者の集まる部屋へ、憎しみを込めて目で睨みつけると、レンカはその場から離れ、先ほどの事を言った少年へと駆けて行った
太刀を担ぎ、そのままその少年へと駆けて行くレンカ・・・
少年は、その場から離れ、ゼロの居る方まで駆けていった

『借りるぜ!!』

そういつて、片手剣に手を伸ばした少年
だが、ゼロを追い抜いたと思い、手を伸ばしていた時には、ゼロの姿はすでに無かった・・・

『残念だけど、それは無理だ』

その言葉と同時に、少年は後ろに吹っ飛んでいた
その少年が突然自分の目の前に迫っている事に驚いたレンカは急いで緊急回避を行った

先ほど、レンカが居た位置に先ほどの少年がびくびくと痙攣しながら倒れていた

突然起きた出来事に驚いたレンカは、先ほどの少年の居た場所を凝視した

そこには、ゼロが殴ったであろう手を叩き、まるで後片付けを終わったかのように一度ため息をついた

そして、そのままゼロはレンカと少年の間に入り、言った

『そこまでだ。喧嘩は後でやるんだな。』

『何故だ!!何故邪魔をする!!』

『理由は簡単だ。お前が、間違った事をしているからだ。・・・お前が握ってるそれは、一体何のための物だ?』

『っ!!・・・だからといって、お前のような奴が何故出しゃばった真似をする!?!こんな事に関わっても、お前に利益は何もないだろっ!?!』

『確かに、利益なんてない。』

『なら何故だ!?!』

ゼロは、ゆっくりと息を吸い、深く深呼吸すると、静かに言った

『お前も俺も・・・良く似てるんだよ・・・』

『っ!?!?・・・貴様に・・・貴様なんか・・・』

チャキツとレンカの持っていた太刀が音を鳴らした

そして、レンカは憎しみのこもった目でゼロを睨みつけ、突貫した

『私に痛みが分かる物かああああああ!!!!』

『分かるんだよっ!!!!!!』

バキン!!と、何かが折れる音がした

レンカは、ゼロの体に確実に太刀が当たったと、確信していた・・・だが、それは先ほどの何かが折れる音と共に消えてなくなっていた・・・

太刀から、何も感じなかったのだ

相手に攻撃を当てたという重みも・・・

確実に仕留めたという自信も・・・なにもかも・・・

くると、^{ステージ}決戦場の空に、金属の物体が飛んでいた

それは、レンカの頬を掠め、地面に突き刺さった

『馬鹿・・・な・・・?!』

自分の持っていたはずの太刀を凝視した

切っ先が・・・無くなっていた

一瞬の出来事だった。

ゼロは薙ぎ払われた太刀を踏みつけ、その太刀の切っ先を蹴りあげたのだ

レンカはこの時、ようやく気づく事が出来た・・・

自分が対峙しているのは、数多の死線を潜り抜け、戦場を駆けて行った、一人の戦士と対峙している事に・・・

『レンカ・クルトウフ・・・合格の判は押されている。とっとと合格者の席に座れ。』

ゼロが殺気の籠った瞳でレンカを見つめた

体中に、嫌な電流が流れた

恐ろしいほど冷たい目に、レンカはその場に座り込んでしまった

その瞳を一度右手で覆い隠し、そして、レンカに近寄ったゼロは、静かに言った

『立て。お前には、立派な足があるだろ？その足で・・・昇りつめて来い』

そう言い残し、ゼロは折れた切っ先と、レンカの手から離れた太刀を拾い上げ、そのまま武器庫へと消えて行った

「・・・・・・・・・・」

あの後、ゼロは教官にお咎めを喰らい、五時間くらい反省文をかかされまくった記憶が蘇った

だが、自分はそれでよかったと、心で認めていた

あのままだったら、レンカは今頃ハンターになることはできず、最悪の場合は、二度と試験を受けられなくなっていたかもしれないのだ。それと比べれば、ただか反省文の一つや二つ、簡単にこなしてやるう、と心で思っていたのだ。

「ほらそこ！私語はするな！」

「……さて、俺は他に行くでしょう」

レンカの成長ぶりも改めてみる事が出来たので、ゼロは少し満足したかのように言った。すると、レンカは少しさびしそうに言った。

「そ、そうか……ひ、暇があれば来てくれ。く、訓練生も待つているから……な？」

「……ああ。ありがとう。またな」

「ああ……また……」

そう言い残し、ゼロは歩き出した。

その背中を、少し寂しそうに見つめたレンカ……

後ろでひそひそと私語が始まったため、レンカは気合を入れ直し、もう一度厳しい指導を始めた。

その顔は、何かに照れているかのように赤かった……

次に、ゼロが向かったのはソフィアが教える後方支援型の武器の場所だった。

ソフィアが真剣な眼差しで生徒を見つめ、間違いを指摘していた
簡単にいう、射的という物である。

どうやら、弓やボウガンを使って、どれだけの射抜く事が出来る
かのテストをしているらしい

ソフィアは静かにその様子を見つめ、評価をつけていた

「・・・ソフィー」

「ゼロ!？」

ゼロは静かに近づき、ソフィアの後ろから話しかけた

すると、ソフィア表情が一変した

先ほどまで真剣に取り組んでいた眼差しや、雰囲気は消え

まるで、異国に派遣された最愛の夫を見つけた妻のような顔をして
いた

「・・・よう」

その顔はとても輝いていて、直視していると恥ずかしくなってきた、

ゼロはソフィアに視線を合わせないようにそっぽを向いた

その姿を見て、凄く嬉しそうに微笑むソフィア・・・

レンカの座っていた椅子の隣には、しっかりもう一つ椅子があり、

ゼロに座れと手招きをするソフィア

ゼロはまだ恥ずかしいのか、少しギクシャクしながらソフィアの隣
に座った

「・・・ふふっ」

「・・・何故笑うんだ？」

ソフィアがとても嬉しそうに笑みをこぼした

それに納得がいかないのか、ゼロが少し納得のいかないような顔でソフィアを見た

ソフィアはその表情を見て、もう一度微笑んだ

「だって・・・ゼロが、ここに居るんだもん」

「っ!?!」

ソフィアが急にゼロに寄り掛かった

ソフィアからとても甘い匂いが香ってきて、ゼロは少しだけ顔を赤くした

「・・・可愛い」

そういい、ゼロの頬を人差し指でつつくソフィア

ゼロは恥ずかしいのでやめると、顔を赤くしながらその手を振り払おうとしていた

それでも止めないソフィアは、悪戯をしてやろうと言わんばかりにゼロに抱きついた

「そ、ソフィー!?!」

「・・・もう少し・・・このまま・・・」

ソフィアは、皆が周りに居るにも関わらず、ゼロに抱きついた

射的のテストをし終えた訓練生がソフィアを羨ましいという目で見つめていた

抱きしめられているゼロ本人は、どうしたらいいのか分からず、その場で静かに顔を赤らめていた

『……いいかお前等。私が特別に太刀の極意と言う物を教えてやる。まず、相手に気づかれぬように近づき……奇襲を行う。そして、相手が気づく前に一撃を喰らわせ、距離をとること……実際に私が見せてやる』

『先生!?ここにモンスターは居ませんよ!?というか、何しようとしてるんですか!?!』

『……フッフッフ……恥も持たずよくまあ、あそこまでイチヤイチャ出来るなあソフィアああ……!!なんと羨まし……じやなくて、何と妬ましい……!!』

『誰かああああ!!先生を止めるおおおお!!』

『離せお前等ああああ!!ハンターには殺らねばならぬ時という物があるのだああああ!!』

『それは絶対に今じゃないですからああああ!!ちよ、男子も手伝つて!!』

『サー、イエツサー!!!!』

『離せええええええええええ!!!!!!』

遠くから何故かレンカの叫び声が聞こえたような気がした……だが、ソフィアへと全神経を集中しているゼロに、その声は届く事は無かった

「……ゼロ……どうして……何も相談してくれなかったの……

「?」

「……ソフィア……」

突然、ソフィアがゼロに悲しそうな声で質問した

ゼロはソフィアの肩に手をかけて、静かに見つめた

遠くから『見せつけるなああああああああ!』という大声が聞こえた気がしたが、ゼロ達にはまったく届かず、ゼロとソフィアは見つめあっていた

「……私、そんなに頼りなかった……?」

「違う……俺は……」

「いいの……私は……ゼロの信用に値する人物じゃなかったって……事でしょ……?」

「!? 違う!! そんなことない!! お前は、いつも俺を支えてくれていたじゃないか!」

「でも……じゃあ……どうして……?」

「俺は……あの時、何も信じられなくなったんだ……誰も、近寄らせたくなかったんだ……もう……傷つきたくないって、心で何度も思ったら……いつの間にか、俺は十文字を抜け、暗い道を歩いていた……だから……決してお前が悪い訳じゃない……」

ゼロは目に涙を溜めこんだソフィアを抱きしめた

ソフィアは突然の事で驚いたが、自然と抱きしめ返していた
そして、ゼロは静かに言った

「本当は・・・傷つけたくなかったんだ・・・俺の大切な絆も・・・
お前たちも・・・でも、怖かったんだ・・・自分の力が・・・」

「ゼロ・・・」

さらに力を込めるゼロ・・・

それと共に、ソフィアの顔もどんどん赤くなってきた・・・
何年も続いていた片思いの相手に抱きしめられているのだ・・・
心臓がバクバクとうるさい音を奏でていた

だが、不思議とそれは気にならなかった

ただ、ゼロにだけ全神経を集中させ、彼の一拳一動に全てを委ねて
しまったのだ

「だから・・・自分から遠ざけたんだ・・・絆も・・・力も・・・
大切な物も・・・だけど・・・これだけは分かって欲しい・・・」

「・・・うん・・・」

ゼロの胸に顔を埋めるソフィア

ゼロから聞こえる鼓動も、とても高鳴っていたが、ソフィアにはオ
ルゴールのように聞こえていた
聞いていると、とても落ちつく・・・
今にも眠ってしまいそうだ・・・

「俺達は・・・ずっと仲間だ・・・」

「・・・ばか」

そういうと、ソフィアは抱きしめていた手を緩め、ゼロの頬に手を置いた

ゼロは予想にも思っていなかった答えに少し驚いていた

「……私は……ゼロの大切な人には……なれないの……？」

「?……どういう意味だ？」

「……私は……ゼロの特別な存在には……なれないの……?その……恋人……とか……」

「っ!?!?!?!」

突然の事で驚いたゼロ

ソフィアの顔も少しずつ赤くなっていき、その顔を隠すように、もう一度ゼロに抱きついた

「……ずっと、ずっと好きだった……一方的な片思いだったけど……私は、ゼロの隣に居たい……私が隣に居ると……迷惑……?」

「い、いや……迷惑では……ないが……」

お互いに意識を集中させているため、周りが完全に見えなくなってしまった二人……

ソフィア、覚悟を決めたのか、一度ゼロから離れると、一度深呼吸をして、静かに見つめた

「ゼロ……愛してる……」

そういい、ソフィアはゼロの顔に顔を近づかせた
ゼロは、ソフィアがなにをしようとしているのか分かった瞬間、後
ろに後退しようとしたのだが、なぜか踏みとどまってしまった・・・
どんどん近づく二人の距離・・・
そして・・・
二人の距離は・・・

「さああああええええるかあああああああああ
！！」

「じぶっ！！??」

くっつく寸前に、太刀の鞘がゼロに向かって放たれ、ゼロは後ろに
吹き飛び、そのまま意識を失ってしまった・・・

吹っ飛びながら、ゼロは思った「どうしてこうなった・・・」と
・
・

第二十三話 それぞれの訓練（後書き）

はい、更新が遅れました・・・リユウガです

いや、忘れていたわけじゃありませんよ？

何故か知らないけど、この小説だけネタ切れになってしまい、更新がストップしていただけですよ？

まあ、ポータブルの新作をプレイしたら

「やべえ！？更新しないと！？」ってなったわけじゃないですからね！！

・・・言い訳でしたね。すいません・・・

まあ、そんなわけで、お詫びを込めて書いたんですけど・・・

やっぱり、教官を松岡 造っぽく熱くするのは止めておいた方がよかったツスね・・・はい。

正直、動かしにくくて困ってました・・・

まあ、今回のメインは「レンカの恋」にしたんですけど・・・

無理です・・・レンカとゼロのイチャイチャしているシーンは割とすぐに思いつくんですけど、そこまでどうつなげればいいのか分からないです・・・はい。

レンカの話を書いて「・・・ソフィアファンの人って居るのかな？」って思っただけで、急遽最後の方はソフィアのお話を追加しました

まあ、恐らく居ないと思いますが・・・

ソフィアはソフィアで、動きやすく助かるんですよ。

ゼロ一筋の、健気な女の子ですけど、嫉妬心はレンカやリアにも匹敵するくらい強いんですよ……

もう、頭の中じゃゼロ×レンカとゼロ×ソフィアが入り乱れてとんでもないことにwwww

まあ、久々の更新なんで、感想くねると嬉しいなーと、しみじみ思いながら、キーボードを打ちこんでますw

では！次回のあとがきで！！

第二十四話 変わらない物

「おいゼロ!!起きろ!!」

ん……?

俺は……?

あ、そうか……レンカの投げた鞘に当たって気絶したのか……
そうか……なら……早く起きなければ……

『は、早く起きろ……きよ、今日は大切な日だろ……?は、早くしないと……こ、困る……』

静かに目を開け、辺りを見渡すゼロ

自分はいつの間にかベッドに運ばれ、寝ていた……はず
だが、自分が居るのは保健室と呼べるような場所ではなく、とある
一軒家の一室

窓から外を見て、ここが二回だと言う事に気付いたゼロ

一度体を起して、声のした方を見るゼロ

そこには、普段身に纏っている装備ではなく、普段着を着ているレンカの姿があった

だが、その顔はほのかに赤く、何かを照れていた

「よ、ようやく起きたか……きよ、今日はあの日なんだぞ?いつまでも寝てないで、しっかり起きてくれ……」

「????レンカ、何を言っている?」

「だ、だから……きよ、今日は……その……」

恥ずかしそうに体をもじもじさせるレンカ
そして、その顔はトマトのように真っ赤になっていて、自分に何か
を告げるのを戸惑っていた

「わ、私と……お前の……その……け、結婚式……だ
る……?」

「……は?」

「な、何度も言わせるな! だから……今日は結婚式だと言ってい
るんだ!! 分かったら着替える! 馬鹿者が!!」

突然、レンカが突然枕をゼロに投げつけた
それが顔に直撃し、辺り一面が真っ暗になった
枕が重力によって落ちると、そこには……

「じ、じろじろ見るな……馬鹿……」

もじもじしながらこちらを見つめる純白のウエディングドレスを着
たレンカ……

ゼロとレンカは結婚式の式場に居たのだ

(……ちよつと待て!? 俺達は一軒家の二階に居たのではないの
か!?)と、ゼロは心の底から叫んだ

だが、その声は届くことなく、顔を隠した神父により話は進められた

『ええー、二人は常にお互いを愛し、敬い、慰め、助け変わるこ
となく、その健やかな時も、病める時も、富める時も、貧しいと気も・
』

すらすらと囁むことなく読みあげる神父

しかし、その声に違和感を感じたゼロ・・・
じつと神父を見ると、その神父の顔が少しずつ晴れて行き、ようやく顔を見る事が出来た

『死が二人を分かつまで、命の日が続く限り、汝の夫、妻に対して、堅く節操を守る事を誓いますか？』

「・・・おい待てレイヴン。なんでお前が神父なんだ？」

『細かい事は気にしなさい。さあ、とつと愛を誓うんだゼロ！じゃないと、乱入者が・・・』

「・・・何を馬鹿な事を言っている。こんな晴れ舞台に自ら飛び込んでくる馬鹿な乱入者など居る訳がなかるう？」

ゼロが神父役をしていたレイヴンにそう言い放ち、呆れたようにため息をついた

だが、ゼロがそう言った瞬間、突然式場のドアが蹴破られた

「待つて！！私はまだ諦めてない！！」

ドアを蹴破り、吹き飛んだドアがレンカの方へと飛んでいった

ゼロは慌てて対応しようとしたのだが、レンカは隠し持っていたのか、どこからか太刀を取り出し、鞘から刀を出し、ドアを真つ二つに切り裂いた

ゼロは今目の前で起こっている事が現実でない事を死ぬほど願った
何故・・・何故ソフィアがウエディングドレスで乱入してきたんだ・・・？

心の声がソフィアに届いたのか、ソフィアは凄いスピードでレンカとの距離を詰めた

「レンカアアアアアア!!!」

「ソフィアアアアアア!!!」

太刀とナイフがぶつかり合い、ガチン!!と金属音が鳴り響いた。ゼロはとばかりを受けられないよう遠くに離れようとしたのだが、バツ!!とこつちを見てきた花嫁（オーラがめっちゃ怖い）が一斉に見つめてきた。

「待ってるゼロ!今この小娘を殺って式を続けるからな!!!」

「待っててねゼロ!こんな胸だけが大きい単細胞なんてすぐに葬り去って、一緒に平和に暮らそう!!!」

・・・普通の男が女性からこんなに熱烈なラブコールを受ければあっさり「OK」してしまうだろう。

だが、ゼロは「OK」と言う言葉が口にできなかった。まず、結婚式の場で、花嫁の座を争う花嫁二人をどう対処すればいいのか分からないのと、先ほどから弓とナイフが飛んできたり、真つ二つになった物を避けたりするのに精一杯だった。

普段のゼロなら簡単に避けて、平然としているだろうが、目の前で起こっている現実が、あまりにも悲惨なため、落ちつけ落ちつけと、心の中で必死に叫んでいたのである。

というか、ソフィアは平和に暮らそうと言っている割に、やっている事は完璧な殺し合いである。

これで、平和的と言われるても、ゼロはとても困った。

「おいレイヴン・・・どういうことだ?」

「あつはつは・・・君が悪かったんだよ？二人の告白を棒に振るっ
たと思つたら、いきなりレンカに告白してさ・・・ソフィアが発狂
したの覚えてる？」

「ま、待て・・・まずそこから俺は知らないんだが・・・」

「その後に、ハーツ村に住んだ娘達も現れてさ・・・」「ゼロは私
のだ！」ってソフィアが言つて、すんごいディーブなキスしたんだ
よ？覚えてないの？」

「い、いや待て・・・俺はそんなことした記憶もなければ、された
記憶もないぞ？・・・というか・・・まず、俺は婚約指輪すら買っ
ていないんだが・・・」

ゼロがそう呟いた瞬間、レイヴンは何かを感じ取ったのか、椅子と
椅子の間に緊急回避をして避けた

それとほぼ同時に、ゼロに向かい真つ二つになった椅子や、ナイフ、
弓矢が飛んできた

ゼロはその場で回避し、攻撃を全てかわしたが、こちらを睨んでく
る花嫁達の目はとてもじゃないが、人の目ではなかった・・・

「ゼロ・・・私に結婚を迫っておいて婚約指輪を買っていないだと
・・・？ちゃんと渡してくれたではないか！！」

何故か左手の薬指には、美しく輝く指輪があり、ゼロが私にくれた
と、レンカが主張した

「ゼロ・・・私にもちゃんと渡してくれたよね・・・？」「お前を一
生幸せにする」って言ったじゃない・・・」

ソフィアの左手の薬指を見ると、レンカ同様指輪をしており、それを渡したのがゼロと主張

しかし、本人であるゼロはまったく言うほど覚えていないので、一体何が何だか分からないような顔をしている

「……ゼロ……これはどういうことだ……?」

「……ゼロ、許してあげるから正直に答えテ……?」

二人とも、もうすでに人間と言える物ではない存在になってしまったような気がした

後ろから燃え上がる黒い炎は、まるで闘気のように辺りを吹き飛ばしていた

一歩歩くごとに、地面は悲鳴を上げて、床に敷き詰められたパネルが砕け、宙へ舞った

「お、落ちつけ!」

ゼロが必死になって止めようとするが、二人は一向に止まる気配を見せない……

そんな中、レイヴンは椅子の隙間からこんな事を言っていた

「ゼロ……君はいい友達だったよ……」と……

「さあゼロ……?心の準備はいいか……?」

「ゼロ……ちゃんとは話会おうね……?……ベッドの上で。」

ソフィアが物騒な事を言ったが、ゼロはどうしていいか分からず、後ろに下がった

そして、突然頭の上に瓦礫が落下し、ゼロは気を失った……

「……はっ!?!」

ゼロは、真つ白な空間の中に居た

カーテンで遮られていて、辺りは見えないが、薬品の独特の匂いのあるこの場所は……

カーテンをそつと開けると、そこには昔に少しばかり世話になった保健室の光景が広がっていた

「……夢……だったのか?」

良かった……と、心の中でため息をつくゼロ

当然だろう。あんな事が現実で起きたら、まず自分は明日の朝日は拝めないだろう

それに、レンカもソフィアも、あそこまで起こる訳……..
ないだろう。

「……っ……レンカめ……思いつきり投げやがったな……」

まだ痛む頭にそつと手を当て、そのまま独り言をつぶやいた

こんなに乱暴な言葉を使うのはいつ以来だろう……

「・・・まったく、レンカもソフィアも・・・少しは自重してくれ
たっつていいだろ・・・」

頭をさすりながらベッドから降りて、脱がされていた装備を身に纏う
だが、乱暴な言葉を使ってはいるが、少しだけ頬が緩んでいるのは
ゼロにも分らない・・・

「・・・さて、行くか。」

目的はない・・・だが、太陽の位置を見る限り、まだ訓練はやって
いる時間・・・

ならば、まだ見終わっていない、レイヴンの訓練や、教官の訓練を
もう一度見なければ・・・

保健室から外へ出て、一度大きく深呼吸すると、ゼロは歩き出した

「・・・おっ、やっているな」

先ほどとは違い、レンカ達も訓練生達に訓練をしていて、ソフィア
も真剣な眼差しで訓練をしている

・・・先ほどの事はあまり思い出したくないが、ゼロはまだ見終わ
っていない、レイヴンと教官の訓練を見に行った

こそこそと隠れるように移動しているのは、夢の中でレンカとソフ
ィアにボコボコにされたトラウマのせいだろう

「ほらそこ！！休まず追撃！！状況を見て判断する！！」

「・・・レイヴン」

レイヴンの後ろにひょっこり現れたゼロ

すると、レイヴンは分かっていたかのようにゼロを見た

「まったく・・・遅すぎだよ？君はいつもそうだよね・・・皆がピ
ンチの時には遅れて登場するのに、それが終わるとすぐにどこか行
っちゃうんだもん・・・」

「・・・すまないな。だが、俺は別に正義の味方を気取ってるわけ
じゃないぞ？」

「そんなの分かってるよ。君はどこまで行っても、君だからね。」

「・・・答えになっていないぞ」

「ははっ、それもそうか。」

昔のようなやりとりだ・・・

懐かしい・・・レイヴンとこうやって話すのも随分久しぶりのよう
に感じられる・・・

「ほらそこ！！ゼロが居るのに、だらけない！！」

ビクッ！！とレイヴンが大きな声でゼロの名前を呼んだため、肩を
震わせるゼロ・・・

だが、この時は決して振り向かなかった
レンカやソフィアと目を合わせれば・・・先ほど見た夢のような事
になりかねない・・・

故に、ゼロは振り返らなかった

「・・・レイヴン、お前は相変わらず教えるのが下手だな・・・」

「なあっ！？いきなり何言うんだよ！？俺の訓練のどこが下手だっ
て！？・・・あ」

「・・・喋り方が昔に戻っているぞ？」

「う、うるさいよ！！仕方ないでしょ！？」

うっかり、昔の喋り方に戻ったレイヴンを注意して、ゼロは少しに
やにやと笑った

それを見て、レイヴンはむっとなり、ゼロの方に手を回した

「この赤髪むつつりスケベー！！！」

「だ、誰がむつつりスケベだ！？離せ！！！」

右拳をガンガンとゼロにぶつけ、じゃれあう二人

それを見て、ぽかんと口を開けたまま驚く訓練生達・・・

昔も・・・こうやってお互いにじゃれあった記憶がある・・・

やはり・・・変わらないな・・・コイツ（レイヴン）は・・・

『・・・嘘・・・まさか、昔にゼロにかかった同性愛疑惑って、

本当だったの・・・？』

『な！？え、縁起でもない事言うなソフィー！！そ、そんなわけないだろう！？あの、ゼロが・・・ど、同性愛など・・・』

『・・・どうしてレイヴンは良くて、私は駄目なの・・・？まさか・・・ゼロって、スレンダーな体型の子が好みなの・・・？』

『そ、それでは私はどうしたらいいのだ！？』

後ろの方で、とんでもない単語が聞こえたので、バツ！！とレイヴンから離れるゼロ

レイヴンも会話を聞いていたのか、ほぼ同じタイミングで離れた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・さあ皆！続けようか！！ぜ、ゼロは教官の所行ってきなよ！！ね！？」

「あ、ああ！！世話になったな！！」

無言でお互いを見つめ合い、そしてアイコンタクトでこのままでは変なうわさが流れると悟った二人は、潔く離れることにした

『あ、離れた・・・なんだ、ゼロもレイヴンも、同性愛主義者ではなかったのか・・・』

『・・・分からない。でも、アイコンタクトで「またベッドの上で会おう」って言ったのかもしれない・・・』

『え、縁起でもない事を言っちなあ!!!』

しかし、レンカとソフィアは勘違いしたままで、教官の所へ向かうゼロは、一度大きなため息を吐いて教官の教えるハンマーの訓練場の所へ向かった・・・

「おらおらおらああ!!!お前等かかってこおおおおい!!!」

ハンマーを教えている教官の所へ向かうと、教官が無装備で訓練生達を投げ飛ばしていた

恐らく、教官の事だ・・・「俺に一発入れれば合格だア!!!」とか言っつて、訓練生達と模擬戦をしているのだろう

「おお!!!ゼロ!!!丁度いい機会だ!!!お前達、見てろよあ!!!」

ゼロを見つけた教官が、こっちへ来いと手招きをした

ゼロはそれを見て少し微笑むと、前へと進んだ

「さあゼロ!!!かかってこい!!!」

「・・・勝利条件は?」

「簡単だ!!!俺の腰にあるこの紐を奪えばお前の勝ち!俺にブツ飛ばされたら、お前の負けだ!!!」

単純だが、とても難しい訓練だ・・・
何せ、相手がああ剛腕の持ち主の教官だ。

訓練生達にとっては、素手でティガレックスに挑むのと同等の恐怖があるだろう

だが、ゼロはそれを恐れることなく、前へと歩み寄った

「では・・・始めえい!!!」

「っ!!!」

教官の声と共に始まった模擬戦・・・

ゼロは、声が聞こえた瞬間にはすでに動いており、教官との距離を詰めた

「がーっはっはっは!!!お前とこうやって模擬戦をするのも久しぶりだなア!!!」

そう言いながら、太腕をこちらに向ける教官

その剛腕から放たれる一撃は、リオレウスでさえも怯む一撃・・・それを避けて、教官の懐にまで乗りこまねばならぬのだ

「そうです・・・ね!!!」

教官の放ったパンチが、地面に当たり、その周りには衝撃波が伝わり、ゴウツ!!!と言う大きな音を立てて地面が揺れた
なんとという力強い一撃・・・!!!

だが、ゼロはそれに臆することなく向かった

「うおおおおおお!!!」

それはあつという間の出来事だった
教官の攻撃が地面に当たった瞬間、ゼロは教官の懐に滑り込み、腰
にあつた紐を獲り、そのまま教官を抜き去つたのだ

この訓練で試すのは・・・勇氣。

勿論、教官が手加減をしているのは知っていた。

それと同時に、教官は一回しか攻撃しない事も知っていて、ゼロは
教官の懐にあつた紐を獲つたのだ

訓練生からしてみれば、とても勇氣のいる物だ・・・

だが、ゼロのように歴戦の戦いを勝利してきた猛者には、アトラク
ションのようにスイスイ行えるのだ

ゼロは奪つた紐を静かに握りしめ、教官の方へと歩み寄つた

「・・・奪い取つてやりましたよ」

「・・・やはり、お前は俺の教えてきた中で、一番の男だな・・・」

そう呟き、ゼロは握手を求めるように教官に紐と手を差し出した
教官が差し出した手を強く握りしめ、紐を渡し、ゼロは言った

「・・・やはり、教官は教官ですね・・・」

ゼロの呟きは・・・風に運ばれ、どこかへ消えたとか・・・
この声を、しっかり教官は聞いていた・・・

「おう！俺は、いつまでも俺のままだ！！」

そういい、ゼロの背中をバンバンと叩く教官。

その顔はとても嬉しそうで、大声で笑っているその姿を見ると、不思議と気分が安らいだ・・・

やはり、見た目は変わっても、心までは変わっていない事を知る事が出来たゼロは、少し微笑みながら空を見上げた

「・・・変わらないな・・・」

ここから見上げる空も・・・変わらない・・・

そして、教官も・・・レイヴンも・・・レンカも・・・ソフィアも・・・

やはり、何も変わっていなかった。

変わったのは・・・恐らく自分だけ・・・

だが、不思議と孤独感は無かった

それは・・・信じる仲間たちが居るから・・・

「・・・ありがとう。」

そう呟き、レンカ達の集まる場所へ足を運んだ・・・

第二十四話 変わらない物（後書き）

・・・はい。今回は短めのお話にしました

いや〜・・・前回のアレ、何気に好評でしたね・・・

いや、まさかソフィアファンが居るとは思いませんでした・・・
自分的にレンカの方が好きなので、なんとも言えない心境ですね・・・

沢山の感想をありがとうございます!!

不定期更新ですが、見てくれると嬉しいです!!

では、次回!!

第二十五話 伝わる想い（前書き）

どうも、放置気味だったこの小説も、そろそろ更新した方がいいと想い、キーボードとにらめっこを開始したリュウガです。

地震の影響で、暗い雰囲気になっている方々に、少しでも元気が出せればと思い、もう一度この小説を書こうと思います。

まあ、私程度の者が書いた物なんて、ちっぽけな物です。

ですが、少しでも人を元気にできれば嬉しいです。

では、最新話、どうぞ

第二十五話 伝わる想い

ゼロ達、初代十文字メンバーが集まって訓練を終えた頃

訓練場に慌ただしく入ってくる影が一つ・・・

その影は、訓練生達にとってはあまり見慣れたくない光景だろう。

ぱたぱたとある場所に向かって走る影は、夕暮れの光に照らされて徐々に明らかになっていく・・・

その慌ただしく走る姿を確認した訓練生が、まさか・・・と小さく呟きながらぱたぱたと駆け寄ってくる音の方を向いた

「く、訓練生の方ですね!？」

「どうかしたんですか?クラウド先生?」

クラウド先生と呼ばれた青年はげえげえと荒い息を整え、訓練生を睨みつけるように言った

「い、今すぐ教官か、十文字の団長を呼んで下さい!!緊急事態ですっ!!!」

「は、はい!!!」

睨まれて驚いたのか、訓練生の声が裏返った

そして、訓練生は猛ダッシュでその場を離れ、教官や団長の居るであろう休憩室へ向かった

青年は、はっ!?!と驚くと、何かを探すように辺りをキョロキョロと見回した

訓練がようやく終わったゼロ達。

今はゆっくり休憩室で紅茶を飲んでいた

戦士の一時の休息というものである。

ゼロや、レンカ達ほどのハンターでも、やはり人間だ。

休息は必要なのである。

『きよ、教官！！く、クラウド先生が来ていらっしやるであります
！！！』

『何！？クラウドがだと！？』

ふと、教官と訓練生のそんなやりとりが聞こえてきた
飲んでいた紅茶を飲みほし、机に置くと、ゼロはゆっくりと廊下に出た

『クラウドスウ！！久しぶりだなア！！！！』

『ひ、久しぶりじゃないですよデンリ！！緊急事態です！！！！』

『はっはっは！！俺をその名で呼ぶのは、お前だけとなってしまう
たな！なアに、少し落ちつけ。ほれ、一緒にお茶でも・・・』

『だーかーら！！それどころの問題じゃないんですってば！！！！』

・・・廊下で、教官と誰かが話をしていた。
じつと廊下に居る教官と、話し相手を見つめていた

「何々？誰か来てるのー？」

「・・・教官と・・・クラウド先生・・・？」

「なんでアイツが居るんだ？というかソフィア、斬り殺していいか？」

「・・・お前等・・・重い。退け。というかソフィー・・・どさくさにまぎれて抱きつくな」

ゼロの背中に手を回して、ニヤニヤしながら教官を見つめるレイヴンピッタリとゼロに抱きついていてるソフィア

それを見てギロリと睨むレンカ

その視線の先には腕を組んで男らしく大声で笑う教官と、それを見て慌てながら何かを伝えようとする金髪の青年の姿だった。ゼロは、その青年の姿に見覚えがあり、なんとか思いだそうとするが何か引掛かって思い出す事が出来ない・・・

確か、十文字のリーダーだった頃に会った事があるような・・・？だが、思い出せない・・・だが、絶対にどこかで会ったことのある人物であることは確かだ。

だが、先ほどソフィアが言っていた事を思い出す。「クラウド」という名前のようだ・・・

「・・・あつ。」

ようやく思い出せたのか、ゼロはその場で小さく呟いた。あの人は・
・教官と一緒にこの訓練所で先生をしていた、クラウド・デイツ
ツアではないか。ファミリネームが珍しいという事で覚えていた
ので、すっかり忘れてしまっていた。・・だが、ゼロの記憶が正
しければ、彼は大切な物がなかった。

「・・・なあ、クラウド先生って、眼鏡外したのか？」

「あれ？そういえばそうだね・・・この前までちゃんとつけてたの
に・・・」

レイヴンが目を細めてクラウドを凝視した。やはり、眼鏡を忘れて
しまったのだろうか？それとも、視力が回復したから眼鏡を取って
しまったのだろうか？どちらにせよ、ゼロの知り合いであるという
事は変わらなかった。

そして、ようやくゼロ達の視線に気づいたのか、クラウドがこちら
を向いて来た。ゼロと視線が重なった瞬間、クラウドは本当に嬉し
そうな顔を浮かべた

教官を押し退けて、ゼロの方へと駆け寄ると・・・

「ゼロ！！ゼロではないですか！！」

ゼロに向かってダイブするように抱きついた

だが、ガシッ！！と綺麗に頭を掴まれ、ギロツとクラウドを睨んだ。

「・・・先生・・・私、ゼロじゃない。」

しかし、クラウドが抱きつこうとしたのはゼロではなく、ソフィア

であった。

ソフィアの横ではあとため息をつくゼロ

やはり、この人の目の悪さは教官のお墨付きのままだった。

そう、クラウスは目が悪いのだ。その目の悪さを例えるなら、閃光玉で視界を奪われたリオレウスに等しい。それくらい目が悪いのだ。どうしてそんなに目が悪いのかと問いただしても、本人でさえ分からないのだとか・・・

「・・・先生・・・」

ゼロが冷ややかな目線を送ると、クラウスは慌ててソフィアから離れた

そして、深く頭を下げた

「ご、ごめんソフィア!!」

「いや先生、私に謝られても困るんだが・・・」

だが、頭を下げた先に居たのはソフィアではなく、レンカ。もはやギャグとしかいいようがない。

ああああ!!とクラウスが叫ぶと、彼は悩みを相談するようにつた

「ねえ、誰か僕の眼鏡を知りませんか!？」

「・・・首にぶら下げてるそれはなんですか?」

「あ、ありましたあ!!!!」

いや、普通気付くって・・・

「た、助かりましたあ・・・」

眼鏡をかけて、ほっと一息つくクラウス

だが、その姿を見て呆れるゼロとレイヴン

いい加減、眼鏡を無くす癖は直らない物かとため息をつくレンカ
どーでもいいみたいな顔でクラウスをじっと見るソフィア

がっはっは！と大声で笑う教官、どうやらクラウスの失敗を素直
に笑っているようだ

「で、デンリ！！今はそれどころじゃないんですってば！！」

ようやく目的を思い出したのか、クラウスは教官のいる方へ向かい、
必死に何かを伝えようとして居た

ゼロ達は、話の内容が理解する事が出来ず、とりあえずその場から
離れるという選択肢をとろうとしたのだが・・・

「あ、ぜ、ゼロ！！ついでに、レイヴン達も！！少し待っていて下
さい！緊急事態なんです！！」

「・・・なんですか？先生」

「って、僕達はどうしてなんですか！？」

ついで呼ばわりされたレイヴンがクラウスに抗議の声を上げた
しかし、レンカとソフィアはそれをスルーしてそのまま話を続けた

「緊急事態って・・・何かあったんですか？」

「・・・何が起こったの？」

「・・・え？僕だけ？何この心の中にある寂しい感情「レイヴン黙れ。」救いは、救いはないんですか!？」

レイヴンがいじいじとその場でいじけていたが、ゼロがバツサリとレイヴンの言葉を遮った

レイヴンはその場で片手を目に当てて、泣いたフリをしていた
それでも無視を続けるレンカやソフィアに若干呆れながらも、レイヴンはいじいじしながら話を聞いた

「実は・・・あのポスク山に、ティガレックスが現れたんだ。」

「・・・で、僕達十文字に依頼を？」

「まあ、そうだね。古龍観測局も最近忙しくてね・・・調査中にティガレックスが現れてね・・・困ってるんだよ。」

ようやく復活したレイヴンが真剣な表情でクラウドを見つめた。先ほどいじいじしていなければ、威嚇は保てた物を・・・本当に残念である。

クラウドが腰に下げたポーチから依頼書を取り出すと、ゆっくりとレイヴンに渡そうと手を差し出した。

「いいでしょう。ポスク山にいるティガレックスが被害をだなさいうちに、とっとと狩りましょう。」

依頼書を手に取りうとした瞬間だった

「待ええてイ!!!」

突然、クラウドの手にあつたはずの依頼書が宙を舞った。というのも、物すごい暴風で吹っ飛ばされたというのが正しいだろう。雄叫びと共に依頼書が宙へと舞い、その雄叫びの発信源である、教官の手元に依頼書がひらひらと落ちた

「デンリ！！今は一刻を争う緊急事態なのですよ！！とつとと依頼書を返して下さい！！」

クラウドが教官の手に渡った依頼書を奪還しようと、教官の腕に飛び付いた。しかし、190センチ以上ある教官の巨体に阻まれ、高く挙げられた腕に届く訳もなく、クラウドはぴよんぴよんとその場で跳ねていた。

「まあ待てクラウド。俺に良い考えがある。」

そういつて、教官はにやりと笑い、その視線をゼロへと向けた。ゼロには薄らと嫌な予感がしていたが、不思議とそれは嫌ではなかった。

「い、良い考えって・・・」

「ゼロ、お前がリーダーをやれ。」

そういつて、教官はゼロに依頼書を渡そうと手を下げた。しかし、レイヴンやレンカはその場で動こうとした。なぜなら、ゼロはもう二度と自分達と戦わないと思ったからだ。それは、昔のゼロがレイヴン達と決別してしまったからという名残だろう。

「・・・だと思ったよ。」

はあく、その場でため息をつく、ゼロは真つ赤な髪を掻いた。そして、左手で依頼書を受け取ると、ゆっくりと自分のレックスXヘルムが置いてある自室へと向かおうとした

「ぜ、ゼロ！？い、いいの！？」

「？何がいけない？」

廊下の曲がり角を曲がろうとしたゼロを、レイヴンが止めた。その理由は“動揺”。過去に失ったはずの仲間が、今一度自分達の元に帰ってこようとしているのだ。動揺の他には、幽かな興奮も含まれていた。

しかし、ゼロはきっぱり言い放った。

「別に、俺は十文字に戻る気はない。俺はもう過去の団長だ。今さら帰ってくる義理などない。」

「じゃ、じゃあなんで！？」

「・・・俺がお前の仲間だからだ。夕暮れには出発するから、準備をしっかりとっておけ。」

そう言い残し、ゼロは曲がり角を曲がった。その姿を、口をあけたまま見つめるレイヴン。しかし、その頬は幽かに緩んでいた。

「・・・なんだよ。やっぱ、お前は俺の最高の仲間じゃん・・・」

レイヴンが小さく呟いた。そして、振り返り、静かに言った。

「だってさ！今回、ゼロが来てくれるって！とりあえず、僕は準備を進めてくるから、レンカもソフィーも、ちゃんと準備してよ！！いい！？」

そういつて、レイヴンは子供のようににはしゃぎながら廊下を走った。レンカとソフィアはお互いに見つめ合い、静かに前へと進んだ。

「ソフィー、今回はいつも以上に張りきっているな。」

「そう？」

レンカは、嬉しそうに前を歩くソフィアの事をじっと見ながら言った。

それに対してソフィアは嬉しそうに頬を緩ませながら歩いていた。

「ゼロと一緒に狩りにいけるのが、それほど嬉しいのか？」

「……はあ……これだからデカ乳女は……」

「おい！本当に憐れんだ目で私を見るな！！」

「……いい？ゼロと一緒に狩りにいけるなんて、これで最後かもしれないんだよ？なら……やる事は一つ。」

「や、やること……？」

ごくりと唾を飲み、真剣な表情でソフィアの話聞いた。そして、レンカは真剣な顔で言った

「……私が活躍して、ゼロを私の虜にするの……！」

普段クールで、言う事に棘があるソフィアはどこへやら。今ここに居るのは、恋は盲目という言葉をそのまま現した、恋する乙女だった。

「なっ!?!」

顔を真っ赤に染めたレンカがキツと凄じ剣幕でソフィアを睨んだ

「そ、そんな事はさせない!!わ、私が・・・私がッ!!ゼロを・・・と、虜に・・・/ /」

最初こそ勢いがあつたものの、後半になるとその勢いは完全に沈下してしまい、顔を真っ赤に染めるレンカ。それを見て何故か勝ち誇つた笑みを浮かべるソフィア。

やはり、見た目は違えど、この二人は似た者同士ということの表れだろう。

「.....」

ベッドの上に寝転がるゼロ。その瞳は閉じており、何か考え事をしているようにもとれる。

(.....マサムネ.....)

そう、自分を残し、消えてしまった戦友の事を考えていたのだ。人間不信で、最初の頃こそ反発しあっていたが、どんなことがあると、決して諦めず、信念を貫き通した大切な相棒……

(……俺は、お前の信念を背負っていくよ。)

ゼロは、過去に様々な死を目撃している。一つは大切な師匠の“死”。二つ目は生と死を賭け、敗北して行った者の“死”。同期の仲間の“死”。本当に沢山の物の死を目撃してきた。

しかし、心の中にぽっかり空いた穴は埋まることなく、どんどんとん広がって行くばかり……。これから、狩りという命を賭けた戦場に赴くというのに、自分はなんて……。情けないのだろう。

「……ゼロ。」

すると、一人でいたはずの部屋に声が響いた。瞳を開けると、そこには心配そうにこちらを覗き込んでいるソフィアの姿があった

「……ソフィー」

「……マサムネの事？」

「……ああ。」

気付いていたのか……。自分が、まだマサムネの死を受け入れていない事に。だが……。どうしても、信じられない……。いや、信じたくないのだ……。何も護れず……。 “失った” という虚無感を

「・・・大丈夫。」

そういつて、ソフィアは寝ているゼロの上に抱きついた。不思議と、重さはなく、まるで温もりを持った人形を抱きしめている感覚だった

「・・・さつき、私が言った事覚えてる？」

「っさつき？」

「・・・くん・れん・ちゅ・う」

「あっ・・・」

『・・・私は・・・ゼロの特別な存在には・・・なれないの・・・？その・・・恋人・・・とか・・・』

脳内で、ソフィアが潤んだ瞳で呟いた。邪念を振り払うように首を横に振るうと、ソフィアが頬に手を当てた

「・・・私、諦めてないからね・・・？絶対、ゼロに好きになって貰う。」

「・・・凄い自信だな・・・」

「ううん・・・実を言うと、自信はないの。でも、私はゼロが好き。だから、ゼロに私の良さを知ってもらいたい。・・・私の夢は、お嫁さんだから」

「・・・俺じゃなくても、いいだろう？」

「・・・訂正。ゼロだけのお嫁さんになりたいの。」

なんと一途な子だろう。自分のせいで未来を変えられてしまったというのに・・・自分が傷つけてしまったというのに、彼女は一途な想いをゼロに届けている。それだけで・・・とても嬉しかった。

「・・・私も、ゼロの事もっと知りたいし・・・ゼロも、私の事・・・知って欲しいの」

「・・・すまないが・・・俺は・・・」

「知ってる。ゼロが、鈍感で朴念仁で、どうしようもない人だったのも分かってる」

グサツとゼロに言葉という矢が刺さった。そんなにストレートに言われると流石に傷つく

「・・・でも、そんなゼロだから好きなの。」

そういって、ソフィアはゼロの頬にキスをした。それは、ほんの数秒のできごとだったのかもしれないが、ゼロとソフィアにはとても長く感じられるほどの時間だった

「・・・本当は唇にしたいけど、今日はここまで。」

「あ・・・ああ・・・」

ソフィアはゼロの上から退くと、ゆっくりとドアの方まで歩いたそして、ゆっくりと振り返った

「・・・ゼロ。」

「・・・なんだ？」

少し間が空き、ソフィアが呟いた。

「・・・愛してる」

「なっ!？」

「・・・またね」

「お、おい!!・・・行っちゃった・・・」

開け放たれたドアからソフィアは出て行ってしまった・・・自分の中の想いを告げて。

しかし、その言葉が、ゼロの心にぽっかりと空いてしまった穴を埋めてしまった

・・・今の自分は、彼女の想いに答える事は出来ない。復讐を終えていない自分など・・・

(ッ!!・・・馬鹿だな。俺・・・)

そう・・・心の中で、あの黒竜に「復讐」という黒い感情を抱き過ぎたのだ。

そして、自分が余りにも矛盾している事に改めて気がついた。

レンカがランポス達に復讐をしていたのを止めたのは誰だ？それだけでは勝てないと教えたのは誰だ？・・・復讐に囚われるなど言ったのは・・・

「俺……だな。」

今さら、昔の自分の言った言葉に学んだ。そして、過去の自分に説教されている自分が余りにも可笑しくて笑みがこぼれてしまう

「……よしッ!！」

もう、心の壁を作るのは止めよう。今では、信じる仲間達が居る。嘘で取り繕ったこの仮面を……そろそろ脱ぎ棄てるのも悪くないだろう。

「……治すのに、時間かかるだろうなあ……」

昔の自分のように……明るく喋る事ができるだろうか？また……あの子の怯えた目で化け物などと呼ばれるのだろうか？数々の不安はある。しかし、その不安を乗り越えてこそ……ゼロ・ダークネスという人間だ。

「……ソフィーには謝らないとな。レンカにも……」

今さら、昔手放した仲間達の事が羨ましくなった。恐らく、ゼロが望めばもう一度、十文字に帰ることができるだろう。レイヴン達も快く迎えてくれるだろう。しかし、自分には……やるべき事がある。

「……黒竜“ミラボレアス”……俺は復讐のためにお前とは戦わない……」

レックスX装備一式に着替え終わり、ゼロは拳を握りしめた。その

拳を天井へと突き刺すように大きく突きあげた

「俺は……一人の“挑戦者”としてお前に挑むぜ……!!」

そういつて、ゼロは部屋から出ていった。

第二十六話 懐かしき山（前書き）

お久しぶりです。リユウガです。

いやー・・・プロットの無い状態でこの小説を書くのはキツイです
ね・・・

おまけに、中々思いつかないので、ちまちま思いついたことしか書
けないのもあって、短いです。そりゃあもう短いです。

こんな駄目作者ですが、見捨てずにいてくれると嬉しいです。

では、どうぞ

第二十六話 懐かしき山

太陽が沈み、赤く染まった大地・・・
その大地に雪が降り積もり、幻想的な光景を生みだしている。

夕暮れを背に受けて、赤く染まったとても大きな雪山へと竜車を走らせる狩人達ハンターの姿があった

アプトロスが竜車を引っ張り、着々と目的地へと進んで行く
竜車の上で矢の調整をするソフィア。しかし、何故かロープを巻いて身体を隠していた。そして、竜車の中心では、太刀に刃零れが無いかを確かめるレンカ。そして、竜車の端の方で自分のアイテムに不備が無いかを確認するレイヴン。そして・・・

「・・・」

無言でアプトロスの手綱を引くゼロの姿。背中には、漆黒の闇を具現したかのような双剣、封龍剣【超絶一文】が薄く煌めいていた。まるで、これから狩りに行く目標ターゲットを闇に誘うかのように・・・

「随分と本気ツメな感じで来たねー。」

「・・・なんだレイヴン？俺が本気ツメになっちゃいけないのか？」

「いんや。別にそういうわけじゃないよ。」

竜車の操縦席に座るゼロの隣に飛び乗るレイヴン。その顔はいまだににやけていた

「・・・なんだよ？」

「いいや・・・なんか、嬉しくてさ。」

「俺と一緒に狩りに行ける事がか？」

「そつ。君と最後に狩りをしたのは、何年前だったかなあ・・・」

思い出話を語りながらゆっくりと竜車は目的地を目指し歩いて行く。時折小石に躓きグラツと揺れるが、今のレイヴン達にはまったく関係が無かった

「ゼロー、腹減ったー」

竜車に引つ張られる貨物車の上でガルルガXヘルムを脱ぎ捨てたレンカが寝転がっていた。紫で統一されたガルルガX装備の中にうっすらと見えるレンカの桜色の髪の毛が美しさを引き出して、とても綺麗だった。その姿に一瞬目を奪われてしまったゼロは数秒の間固まっていた

「・・・ゼロのえっち」

「なっ!？」

音もなく現れたソフィアがゼロを抱きしめた。いつの間にか、レイヴンの居た場所に座っており、先ほどまで自分の話していたはずのレイヴンはどこかへと消え、近くからレイヴンの叫び声のような物が聞こえた

「そ、ソフィーお前・・・ッ!？」

「・・・どうっ？」

まるで自分の装備を見せびらかすように言うソフィア。しかし、その格好があまりにも露出度の高い物だという事を知ってのチヨイスだった。

彼女が身に纏っている装備・・・それは・・・

「な、なんでキリン装備!？」

そう。性能や防御力は申し分がないのだが、露出度に問題のある事で有名なキリン装備でやってきたのだ。勿論、未だに恥ずかしいのか、頬が赤く染まっている

「だ、だって・・・ランナーとかついてるし・・・」

「だ、だからと言ってだな・・・」

「ソオオオオフィイイイアアアア・・・!!」

大胆な格好でゼロを射止めようとするソフィアに対して、対抗心をむき出しにしたレンカが睨みつけている。それはもう、凄い眼光で

「・・・ふんっ。」

しかしソフィアは「何？私達に何か用？」みたいな目でレンカを見下していた。ゼロがそそくさと逃げようとした瞬間。ソフィアの腕はがっちりゼロの左腕を掴んで、腕と胸で挟んでゼロを逃さなかった。「もう嫌だ・・・」と小さく呟いたゼロの声ははかなく散った。それを見たレンカは本当にイラツときたのか、笑顔でソフィアに話を振った。・・・勿論、笑ってはいるが、瞳にはどす黒い何かを創

造する殺気が含まれているが・・・

「まさか、その装備でくるとはな〜・・・鉄壁の要塞と噂のソフィア・ラックスが一人の男の為にそこまでするのか〜。凄いな〜憧れちやうな〜」

「何？言いたい事があるならばつきり言えば？といつても、ゼロ関係なら受けつけないけど。」

挑発的な態度でレンカの言葉に返事をするソフィア。両方とも、目が笑っておらず、とてつもないドス黒いオーラを身に纏っている。そんな二人に挟まれて、今すぐこの場から去りたいという気持ちの心一杯に溢れるゼロであった。といつても、逃げようものなら「殺しちゃうぞ」みたいな雰囲気を出している二人からは逃げる事ができなかった。

ちなみに“鉄壁の要塞”というのは、ソフィアの異名である。弓矢での的確な援護や、人当たりの良い性格からそう呼ばれるようになったらしい。

「なあに、簡単だ・・・ちょっと語り会おうじゃないか。拳で」

「嫌よ。顔に傷がついちやうじゃない。」

「安心しろ、主に狙うのは腹が顎だ」

「ゼロお・・・なんか、あの単細胞生物が私と貴方の子供を・・・」

そういつて、ソフィアはゼロに抱きついた。その一言で、レンカの中にあったはずの何かが砕け散った。

獲物を手にとって、そのままソフィアに斬りかかったのだ

「ソフィアアアアアア!!!」

レンカが斬りかかってきた瞬間、ゼロとソフィアは同時に離れ、攻撃から逃れた。ただ、ソフィアはアクロバットな動きで空中で二三次回転した後、レンカの後ろに着地したのだ。なんというか、過激な子だ。

「ふんっ!!何よ、胸だけがデカイだけで料理も不得意じゃない!」

「胸は関係ない!!それに、料理はゼロが作ってくれる!!」

いつの間にかソフィアが投降したナイフの雨がレンカを襲った

それを最小限の動きで回避、そして撃ち落とした

というか、彼女は最初から自分が努力して料理を作ろうとは思わならしい

「・・・勘弁してくれ・・・」

目の前で繰り広げられている状況に目を向けてられないのか、ゼロが小さくつぶやいた。もちろん、返事など帰ってくるわけがなく、返事の代わりに竜車に追いつこうと全力疾走しているレイヴンの姿が見えただけだった

ようやく、レイヴンが竜車に追いつき、ぜはぜはと息を荒くして竜車の貨物車に横たわっていた

「ぜえ・・・ぜえ・・・た、戦いに向かう前なのに・・・なんでこ

んな事に・・・」

「・・・苦情は俺じゃなくてソフィーとかに言ってくれ」

「・・・だってレンカ。暴拳に出るのもいい加減にしろだって」

「名指しで呼ばれてたのはお前だろう。私は何もしてない」

「・・・勘弁してくれ・・・」

仲間達のじゃれあい(?)を見てゼロは小さく呟いた。

息絶え絶えのレイヴンと目を合わせないレンカとソフィア。

しかし、ゼロは笑っていた。心では呆れている物の、変わっていない三人を見て安心した笑みを浮かべているのだ。

「・・・さあて、そろそろ到着か。」

自分達を見下すように佇むとても大きな雪山・・・

山の下に生い茂る草達は冷たい風を受け、勇ましく育つ。その草を食べ、大きく成長していくポポやケルビ達。その草食獣を食べ、成長する飛竜・・・

これこそが自然の摂理・・・自然の在り方・・・自然の美しさ・・・自然の残酷さ・・・

その全てを物語るように山は佇んでいた。とても大きく、全ての生き物たちを見守るように・・・

「・・・久しぶりだな。ポスク山。」

何度も、この山にはお世話になったものだ。不思議とそんな言葉が漏れた。この山から自然の重みと言う物を学び、かけがえのない友

との絆を繋いでくれた……この山には、もう来る事はないと思っていたのだが……

「……ふっ……」

どうしようもないくらい嬉しい。それもそうだ。

何年も経過しても、自分を親友と認めてくれる大切な元相棒。

何年も変わらぬ思いで自分を見つめてくれる大切な戦友。

何年も自分とぶつかり合い、それでもずっと自分を支え続けてくれた大切な友達。

そして……何年も変わらず、“自然”という厳しさを教えてくれる先生（雪山）。

「……もう、ここには来ないと思っていたんだが……」

竜車の手綱を置き、ベースキャンプに降りたつゼロ。そして、何年も変わらぬままに存在するぽっかり空いた空間……そして、ベースキャンプセットが赤い納入ボックスの中に綺麗に置まれているのを確認すると、静かにポスク村を見つめた。

「なーにいつてんのさ。いつでも来なよ。僕達も大歓迎だからさ」

「……ゼロ、一緒にキャンプセット組み立てよ？」

「ゼロ、私と一緒に食材の調達に行かないか？」

ゼロの後から竜車を降りたレイヴン、ソフィア、レンカはゼロに近づき、嬉しそうに言った。

勿論、ゼロが雪山を見つめている後ろでは、レンカとソフィアが目線で火花を散らしていた

レイヴンはゼロの真横に立ってゼロと一緒に雪山を見つめていた。そして、右手を上げてある一点を指差し言った

「あの辺りだよな？僕と君が転げ落ちた場所って」

指の差されていた場所は雪山の雪と大地の裂け目辺りだった。

ああ・・・そういえば、あそこの隙間に挟まったんだっけ・・・

「そうだな。大体、あそこだな」

「いやー、あの時は怖かったよー・・・ゼロ、目え覚まさねえし。

ギアノスの巢の近くだったし。あのままゼロが起きなければきっと食べられてたかもなあ・・・」

「・・・そうだな。それと、話し方。元に戻ってるぜ？」

「そういうゼロも昔っぽく喋ってるけど？」

お互い見つめ合い、そして・・・

「ふふふふっ・・・」

「ふっ・・・」

お互い、小さく笑いあった。そして、レイヴンが右手を上げてゼロを見つめた。

それを見て、一瞬きよとんとしたゼロだったが、何かを悟ったのか、ゆっくりと手を上げた

「今日も狩り・・・」

「頑張りますか」

そういつて、お互いハイタッチして、ゆっくりベースキャンプの方を振り向いた。

すると、何かを口論しているレンカとソフィアが目線に気付いたのか、距離を置き、二人揃ってゼロの方へと歩み寄った。

「ゼロ！私と食材の調達に行くぞ！！来なければ、真っ二つにするからな！！」

「ゼロ・・・ベースキャンプ一緒に組み立てなかったら・・・串刺しにするから。」

「オーケー落ち着け。まずは何があったのか話してくれ。そしてソフィアは弓矢を構えるな。レンカも得物を下げろ！！」

早速ツツコミをいれつつ、ゼロは少し嬉しそうに言った。

やはり・・・レイヴン達と数多の戦場を駆け寄った日々が懐かしいのだ。そして・・・何より嬉しいのだ。

「・・・はあ」

小さなため息を一つ吐き、そのままベースキャンプのおさめられている納入ボックスへと向かうゼロ。

後ろの方では、未だにレンカとソフィアが喧嘩をしており、その二人を無視してベースキャンプを組み立てるレイヴンの姿があまりにも不憫だったため、手伝ってやることにしたのだ。

余談だが、レイヴンと一緒にキャンブセットを組み立てていたら、「このホモ！変態！死ぬ！！」とレンカに罵倒された挙句、ソフィアからの無言の視線がずっとゼロに突き刺さったのは言うまでも無い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4368i/>

狩人物語 ~ 絶龍人物語 ~

2011年4月23日14時20分発行